

あはせいとなみ たき物を

さをしかのつまにすめる 萩を鹿のつまとよめる萬葉
に多し

をさく御心うつし給はず 萩はもとより香なし女郎

花は古今にめには見えねど香こそしるけれとはよみ

たれどさせる香もなければなり萬葉に萩をかりほの

やどりにほふまでとよめるはいろをいふを或説香と

いへるは誤りなり

老をわするゝ菊 貫之集「昔人の老をとむといふきく

は百年をふる花にぞ有ける

ものげなきわれもかう 狭衣に「むさしの、霜がれに

見しわれもかう秋もおとる匂なりけりともいへり

されど此花のことおのれはよくも去らず考ふべし

かゝるほどに 地

すこしなよび 匂宮は

源中將 薫

此宮 匂

きしろひ 競争

いどましく 挑

こゝろときめき むこにと思ふなり

宮は 匂

冷泉院の一宮 致仕大殿の女弘徽殿ばらの宮なり

母女御 こきでん

薫宮 女一宮

いとや 匂の宮

中將は 薫

さしあたりて 記者のいふ

十九になり給ふ年 細或説薫十四より十九までの事爰

に見えたり次の紅梅巻にては又立かへりて此前の事

をいへり箋の巻なる故年のましはりあるなり

三位宰相にて猶中將もはなれず 或説に薫三位中將な

りしが宰相に任じて宰相中將になりたるなり且此巻

より椎木まで宰相中將と見ゆ此五巻入亂れて見分か

たし

みかど 冷泉

后 秋好

心のうちには身を思ひ去る方有て 柏木の事

三の宮 匂

院の薫宮 冷泉女一宮

みるにも 薫の

ひとつ院のうちに 冷の

人のありさま 女一宮をいふ

おなじくは 薫心

大かたこそ 冷泉院の薫への御おもむけなり

薫宮 女一宮

わがかく人にめでられんと 記者のいふなり心よりめ

でられんとするにはあらずおのづからの風流なり

思ひよれる人は 薫へ

いざなはれつゝ 心の引かたにさそはれてなり

三條宮 女三

つれなきを 薫の

みるもくるしげなる 宮仕の人々

さもあるまじきゝはの人々 宮仕の人々

見所ある人の 薫

心にはからるゝ かひなき事とは思ひながら薫を去た

ふ我心にはからるゝやうにてなり

みすぐさる つれなきをも

宮の 女三

み奉らん 薫を

思ひの給へば 悦に

右のおとやもあまた 或説夕霧の御娘を一人は薫へ又

匂宮へとおもひ給ふなり

ひとりくはと 薫と匂へ

ゆかしげなき 夕霧と兄弟なればなり

この君だちをおきて 薫匂

やんごとなきよりも 雲井の腹よりも

内侍のすけばらの 惟光が娘五節なり

おとしめざまなるべきしも おとりばらなれば

かくあたらしきを 六の君の事なり

心ぐるしうて 夕霧の

一條の宮 落葉

もたまへ 持たまへるなり

さうくしきに 落葉の方

わざとはならで 夕心

此人々 薫にも匂にも

みせ初ては 六君を

心とめ給はん 六君

いつくしう 嚴

ものこのみせさせて 琴歌など

のり弓のかへりあるじ 薫廿歳の正月なり賭弓はてゝ

勝方の大將の里亭にて遊藝といふ事をせらる此時夕
霧右大臣左大將にて六條院にてこれを行ふまけ方の
人は必早出する例なり薫宰相中將はまけ方なり

心ことにし給ひて 夕の

みこをも 匂宮

その日 のり弓の口

さぶらひ給 内裡に

后ばらのは 明石中宮の御腹

兵部卿の宮は 匂宮

四のみこ 今上の御子匂の弟

例の左 左右にわかつてる時先初めは左勝様にする事よ
ろづにまかなりあながちといへる是なり

大將 夕

兵部卿 匂

ひたちの宮 四のみ子

后腹の五のみや 明石中宮の御腹の中務宮なり

宰相の中將 薫

みこたちおはします御送りに 夕霧の薫へ

おしとやめ 車なり

御子の衛門督 夕の君達

いざなひたて、 夕の

やゝ程ふるに 遠き心なり

入給ふを 六條院へ

佛の御國にかは 六條院の體

まん殿のひさしに 此度は賭弓の遊藝にて中少將を專
らとして奥の座に着しめみこ達は垣下とてあるじ方

の意にて端の座に着給へりさて垣下はもとはかいも

と、云て主方の人々厨屋に居て主の助をし客人をあ

えしらふ意の名なり今も遠江人は臺所をかいもと、

いへり古言はゐなかに残れる事知るべし既に夕霧入

學の時博士の語にかいもと、いひたりこゝにえがと

有は此時爰にもいひつるか又かいもとの意にて垣下

と有しを後にえがと書しにや

えか 垣下なり

上達部の御座 同じ垣下なり

もとめ子舞て 諸説云かへりあるじの時求子を將監以

下舞なり或説に風俗のやをとめをもとめことかける

なり河八處女風俗拍子各六やをとめはわがやをとめ

ぞたつやをとめたつやをとめ二段神のますこのみや

しろに【神のやすとも謠ふなり多田好方が説】求子

の歌拾遺集にはじめて平野祭に男使たてし時うたふ

べき歌とてよめる大中臣能宣「千早振ひらの、松の

枝しげみ千世もやちよも色はかはらじ

かよれる袖 こはいと上にいひつる如くかはことおこ

す辭にて心なしよるはかたよるなり

例の中將 薫

やみはあやなく 折ふし月なき頃なればなり古今「春

の夜のみはあやなし梅花云々

おとやも 夕霧も薫を

かたちよういも 薫の

右のすけも 中少將は近衛のすけなり細薫はまけ方な

れど此亭にては事をとりなすべき物と夕霧の、給ふ

なり

まらうとだたしや 客人めきたるとなり

にくからの程に 薫の

神のますなど 八少女の二段を薫の助音せり河海或説か

へりあるじの日一方の大將風俗の神のますといふ歌

をうたふ定れる事なり

源氏物語新釋

紅梅

此卷は大納言殿紅梅の枝を折て匂宮にまゐらせしより多く同じ梅の事あれば名とせりさて紅梅大納言の傳なり此大納言は竹川の末に右大臣と成給ふといひそれにつぎて薫中納言と成し事見ゆ然るに此紅梅の卷の末に薫をば中納言と書て紅梅をば惣て大納言とのとのみ有は此二つのうちに一つは必誤りなり凡此物語雲隠より下はいまだよくもてうじ合せぬまゝにて傳れる物と見えてかゝる事も有なり是を助けいはんとてさまざまにいへる説あれど皆ことわりなし且椎本にも薫中納言と成し事あれば竹川の中末と椎本とは同じ頃の事なり扱紅梅は此大納言の事を専ら書しに大納言とのみ有からは竹川の末よりは前の意にて薫は猶宰相とは書つらんかしよりて今有ごとく紅梅竹川とつゝきたるを用ゆべし且此卷にては二十許にやあらんまぼろしと此卷の間に十五六年をこめたりと見ゆ

故致仕のおとや 致仕大臣薨の事爰に始て見えたり昔の頭中將なり
衛門督 柏木
わらははより さか木卷に高砂うたひし人なり
らうくゝ然う 細上崩しきなり
もとよりのは 細誰人ともなし
後のおほきおとや 今上の御代に前に二條太政大臣有て致仕し給ひ後に毘黒太政大臣と成給へば毘黒を後のおほきおとやといはへり此前後の稱はかの忠仁公を前のおほきおとやといふがごとし後世に官を辭してより前の云々といふとはことなり或説に野路の大きおとやといふとて夏野公を例に引たれどさらば此文に野路てふよし又も有べきをこゝにのみふといふべきにあらねば此説は物をよく思はぬものなり
式部卿 紫上の父眞木柱の外祖父なり
故兵部卿 或云螢兵部卿宮なり幻卷と此卷との間十七八年なり其中に致仕大臣螢兵部卿の薨毘黒太政大臣などの事をこめたり
忍びつゝ通ひ 紅梅の大臣の御子は 紅梅大臣の御子

按察大納言 後に紅梅右大臣といふ是なり

女二人 麗景殿の女御と中君となり

今のはら 眞木柱

をとこ君 大夫是なり

古宮の御かたみに 或云横柱君の腹に螢の宮の御女

人紅梅の方に住給ふ匂宮のおもひかけ給ふなり

思ひきこえかはし 紅梅の

御かたの人など 故北方の人なり

いとほれくしう 物を心にこめぬさまなり

我御方さま 北の方の爲に

聞なし思なほし まがつ事をも神の聞なほし見直し給

ひてといふ事は古事記又祝詞にも多くある語にて此

國治め給ふ道なり

すぎく 次

御もなど 御裳着

七けんのおん殿 七間四面なり

大納言 紅梅

おほい君 前の腹

中の君 是は今の腹

宮の御方 兵部卿宮の姫宮

大かたにうち思ふ 宮の御方の事をいふ

ちゝ宮 螢

こなたかなた 父宮祖父宮よりの御ゆづり

けはひあらまほしう 宮の御方の

例のかくかしづき 紅梅の娘だち

内 今上

内には 紅梅心

中宮 明石中宮の

左の大いどのゝ女御 夕霧のむすめ三條上腹

女子 をんなごとよむ

まゐらせ奉り給ふ 東宮へ

十七八の 大い君

うちすがいて 打次てなりかひの反きなりすぎは次と

同じ

見せまうき 直人には

兵部卿 匂宮

此わか君 横柱の腹にて後に大夫君といふ紅梅の子な

り

まとはし 纏なり

心ばへ有て 大夫の君

せうとを見てのみは 匂宮の宜ふ そのあねなる人を

ふくみでの給へば凡人とはいふなり且其女子の弟なれどもせうと云事は空蟬の巻にもいひつ

の給ひかくる 句の

さなんと聞ゆれば 父紅梅に

うちゑみて 紅梅

まづ東宮の おほいきみ

春日の神の

今の都となりて春日のすめ神の詔に藤氏より必後の立給ふべき事有しにやあらん正記には見ゆるものなし花鳥に云後朱雀院の御宇長暦三年四月

春日明神被訴由大神宮亦度々官幣不請之依非藤氏皇

后也依之内大臣教通公一女可入内之由被宣下其年十

二月内大臣女入内爲女御春海考るに此花鳥に引

たるは此物語より後の事なればこの詔になしがた

けれどかゝる神のちかひ古く有しこと故長暦の時も

この諸宣ありしなり此物語より以前さる事を語傳へ

たる事の有し

こおとや 紅梅父致仕相國

院 冷泉

女御 弘徽殿

むねいたく 秋好におされて后と成給はざりしをいふ

参らせ給ひつ 嫡女を春宮へ

かゝる御まじらひ 大君の内裏に

北の方そひて 横柱

まことにかぎりもなく 或云まはの心ざまを前に

ほめたればまことにといへり

殿はつれなく 紅梅の御でん

にしの御方 中の君

ひとつにならひ給て 南の御方と一つに住ならしたれ

ばなり

東の姫君 養兵部卿御女なり

こなたを師のやうに 宮の君に中君などのならひ給ふ

なり

物はちを 宮の姫君

母北方にだに 眞木柱にさへ

かく内まわりや 紅梅の心 大い君の入内

我がたざまをのみ 紅梅の娘ばりを有つくるを云

心ぐるしなど 宮の御方母君などの心を思ひて

さるべからん 紅梅詞

おほしさだめて 宮の事を母君

同じごとくこそ 御子と

母君にも 横柱

さらに 母君

中々ならんと なまじひのむことりなど

後ぞ哀れに 北の方なからん後なり

よをそむく 尼なり

うちなげき 歎息なり

いづれもわかす 紅梅大臣

かくれ給ふこそ 詞

人まれす 心

たえてかたそばをだに 宮の物ふかきを知べし

うへおはせぬほど 母上春宮にます間

たちかはりて 上のかはりにおとや

うとくしくおぼしわたる まゝ父を

御いらへ 宮

おもひやられて 紅梅の

この君に 宮の

いとしいふかしう 此大君の麗景殿東宮へまわり給ふ

前より夕霧のおはい君まわり給へり此人のかたちな

ど増れるもまらぬ世中ぞとおぼすなり

月ごろ 紅梅の語

西の方に 中の君

さもまねび 河内木にこもまねびと有

なまかたほに 琵琶は大方に學びては聞にくき物なり

と云なり

をしへさせ 前にこなたを師のやうにと有

何事にも 絲竹の音の方にていふ

あそばさねど 紀に樂にも云たり

故六條院 源氏

左の大臣 夕霧

源中納言 竹川の巻に左大臣うせ給ひて右は左に藤大

納言左大将かけ給へる右大臣になり給ふ次々の人々

成あがりて此かをる中將は中納言に云々かゝれば薫

を中納言とかゝば紅梅はいよく右大臣と有べきを

此巻の末にも大納言とありこは記者の違なるべし書

をかくには意と文とに心をよすれば物の數とか様の

事にはふと誤る事も常なり

兵部卿 匂宮

おとやにはおよび給はず 或云琵琶は撥にてあらくあ

たる物なればやはらぎひくべき事上手の物なるべし

今の匂薫は手品がかりは古にもまさるべけれど引去

づめてやはらかなるは夕霧に及ばぬとなり
此御琴の手こそ ことゝは此類を惣ていへる事前にも

ありこゝは琵琶なり

いとよくおぼえ給へれ 上手の琵琶におのづからよく

かよへるなり

おして 押手にて左手なり

ちうさすほど 柱をおしてひく事なり

なまめかしう聞えたるなん 女の物やはらぎてまどけ

なきが中々興あるとなり

御ことまのれ 琵琶を御前へまゐらせよなり

女房などは 地宮の御方の

心にまかせてゐたれば 御前へも出ずして居るをいふ

べし

さぶらふ人さへ 大臣

わか君 紅梅息大夫

とのゐすがた 雅亮裝束抄にあびみづらは上にて結び

て末をたれさげみづらは下にてむすびてたるゝよし

委しく書きさて童の束帯の時はあげみづらなりとの

ゐすがたの時はさげみづらにてこゝもひくゝ結びた

れたるが中々をかしといふなり或説には右の抄を見

ぬ故こと様にいへり

わざとうるはしきみづら

おぼしけり 紅梅

麗景殿 紅梅の大きい君

ゆづりきこえて

若君に對ひて紅梅の宣ふ 上に御こ

とづてといひ下に聞えよとの給ひてと有からは北の

方へまか申せとわか君に仰らるゝなり或説に若君に

ゆづる意と有はわろし

双調 地 春の調子

けしうは 紅梅

このわたりにて 宮の御方をいふ

物にあはするけなり 合奏

なほかきあはせさせ給へ 宮の姫君への給ふ

くるしとおぼし 宮

つまびきに こは調を手の限して合せて扱かきならす

は爪かけて彈給ふをいふと見ゆ後世樂家の説にいに

しへは爪を別にかけて我爪にて彈つといへどいにし

へのことの音高く遠く聞えたる事をいへればわが爪

の限して彈しともおぼえぬが上こゝにわざと爪びき

と書たるにも別に爪有し事々たる又何やらん

後世かける物に延喜の御代の人琴の爪失ひて尋ねあ おぼし給はぬは 似通はぬなり

りきし事侍りしも是其大意は實ともなければど爪有し 猶たぐひ 源は

より所に侍り猶其本考べし 心のなしにや 思ひしといふに同じ

かはぶえ 竹にて作る笛に對へて人の口にてうたふを

ば皮笛ともいひしなるべし又一本にはうそぶえと有

といへり然らば嘯のきをえに誤りたるにてたゞ嘯な

るべし今思ふに是によるべし扱うそぶき太かにと暫

切てなれたる聲してとよむべしふつゝかには年ふ いかやはせん 今の宮たち光君に及ばずとも今は

けたる男聲はふとくひやくを云ひなれたるとは此大 つかしの戀しき御かたみ 源の

納言昔より唱歌よくし給ふと前に見えたり

み給ひて 紅梅の

おまへの 此宮の

兵部卿 匂宮

去る人ぞしる 古今「色をも香をも云々

あはれひかる源 昔の事をいひ出し給ふ

わらはにて 紅梅大臣此若宮のほどの時源氏にまじら

ひしこと若君の兵部卿へのごとくといふ事をかやう

にてとはの給ふなり

此宮たち 専らは匂宮をさす

はしがはしにも 源の盛にくらぶれば

ぬ故こと様にいへり

わざとうるはしきみづら

おぼしけり 紅梅

麗景殿 紅梅の大きい君

ゆづりきこえて

若君に對ひて紅梅の宣ふ 上に御こ

とづてといひ下に聞えよとの給ひてと有からは北の

方へまか申せとわか君に仰らるゝなり或説に若君に

ゆづる意と有はわろし

双調 地 春の調子

けしうは 紅梅

このわたりにて 宮の御方をいふ

物にあはするけなり 合奏

なほかきあはせさせ給へ 宮の姫君への給ふ

くるしとおぼし 宮

つまびきに こは調を手の限して合せて扱かきならす

は爪かけて彈給ふをいふと見ゆ後世樂家の説にいに

しへは爪を別にかけて我爪にて彈つといへどいにし

へのことの音高く遠く聞えたる事をいへればわが爪

の限して彈しともおぼえぬが上こゝにわざと爪びき

と書たるにも別に爪有し事々たる又何やらん

後世かける物に延喜の御代の人琴の爪失ひて尋ねあ おぼし給はぬは 似通はぬなり

りきし事侍りしも是其大意は實ともなければど爪有し 猶たぐひ 源は

より所に侍り猶其本考べし 心のなしにや 思ひしといふに同じ

かはぶえ 竹にて作る笛に對へて人の口にてうたふを

ば皮笛ともいひしなるべし又一本にはうそぶえと有

といへり然らば嘯のきをえに誤りたるにてたゞ嘯な

るべし今思ふに是によるべし扱うそぶき太かにと暫

切てなれたる聲してとよむべしふつゝかには年ふ いかやはせん 今の宮たち光君に及ばずとも今は

けたる男聲はふとくひやくを云ひなれたるとは此大 つかしの戀しき御かたみ 源の

納言昔より唱歌よくし給ふと前に見えたり

み給ひて 紅梅の

おまへの 此宮の

兵部卿 匂宮

去る人ぞしる 古今「色をも香をも云々

あはれひかる源 昔の事をいひ出し給ふ

わらはにて 紅梅大臣此若宮のほどの時源氏にまじら

ひしこと若君の兵部卿へのごとくといふ事をかやう

にてとはの給ふなり

此宮たち 専らは匂宮をさす

はしがはしにも 源の盛にくらぶれば

れり

聞えをかさん をかすは物の間に分入こゝろなり

心ありて 紅梅歌 中の君の事をほのめかすなり古今

に「花のかを風の使りにたぐへてぞ鶯さそふしるべ

にはやるてふ意なりまつ鶯は待意なり

大夫のふところかみにとりませ きたなきさまなり

いとなれ聞えまほしと 匂宮に

中宮の 明石中宮

御とのゐ所 匂の我

出給ふ程なり 匂の

みつけ給て 若君を

きのふは 匂詞

とくまかて 若君

内におはしますと 匂の

心やすき所にも 二條院をさす

この君 大夫を

人々は 御送りの

いとますこし 大夫のなり

まとはす 練

時とられて

或云麗景殿参り給ひて後は若君のいとま

有を姉に時とられたると此若君にたはぶれてのたまふなり

若君

おまへにはしも 匂の御まへにはさぶらひよしとなり

きこえさして 匂宮へあらはに追従めきたれば申しさ

したるなり

やすからず ねたしと思ふなり

おなじすぢ 螢の娘は匂といとこなり 東の御方は宮

の御女われも同じ宮なれば相思ひ給はんやとなりふ

るめかしきとは宮時めかぬものにてあればなり

東ときこゆなるは 宮の御方

うちゑみて 匂

うらみて後ならましかば 或人云心は紅梅よりかの歌

を参らせられたるにうらみて後なくば曲なからんを

となり

色にとられて 後撰「紅の色をばかへて梅の花香ぞこ

とく」に「ほはざりける或抄に歌をとられてとて引

しは例の私事なり

とりならべ 色香

御心とゞめ給へる花なれば 本より梅をめで給ふ事匂

宮の巻にみゆ

こよひはとのゐ 匂宮内に御とのゐなればとて此若君

をめしとゞめ給ふなり

東宮にもえまゐらす 麗景殿への御ことづてあれど

かうばしくて 匂の御袖

此花のあるじは 宮の君の事なり

まらず 若君

心まらん人になど 後撰「あたら夜の月と花とを同じく

は心まらん人に見せばやてふを以て匂宮の御事を

下にそへたり上に大臣の昔戀しき御かたみには此宮

ばかりこそなどいへるを聞置て宮をまゐらせんと

事と思ひたがへしにやまた時にとりていへる心にも

有べし

我かたがま 實の子をいふ 紅梅は我むすめをと思ひ

匂宮は螢の君をと思ひし給ふなり

思ふべかめれと との字清むべし

聞あはせ給へど 是はもとよりきゝ給ひしなりとの字

濁るなり

このきみの 大夫

花の香に おもてはひげのやうにての給ひのがれ給ふ

なり

おきなども 親だちを云

さかしらせさせで 細大臣にまらせて道引べきよしを

若君にかたらひ給ふなり

この君 若宮も

東のをば 宮の御方

こと方の姫君 大夫のあねだちを云

おもりかに 宮の君

かひあるさまにて 匂へあはせて

東宮の御かた 麗景殿の女御を

同じ事とは 何れも若君の兄弟なれば

あかずくちをしけれ 宮の御方を東宮へまゐらせぬる

を

此宮をだに 此匂宮を東の殿へおはさせまして

これは 大夫詞

見せ奉る 父へ

ねたげにも 紅梅詞

すきたる方に 匂宮の

左のおとゞ 一本右のと有

ものまめやか 匂宮の

あだ人 或説に此語の意を云は皆誤りなりあだとは只
他の意なるを戀の方にては他し方々へうつる心ある
をあだ人といひなすのみ紀に他人をあだびと訓と
有は例の偽りなりさる事なし凡あだし心といふは一
方ならず他心ある人をいふよりさる心多き人をあだ
人とはいへり本あだしといふは外をいふ語なるを戀
のかたにては右の意となるのみなり

まゐらせ給ふ 後言なり

又 句へ文 若君を内へ

紅梅歌 句へ文

も匂をますべしと云て猶中君をそへ奉らん心をそへ
たり或説に兼輔集とて「もとつ香のあるだにあるを
梅の花いと匂のそはりぬる哉と引たり集には初は
もとの香の終ははるかなる哉とあり是も今に合せん
とてかへしにや

あなかしこ あゝ恐にていとあがめたる語なり

まことにいひならさん 匂の我を

花の香を 匂 とかくいひのがれ給ふとなり

人のとがめん

心やましと 紅梅の

北の方まかで 東宮より

若君の一夜とのゐして 匂宮に

人はなほと あやしき物から人は猶此君のほひと思

ひてありしをとなり

宮のいとおもほしよりて 是は東宮を申

兵部卿の宮に 東宮の仰

ちかづき聞えにけり 大夫の

すさめたり 此語に進むと退との二つ有こゝは心に冷

まじくおもひ退く方なり

おかしかりしか 北方の御近く居て

さも見えざりし 若君の引かくしてもたればなり

さかし 紅梅詞

うめの花めで給ふ 匂を云

あなたのつまの 匂の君の軒

うつりか 是は匂宮をいふ

まじらひし給はん 一本にはれまじらひ又一本花まじ

らひ嘉按るにはれはな共になきぞよからん 内のは

れがましき交りする女房もかくばかりの香をばえた
しめぬをとなり

源中納言 薫

ひとか 人香

世になけれ 又無なり

むくひにかと こは善報をいふ

同じ花の 梅はおのづからことなる匂のあるぞと源中

納言の匂よりうつりてのたまふ

ねこそ もとゝいふ意なり

此みや 匂宮

めで給ふ 梅を

花によそへても 思ふ心あれば

まづかけきこえ給ふ 匂宮を

宮の御かた 宮の君

物おぼしめる程 齡なり

人に見え 宮の御方心

さしむかひたる 紅梅のむすめ

こなたは 宮の御方

宮は御ふさひのかた 匂は我身にふさひたるべしと思

ひ給ふなり

御ふみあれど 螢の君へ

大納言 紅梅

さも思ひたちて 中の君を匂の

けしきどり 匂の

心まうけし給ふ 中君の

みるに 檜柱の

かたにしも 宮の御方

なげのことの葉 匂の

北の方も 宮をかね云

まけじの 匂宮

なにかは人の御有様 上の何かは云々は若君の御有様

匂にむかへ奉るとも何かははづかしかるべきかの父

君のおぼす方だになくはなとかはかの宮の御出入を

見まくほしからじやといふをつめ書たるなり且お

ひさき遠く云々といふは三のみこなながら行末たのも

くみたるか

おひさきとほく 匂宮の

いといたう 匂宮の様を宮の君おもほす

八の宮の姫君 宇治の中君に通ひ給ふ事椎本巻に見ゆ

まかれば推本の末はこゝに當れり
まめやかに 實になり
かたじけなきばかりに 匂のねもごろにの給ふなり
たまさかに 返しなどし給ふなり

源氏物語新釋

竹川

卷の名は歌にも詞にも竹川うたひし事有によれりさ
て此卷は専ら玉かづらの姫君達の事を書たり彼雲隠
より後は或説に人々の傳なりといふぞまことにさな
るまかるを専ら薫の君をもて系を立むとする故にか
れ是むづかしくうたがひ多くもあれども又少しは
なきにもあらねば思ふにかをるは既匂宮の卷に十四
にて侍従になれりといひ紅梅の卷の末に中納言とか
き又竹川の始には四位侍従十四五許といひて末に紅
梅大納言右大臣となりそれにつぎて薫中納言になれ
りといひ稚が本卷にも匂宮はつせ詣の所にその秋中
納言になれりと書り然れば此匂宮卷より推が本まで
は同じ年頃の事を書たりそれが中に匂宮の卷は其宮
の事紅梅卷は此大納言の事竹川には玉かづらの御子
たちの事宇治は八宮の姫君たちの事は等を書るが中
に薫を専らとかぬ卷もなく又匂宮をもつゞきては
書きさて彼卷此卷同じ頃にあたるもあれば右の如く
薫のよはひ又は侍従中納言になれる事などもかた

かたに侍るなりそれが中に猶彼是をてらすに疑はし
き事有は此物語の末の卷々をば記者もいまだよくて
らし合せ見ざるまゝに世に傳れる故にたがひもある
なるべしいかとなれば紅梅卷に薫をば中納言と書
たる後も紅梅をば大納言とのみ有是いかにいふとも
助がたし此二人の官の中必一つは誤りなる事明らか
し
これはげんじの御ぞうにも 三此語は次のあやしかり
けるてふまでに冠る語なりかく書出せるは此卷専ら
玉かづらの腹の御子たちの事を云さて此ほどもたゞ
光源氏と致仕大殿の御末のみ榮ゆるよしいへるに對
へみれば玉かづらは源の御子とし給へる物からきと
其一族として時めきもし給はず實は致仕大とゞの方
なれど後の大殿髭の盛なる頃心むらくしうて親し
うま給はざりしかばこの方の勢ひもそはで御子だち
の時めかぬをいふ序なるを次へのべ付て書るなり
後の大殿 髭黒
同じ髭黒の内ながら前の北の
方の時より傳れる女房ならんか
と濁るべからず 二は紫

の上の事にはかゝらずたゞ源の御ゆかりならば玉か
 づらの御子だちもかの秋好明石中宮などに似てたと
 ひ女御更衣と聞ゆるとも勝れて時めき男達の昇進も
 かくはとゞこほらじをおぼつかなしもし玉かづらは
 實の御子ならずやと木より實の御子ならぬをばしら
 でいふさまなり

かの女どものいひけるは　こは其わるご達の語を聞傳
 へたる女房のいふなり

ひがごとゞものまじりて　右の紫のゆかりにも似ぬと
 いふを釋たる語也　こは冷泉院も玉かづらも薫もか
 れこれおぼつかなき御ゆかりどもなりといふをいへ
 り

としの數つもあり　是はかのわる御だちに直に聞たる老
 ぼけ女なり

いづれかは　是は今物語の記者の心なり

内侍のかみ　玉かづらの事をいふ

故殿の　ひげ黒

あへなくうせ給にしかば　髭黒

いそぎ覺し、　細内参り

御みやづかへも　玉の子達

おとゞの　ひげ黒
 殿のうち　ひげ黒の御殿
 かの君　玉かづら
 ちかきゆかり　致仕大の方
 やんごとなき　大官にて身の所せければ一族にも中々
 うとき物なり

故殿　髭黒

六條院　源氏

うせ給ひなん後の　源の

中宮の　明石

くはへ奉り給へれば　玉かづらを

右の大殿　夕霧も玉へ對し

男君達は御元服などして　玉の子達右兵衛督、右大
 辨、頭中將なり

殿　髭黒

心もとなく　入官位昇進など

姫君達を　玉かづらの

うちにも　今上

おとゞの　髭黒

中宮の　明石

まゐりて　玉の御子の
 いとねんごろに　孟姫君まゐらせよと

かんの君　玉

うらみ聞え給て　冷泉の

いまはまいて　細冷詞

さだすぎ　院の御齡を申

すさまじき有様に　院となり給ふをいふ

いかゞは　細玉かづらの心

みづからの　湖玉かづらの宮づかへせで髭黒に逢し事
 なり

おぼされにしかば　冷泉に

此よの末にや　子の世をかねたり

かたちいとよう　姫君

右の大とのゝ　夕

藏人の少將　雲井腹の夕霧の五男

三條どの　雲井

をかまかりし君　藏人少將

この君達　夕の子達

けどほくもてなし給はず　玉の

うるさき物の　の字はながらの畧

かんのとのも　玉かづらもなり　女房よりうつりてと
 のもといへり

母きたのかた　雲の

いとかるびたる程に　少將の事

おとゞも　夕

姫君をば　此大い君

中の君をなん　細藏人の少將昇進も有てはゆるすべし
 となり

ゆるし給はずば　藏人少將

こよなきことゝは　あるまじきことゝは思ひ給はざれ
 どもとなり

きこえつぐ人をも　玉の人事

のたまふに　玉の

くたされて　花麿なり　此少將は中將の君と云女房に
 便りてねぎといへば中將はいかで中立もせばやと思
 ふ心の下に有を今玉かづらの仰を聞て思ひし心は腐
 されて今はもしけしからぬ事あらばいかゞはせんと
 わづらはしきなり

源
 六條院の御末に　是より薫の御事なり

朱雀院のみや　女三

生れ給へりし君 薫

四位の侍従 細説或説薫は匂宮巻に十四にて二月に侍

三條の宮 細女三宮のます所
君達に 薫黒の子達
ひかされて 薫の

従に成給ふ秋右近中將に成て御たうばりのかゝいな
どをさへと云り官中將と見ゆ然るを此巻三ヶ年の間

は四位侍従といひ或源侍従と云て中將といはずた
いひつけたるまゝに侍従と云るにや源氏君を太上天

云は互にいひまれあふ意にて辭の様同じことなれば
なり

皇の後もおとと中柏木大納言をあはれ右衛門督の

四位の侍従の 薫

といふ言ぐさになりてなどいへる類是に同じ眞淵思

六條院の 薫

ふに源氏太上天皇の後におとといひ柏木大納言を

かんのとのも 玉かづら
めやすけれなど 薫の

右衛門督など有は所につけて昔の名をよぶ事も有べ

院の 源
思ひ出聞えて 玉かづら

けれど此物語の中程までは官位などのほれるに隨て

たれかは 薫ならでは

は末に至りてはいまだよくかへり見て改ざりしまゝ

右のおとと 夕

に傳れるにやあらんかの紅梅の巻の薫中納言紅梅大

地の君 薫

納言二つの中に必一つは誤り成べき事既に云が如く

よのつねの 薫

なればなり

かんの君 玉かづら

その比十四五ばかりにて 細説或説に是は匂宮の巻の始

御はらからの大納言 紅梅の大臣此頃大納言なり

にあたり紅梅より前なり

高砂うたひしに 若き時をいふ

かんの君 玉

藤中納言 長男玉かづらの継子

此殿は 細玉の方

のゝむすめは女一宮の御母なり其女御と玉かづらは

故大殿 薫

異母兄弟なり

太郎 是も藤中納言の事なり

さきくの人 もとより宮仕望む人も

参り給へり 玉の御方へ

女御なん 玉かづら

右のおとと 夕

つれづれにのどかに 院おりぬ給ひしのも

おはしたり 玉かづらへ夕霧

ありさまも 二はのどかに成にし有様にてつれづれな

御かたち 夕霧

れば院のゝ給ふ如く女御も同じ心に云々との給ひし

きみだち 夕の御子

を省きたることばにや

としの程より 君たち

これかれ 湖大納言藤中納言など

おとといは 夕

三條のみや 女三

そのごとくならで 夕詞

六條院 源

若きをのことも 夕の君達

入道宮 女三

今はかく 玉

此殿 玉の方

過にし御ことも 源の事

左近中將右中辨侍従の君 三人ながら玉の腹なり

院より 冷泉

おとと 夕

のたまはすること 姫君の事

四位侍従 細かをるなり是は十四五許といひし次の年

内に 夕霧

の正月なり

院は 冷泉

参り給へり 玉へ

御ありさまは 御かたちの勝れたるを云

そこらおとなしき若君達も 始参り給ひし人々

此殿の姫君 玉の嫡女

これをこそ 薫を

げにいと 地

にはひ香など にはひとは色にも聲にも香にもほのぼ

のとあることをいひ香とは必物のかをりをいふ其香

は形にも見えずかをる物なればくはしくいふ時はに

ほひ香とも香にほふともいふなりさてそを轉して

は香をにはひとのみもいふによりてことの本を去ら

ぬ人はにはひとと香と二つなりなど注せるなり

姫君と聞ゆれど 細まだ世を去らぬ

かんのとの 玉かづら

こなたにと 薫を

ひんがしのはしより 薫弄念誦堂の階なり

鶯の 鶯の音のおほどかなるに薫のたゞおほどかにま

めに見ゆるをたとへていひ下したるなるべしさなく

ては文つゝかす

ことすくなに 薫

ねたがりて 人々の

宰相の君 玉蔓の女房にて六條院より有し人なり

をりて見ば 宰相の君の歌也こは古今に「よそにのみ

衰とぞみし梅花あかぬ匂は折てなりけりてふをもて
よめり

くちはやしと聞て 薫の

よそにては 薫の返歌こは古今に「かたちこそみ山が

くれの朽木なれ心は花になさばなりなんといふを下

に思ひてよめり

もぎきなりとや 細枝もなき木なり

すさぶ すさむとよむ

いろよりもと 古今「色よりもかこそ衰と云々

かんの君 玉

うたての 玉詞

おもなけれとて 萬水おもてつれなくてふ意なり

まめ人とこそ 薫のほのかに聞て

いとくつしたる 屈

あるじの侍従 玉の御子

おとやは 玉の詞夕

故院に 源

この君 薫

かの御若ざかりの 源
名残さへ 薫のまかてて後

くつがへる こは物のさかさまにうちかへるをいふを

こゝには餘りにほむるに堪ずして身をおきふす程の

事にいへり

侍従の君 薫

うれたしと 愁

廿五日 正月

すき物ならはさんかしと 下の心を見せならはさんな

り

藤侍従 玉の御子

おなじなほし姿 薫と

人たてりけり 藏人少將なり

ひきとゞめ 薫の

ひはさうの 姫君たち

心をまどはして 少將

くるしげや 細薫の心

思ふ 薫の

いざしるべし給へ 細薫藏人の少將にのたまふ

ひきつれて 地

梅がえをうそぶきて 催馬樂に梅がえにきゐる鶯云々

つまどおし明て 細内の女房

あづまを 和琴を梅がえにかき合せたるなり

薫心 女の琴にて 箏木卷に律の調べは女の物和らかにかき

ならしとありされば女は呂の方は得ぬ物なるにこは

よく去らべあはせたりと云也さて律呂の事は只陰陽

に分つのみにはあらず其本意ことなるを此國にては

はやく傳へあやまりしにやされど右はこゝに傳れる

に隨ていふのみ

をりかへし 同じ梅がえを

ひはもになく 細此琵琶すぐれたる事末にも見ゆ

うちとけて 薫

うちより 簾の中より

かたみにゆづりて 薫と藏人少將

侍従の君 あるじの侍従

かんの殿 玉かづらののたまふ

故致仕のおとや 玉かづらの父 此卷に薫の源に似す

といひ致仕おとやの爪音に通ふといひ次に故大納言

に似たるとさへあるは初に源氏の御末にひが事ども

ありといへるをてらしたり

きゝわたるを 人のいひあへるをいふなり
鶯にもさそはれ給へ 嵯朗詠詩鶯聲誘引來「花下」

あまえて 薫心

おさく心にもいらす こゝを専らと入たちて和琴を

ひかんはをこがましきふしなればなり

つねに見奉むつびざりし 玉かづらの致仕大臣を思ふ

この君は 薫

故大納言 柏木

少將も 藏人少將

さき草うたふ 此殿

さかしら心つきて 定過たる人のまじらねば物に心お

きなどいふ人なくともおもふまゝに遊び給ふをいふ

こおとやに 晝黒

ことぶき ことぶきは言祝として男踏歌に千春樂と唱る

事あり侍従の餘に聲も出さねばいとせめて千春樂と

だに唱へよと若くてうしろやすきどちなれば殿ては

づかしむるなりそれにより竹川をば打出せり踏歌に

竹川をうたひなどせる事前の卷に委し

おなじ聲 細或説に前の梅がえ此殿と同じ呂の歌をい

ふにや

すのうちより 玉かづら

えひのすゝみて 薫詞

とみにうけひかす 酒をいなむなり

かつげ給ふ すの中より薫へ

なにぞぞなど 何ぞやつきもなしと驚きさわぎてき

ぬをさしかへさんはこちなければあるじの侍従にか

づくるなり

さうどきて 騒動

侍従は 薫

引とめて あるじの侍従

みづうまやにて 竹川は踏歌にうたふにつけてこよひ

わがおもふかひもなきを水うまやといへり水うまや

前に出

少將は 藏人の

源侍従 薫にこそ皆々

人はみな 「春の夜のやみはあやなし云々の歌もてよ

めり

花に心を 薫を添

うちの人のかへし 誰ともなし

折からや をるからと訓べし「よそながら哀とぞみし

梅の花あかぬいろ香は折てなりけりといふをもて近

く親しむにこそ心の色をあはれともみれよそにうは

の空なる香のみには心うつることもしと少將をな

ぐさめてこたへたり

四位の侍従 薫

よべは 文なり

み給へと 姫君に

竹川の 此うたひ物竹河の橋のつめなるや花ぞのに我

をばはなてめざしくはへてと云をもて姫君をそへた

り

はしうち出で 橋に歌の端をかぬ

玄ん殿に 玉の

手なども 玉かづら

院にも 源

は、宮 女三

いとわかく 入手のまだとゝのはぬなり

よへば 文の詞

水うまやを 夜方はいそぎてかへり給ひし物の中々に

水うまやぞとのたまひしよとがめしなり其意歌に

てしらる

竹川に あるじ侍従の歌 よべ更るをいとひてかへり

給ひしからはおもひふかめ給ふ事なきは去るしと右

の歌をもよべのことをもとがめたり

少將の 藏人少將

侍従の君 あるじの侍従

ちかきゆかりにて 薫を聲にて

咲櫻あればちりかひくもり 「櫻咲櫻の山の櫻花咲櫻あ

れば散櫻あり

はしちかなるつみ 異義 人まげからぬ所なれば姫君達

の端ちかう花見給ふはさも有ぬべき事かされどもか

くてこそ少將のかいま見も有しなれ

十八九の程にや 姫君達

姫君は 大い君

げにたゞ人にて 御父母の内参りをおぼせばげにもと

なり

今一所は 中の姫君

御ぐしいろにて 御ぐし色と云ことやはあるこはさく

らいろを書き損なへるにこそあね君のさうぞくにな

ぞらへばこはうすき紅梅のほそ長にさくら色のきぬ

なりさてたけ高く身のほそくてなよくとし給へる

形を柳の絲にたとへて絲のやうにともいへるに泥み

て上は御かみなるべしとてさかしらに御ぐしいろと

書しならん

柳のいとやうに 是よりは形をいふ

そびやかに たけの高きなり

にはひやかなる 姉君ぞ

かんざし 髪づきなり

侍従の君けんぞ 或説に見證なりといへり律法に此字

あればさる意か又目算する爲に此君をちかくすゑた

りと聞ゆれば檢算の字歟

あに君たち 細侍従の兄なり中將右中辨の君二人なり

中將 細後に兵衛督

人におとりたる 弟になり

辨官はまいて 右中辨 辨官はことに政多きなり

わたくしの宮仕 御姫君達への事なり

廿七八の程に 中將

此御有様 姫君

いにしへ覺し置てし ひげ黒の

おもひ居給へり 左近中將の

さくらをゝらせて 姫君達の

をさなくおはしまさうし時 中將の詞

故殿は 髭黒

姫君の 大い君

うへは 玉かづら

わか君の 中の君

いとさは 中將もわらはにて

やすからず 父母の櫻を姫君達にのみまゐらせ給へる

を

此さくらの 白氏文集童稚悉成人園林半喬木

人のむこに成て 中將誰人のむことはゑらす

花に心とめて けふこの

此御有様の 玉かづら

院へ 冷泉

此君達ぞ 中將など

こゝちこそすべけれ 此事末にもあり

時につけたるをこそ 當今へこそ

いとみ奉らまほしき 冷泉院

さかりならぬ心地ぞするや おりぬし給へば

玉の詞

いざやはじめより 夕霧の大い君の東宮の女御にてお

はするをいふ

君たちは 姫君

かすひとつ勝給はん方 二番勝たるなり

花をよせてん 庭の櫻なり 湖月に例を引は中々わろ

し

人々みなねんじ聞ゆ 各我つかふる方の念人なり

うちつれて出給にければ 侍従をも中將辨君の

やをらよりて 藏人少將

さくら色の 姉君なり

それとみわきつ 姉君と

ちりなん後の 古今「櫻色に衣は深くそめてきん花の

散なん後のかたみに

わかき人々の 女房

右かたせ給ぬ いもうとの君

こまのらざう 亂聲をはぶきて云 左右の勝負ある時

かち方より亂聲出す事あり高麗樂は右方なれば今は

右勝給ふ故にかくいふ

右に心よせて 此櫻は二もとゝもにしの御前に立て

あるをむかし一本は姉君の御物と有し故に姉君は左

の御物ぞとのたまひ姉君はこなたにたてるからは玄

からすなど御あらそひ有しをけふかくみな西の御木

になりたるといふなり

にしの御まへ 妹君の方

左になして 姉君のかたなり

かゝれば 如此なればなり

なにごとゝも 藏人少將

またかゝるまざれもやと その後も

君たち 姫君

玉の嫡女歌 新撰萬葉に「鶯のわれて羽ぐゝむ櫻花お

さくらゆゑ かもひくまなくとも散る哉てふを少しかへてそれに

かのかけ物につきてかなたによりし花なれば我思ふ

心をも思ひまらぬ花ぞとはめにみながらも散は猶を

しまるゝとなり

御かたの宰相君 細あね君の方なり折てみばと薫によ

宰相君 みかけし同人なり

さくとみて かくばかりほどもなく散花なれば我方の

木とみぬも恨なしとなり

聞えたすくれば 姉君に方人したり

風に散 宰相の恨とも見すといふにあたりていへり

枝ながらうつろふ こなたの木となるなり

此御方の 中君の勝方人

心ありて 古今「枝よりもあだに散にし花なればおち

ても水のあわとこそなれ

おりて 庭に下てなり

おほ空の 勝方の童女の歌

左のなれき 姫君のわらはへの名

櫻花 大空の云々てふに答て「大空ををほふばかりの

袖もかな春咲花を風にまかせじてふ歌によれり

心せばげにこそ 細おのが物とぞてふこと葉をいふ

いひおとす おとしめいふなり

かくいふに月日はかなく とかくして姫君も年だけ給

なり

かんのとのほ 玉

院より 冷泉

女御うどくしく 女御の我心をいかにとおほしへだ

て給ふにやとなり

さるべきに 御すくせ

母北のかた 雲井鴈

きゝわづらひ給て 雲井

いとかたはらいたきことに 玉かづらのかたへ

やみのまよひになん 「人のおやの心はやみに云々

おぼしゑるかたもあらば その姫君をおほすをおして

こなたのおや心をおほしゑらばとなり

なほなぐさめさせ給へなど 少將にゆるし給へなり

くるしうもある哉 細玉かづら

いかなることゝも 細玉のこたへ

院より 冷泉

さし合せては 姉君の御參と一度に少將への事あらん

も餘りしかるべしとなり

あさへたる程 藏人少將の事

おほすに 玉

をとこはさらに 中君へはおもひうつさぬなり

見奉りて後は 姉君を

かうたのみかゝらす成ぬるを 院へ御參りの定れるを

いふ

源侍従のふみを見る給へりける 薫より姫君への文

さなめりと 少將

ことありがほにやと 藤侍従

そこはかとなくて 薫はさだかにそれとはかゝす

つれなくて 伊勢物語に昔月日の行をさへ惜なげく男

三月の晦にをしめども春のかぎりのけふの日の夕暮

にさへ成にける哉聞知人も無乎と有は人を心におも

ひて徒に年月を過るをなげくなれば今は此心を少し

とりかへたるなり

人はかくこそ 少將の心

かたへはめなれて 人々も例の事と思ひてなり

侍従の君は 藤侍従

この返事せんとて 薫の

うへに 玉かづらの御方

みるに 藏人の

いとほらたしく 少將

このまへ 少將の君なり

あまりたはぶれにく、 中將のおもとの心 少將の君

の若き心にいか成事かおぼさんとあやうきを云

かの御恭の 藏人少將同上に出づ

夕ぐれの事も 少將がいま見し事なり

さばかりの夢 こそ夢のごとくみしことなればいふ

残りすくなく 命の

つらきも 或説「うれしくは忘るゝことも有なましつ

らきぞながきかたみなりける此歌の心なるべし

哀とて 中將のおもと心

いひやるべき方なき事なり 今は事さだまりしかば

かのなぐさめ給はん 中の姫君にてなり

げにかの夕ぐれ 恭うち給ふ時あらはにならべて見給

ひしかば姉君をことに深く思ひ入てならぬ物の中々

遮悪心は深べしとなり

けんそう 顯證

きこしめさせたらば 玉かづらにかのかいま見の事を

申しなば云々と中將のおもとのいふなり

心ぐるしと思ひ聞えつる心もうせぬ こそ前に戯にく

きまで恨給ふ故に中將のおもといとはしとは思へど

いひやらん語もなくて在しにかのかい間見の事を少

將いひ出給ふに思ひよりて是をかこちぐさにしてこ

なたよりあばめかへすなり

むかひ火 古事記倭建命東をまつろへ給ふ條に著三向

火二而燒退と有是なり

いでやさばれや 藏人少將

さてもまけ給ひしこそ 大い君の恭

おひらかに ならかにと云に同じ

こよなからまし 勝給はんなり

いでやなぞ 藏人少將の歌

まけじの 恭によせたり次の二首も恭にていふ

わりなしや 右の歌に助言の事見えねば此返しもた

少將の心をのみとがむるなり河細共或説めくばせしてかたしめんでふ心をいへるは外へ走れり
 といらふるさへぞ 藏人少將の心なり
 哀れとて さばかりつよきにまかする生死ならば我に
 姫君をゆるして死なぬたばかりせよとなり
 はらからの君たち 夕霧の子たち
 うちにまあり 内裡に更衣の平座ちやうなど有べし
 いたうくつしいりて 藏人少將は
 母北方は 雲る鴈
 おととも 夕
 院の 冷泉
 たいめんの 正月
 みつからあながちに かの時 夕霧の直に申さば玉
 れいの 少將
 花をみて 花の頃かいま見もせしをいふ
 けふよりや 今は御参りの近づけばなり
 まげきなげき 木をそへたり
 おまへにて 玉かづらの前
 此けさう人 薫少將などの外にもあるべし
 いひしさまの 暫切なり

ことにのみ 言
 心ぐるしげ 實に死もすべくて
 おとや 夕
 北の方 雲る
 とりかへありて 中の姫君の事
 おぼす 玉は
 おもふらんはしも 少將
 かぎりなきにても 一の人の類にてもなり
 故との、 髭黒
 院に 冷泉
 この御ふみ 花を見て春はくらしつうたなり
 哀がる 女房たちは
 御かへし かの君の
 けふぞしる 四月にうつりてそらをながむるに春の花
 を思ふよしは去らるゝと云て下はあだがましきにと
 りなしたるなりかのめざましとおぼす心よりかくは
 有なり
 あないとはしき 女房たちのいふ
 うるさがりて 筆とる人申なほさんもわづらはしがり
 てなり

九日にぞ 四月なり
 右の大との 夕
 北方 雲井鴈
 とし頃も 湖雲井と玉かづらと去たしくも申通給はざ
 りしをなり
 此御事ゆゑ 少將の事
 かづけ物ども 装束など
 あやしう 雲るの文
 うつし心もなきやう 少將をいふ
 うけたまはり 御参りの事定かには
 おひらかなるやうにて ならかなるやうにて恨たる
 なり
 いとはしと見給ふ 玉かづら
 つしむ事 或人云大臣のまわり給ふべきならねば物
 忌などにかこつくるなり
 雑役 ざうやくにて参らす 夕霧の子達をとなり
 源少將兵衛佐 夕霧の君たち
 悦びきこえ給 玉かづら
 大納言 紅梅
 北の方 紅梅の

故おとやの 髭黒
 いづかたにつけても 玉かづら實は紅梅の大納言の兄
 弟なり院へまわり給姫君と楨柱ともことばらの兄弟
 なり
 藤中納言はしも 眞木柱の兄弟ながら
 中將 藤中納言
 辨の君達 藤中納言の弟玉かづらばらなり
 殿のおはせましかばと 人々の心
 藏人の君 少將
 例の人に 中將のおもとなり
 言葉を盡して その文に
 もて参りてみれば 中將のおもと
 姫ぎみふた所 姉妹
 くつし 屈
 中の戸ばかり ざうしの
 よそくにならんことを 御参りの後は
 こゝろことに 姫君の出たち
 との、 髭黒
 とりて見給ふ 文を大い君
 おとや北の方の 或人云とのおはせましかばとよろづ

に思給へる心より感じたる心にてかく思給へるなり
 限とあるをまことにやと 湖前の今は限りと思ひはつ
 ると有しこと葉をいへり
 おはれてふ ゆゝしき方にてなんほのかに知と有をも
 て思ふに死たる人には哀れてふ言をかくる物にやあ
 らんとほのかにおほゆいきてあるほどはいか成人に
 哀をかくる物ともみならずといふなり左のこたへにて
 此心明らけし
 ゆゝしきかたにて 忘々しきてふ語にて死をいふ
 かくいひやれかしと 中將に
 やがて奉れたるを 中將出も改めずそのまゝおくる
 かぎりなう 少將
 をりを覺しとむるさへ 今は院へまゐるなれば此時の
 みは一言もいらふべしとの心づかひをさへ思ひ増る
 つまぞとなり
 たが名はたゝじ 古今「戀しなばたが名はたゝじ世の
 中のつねなきものといひはなすとも
 織入少將 ける世の ゆゝしき方にては哀といふ言をかくべく
 の給へばもとより死べくおほゆれど死もまた心に玄
 たがはぬ世なればもしながらへてあらば此一言をも

終にきかて有べきにやあらんとなり拾遺に「いきし
 なん事の心にかなひせば二度ものは思はざらまして
 ふを本にて右はよめるにや
 つかのうへにも もろこしに季札てふ人の劍を除君て
 ふ人ほしむけしきなりしがその時は上國へ使すれば
 あたへずかへさにと思ひしを除君はやく死たればそ
 の塚の樹にかの劍を掛けて去し事ありその如く吾死た
 らば必哀とのたふべくは一向死をいそぐべきをさる
 御心とも見えねばと恨むなり
 うたても 姫君
 かきかへてやりつらんよと 少將の今は限りと有を實
 にとおぼして御いらへも有しに又かくむづかしくか
 こちはた死は心にまかせぬなどいへば姫君の思ひの
 外ぞとおぼすなり
 くるしげに 御参りのをりなれば聞えも苦しかるべし
 おとなわらは 御参りにさむらふべき人々
 先女御の御方に 玉かづら姫君にそひて参り給ひて先
 弘徽殿女御の御方へおはせり是も致仕の大との御
 娘なればなり
 かの君 玉

うへにまうのぼり 院の御まへ
 きさき 秋好
 女御など こきでん
 いとつづくしげ 玉かづらの姫君
 み奉り給ふ 院の
 たゞ人だちて 院の御事なり
 かの君 玉かづら
 心とやめて 院
 いで給にければ 玉の
 口をしく 院
 源侍従の君 薫
 明くれおまへに 冷泉
 院のうちには 抄冷泉の院の中に薫に曹子を給ふと前
 にあり
 この御方にも 嵯黒の姫君の御方
 藤侍従と 玉かづらの御子と薫
 かの御方の 今の女御
 ながめ給へり 薫と藤侍従
 まほにはあらねど 薫はいにしへ心がけし事を
 手にかくる 薫

まつよりこゆる 末の松山のこゝろ
 あやしく 細藤侍従の心
 むらさきのいろはかよへと 藤侍従歌 兄弟をいふ
 まめなる君にて 細藤侍従
 心まどふばかり 薫
 かの少將の 藏人の
 しも とりわきてわび入る助辭なり
 あやまちも玄つべく ひまをもとめて忍びも入ん様の
 心なるべし
 聞え給ひし人々 姉君にいひよりし人々
 少將の君をば 玉かづらの心
 母北方 雲井
 ほのめかし 少將へ
 院には 冷泉院
 かの君だち 夕の
 おさくまゐらす 少將は
 殿上の方に 院の殿上
 うちには 今上
 こおといの ひげ黒
 中將を 細姫君の兄

御氣しきよろしからず 細中將母上に仰の旨を語り申すなり

かたぶきぬべき事なり 内をおきて院へ參らする事

ともかくもまゐらせ給へば 母上の心ありてまゐらせ

給へば 此湖注白筆本にはけしたり

いざや 玉

の給はせしかば 冷泉院

今は心やすき 院の御所

たれもくもびんなからん事は さらば前々によくい

さめらるべき事なるを今更はとなり

右のおととも 夕霧

さるべきにこそ 宿世

そのむかしの 中將

かう覺しの給はする 今上

よく見き侍らん よくくも只今見ゆべきことよとな

り

女御はいさかなる 内はおほやけにてことひろし院

はことせばければ今に女御とひまの出でこばむづか

しかるべしとなんこの二人の語はさる理なれど既

にかんの君の給ふ如くその初にいはず今いふは益

なき事なるをいかで書るにや

二所して 中將と辨と

御思ひのみ 院の

はらみ給ひにけり 姫君

げに人のさまんに 係想人だちなり 侍ふ女房など

の心見奉りて思ふ心を書り

明暮の御あそびを 院の今女御のかたにて

侍従も 薫

御ことの音などは 今女御の

かの梅がえに 正月に梅がえうたひし時

中將のおもと 少將の中だち

たゞには 薫

をとこたうか 内にて正月十四日にあり

四位の侍従 薫

右の歌頭 音頭の如し 或人云歌頭六人祿法與子染掛

各一領歌堂以下舞人以上與子染合衣各一帖樂人九人

各襖一領

彼藏人の少將 夕の御子

御前より出て 内の

女御も こきでん

此みやす所 今女御を初て御息所といへり

うへにみつばねして 院の御はします殿なり

ぞうをはなれて 夕霧致仕大臣の外の人をはなしとなり

この院をばいとはづかしう 弄物の上手にてませばな

り

み給ふらんかし 今女御

匂ひもなぐみくるしき 只只色もなく白きを云

わた花も 花綿にて花をつくれりかざしのわたといふ

も同じ

竹川 踏歌には必竹河をうたふ

過にし夜の 少將の心なり 去年正月廿日の夜の事也

ひがこともまづつく はうしをもあやまるべき心ちす

るなり

后のみや 秋好

上もそなたに 冷泉院先に御前にて有しをも御らんじ

て又後の御方へも渡りて御らんあるなり

月は夜ふかうなるまゝに 夜深うなるといひたゞよひ

ありきて盃も云々などいふを思に院の御前過て后宮

へ院も渡らせ給ふほどに女御だちはその殿へ下りま

せば踏歌は后宮の御方終て此二女御の御かたぐへ

もめぐりし成べし故に既に少將今女御の御らんせん

事をいひたるに又かくはかゝじ此二度書るにて二度

今女御の見給ふを知べし

いかに見給らんと 少將の心

さかづきもさして 今女御の御方は本より外にてもか

の戀奉りし事を聞知りたる人有てわざと少將を酔し

めんとせしなるべし

夜一夜 是より薫の事なり

源侍従 薫

召たれば その明る日なり下にてまらる

御前のこといもなど 内にての様を

かとうはうち過したる人の 細院のおほせなり

心にくかりけりとて 若けれど

うつくしと もとより御籠の上に

ばんすんらくを 初音の巻に委しくいへり

御くちすさび 院

みやす所の 今女御

御ともに 薫 女房

こゑ聞きしりたる人に 一夜の月かげは 夜べをいふなり

かづらのかけにはべる 是はべると有をよしとすはづる
 と有ては次の語に違へり
 雲の上ちかくては 先は院中をいひて且后女御を月に
 譬れば實の此月の御前にては光なかりしといふにや
 人々衰と聞もあり 少將の媒の中將など成べし
 やみはあやなきを 薫のいとゞ月にかをりしをほむ
 すかして 薫の思ひある心をもてたゞ少將の事をほめ
 いふをそれにのみ心よせて聞らんは薫のうれたかる
 べしとおもふ女房かをるをすかしこしらへて月ばえ
 の事成しといへるなり
 女房
 竹川のその夜のことは 其夜とは正月に梅がえうたひ
 し夜の事をいひ末は女房の卑下していへり
 はかなきことなれど 薫の心
 ながれてのたのみ 薫
 もの衰れるけしきを 薫の
 人々をかしかる 愛なり笑にあらず
 人のやうにも 少將のやうにとなり
 うち出過すこともこそ侍れ 薫
 嗚呼恐
 あなかしことて 右の事を人になまねびそと口がため
 て退なり

こなたにと 院
 はしたなき 右に思ふ事を語りし故に
 こ六條院 院の薫に語り給ふ
 女がたにてあそびせられける 女樂
 せんとして樂器など取出せしことのみありこゝをもて
 樂有しをえらしむ
 右のおとゞ 夕霧
 彼わたりの 光源氏
 物の上手なる女さへ 紫明石など
 和琴をひかせ給て 冷泉
 此殿など 踏歌のうたをうたはせ給ふなり
 御息所の御ことのね 薫の思ふことをいふ
 うた 細或云つけ物なり
 ごくのものなど ごくの手なるべし
 なにごとも心もとなく 薫の思ふ
 見なれたまふ 此見は發語に用ゐしならん
 恨かけねど 薫の
 いかおぼしけん 御息所
 卯月に女宮生れ給ぬ 去年七月より御けしき有て
 物のほえもなき 姫宮にて

右の大殿 夕霧
 かのの君つといただきもちて 湖女御の御産所は玉かづ
 らの御かたなればなり
 とうまわり給ふべき 院より女御を召
 いかのほど 五十日
 女宮一所 こきでんの御はら
 いとめづらしう 此度のひめみや
 いとみじう覺したり 冷泉院
 女御方の人々 こきでん
 いとからでありぬべき世哉 かやうにはなくてある
 べき事となり玉かづらの兄弟の女御のおはすに其御
 めいの院にまわり給ふをもどきそねむ成べし
 さうじみの御心どもは こきでんと御息所は
 中將の君の 左近中將
 さいへど人の兄にて 若しとはいひながら
 かくいひくゝて 「世の中をかくいひくゝてはてゝは
 いかによいかにならんとすらん
 上の御心ばへ 冷泉院
 としへてさぶらひ給ふ御方々 秋好中宮弘徽殿女御
 内には 今上

御けしきありと 中の君を
 わづらはしくて 玉かづら
 おほやけいとかたうし給こと成ければ 尙侍は重き職
 なればたやすく人にゆづる事を公にゆるしがたくし
 給なり
 とし頭かう覺し置しかど 内々尙侍を辭したく玉かづ
 らのおぼしゝとなり
 こおとゞの ひげ黒は當代の始の關白にて勤勞ことに
 御おほしあるによりて且いと古き例を殊更に引て中
 君に尙侍をゆづらせ給ふ
 申給ひしは 諸人の望しなり
 かくて心やすくて 玉かづら
 内すみも 中君
 少將のことを 藏人
 たのめ聞えしやうに 已に契りせしやうにも有しにと
 なり
 辨の君して 玉かづらのはらなり
 さまぐくに 院又内
 世のきゝみゝも 院にては女御をはかり
 内の御けしきは 夕霧

おほやけごとにつけても

入道后は御妻なり女御など

こおといは 毘黒

は御妻なり尙侍などは女官とて其職あればかくいふ

かんの君はわか君を櫻のあらそひ 前に見ゆ

なり其上にて寵をかうぶるはおのづから別なり

院の上 孟冷の玉をうらみ給ふなり

中宮 明石中宮なり

ふるめかしき 三冷泉院のわが御身の上をの給ふなり

参り給ふ 尙侍の

思ひおとさるゝ 湖玉のなり

おしけち給はざらまし 后女御も此君達をばえけたじ

うちかたらひ 湖冷泉院の御息所に語ひ給ふなり

あね君はかたちなど 主上の御おぼし

とし頃ありて いくとせとは知がたしる様の事此文

是も 妹君

にはかたぐにあり或説こによりて年記を惣てと

さきのかんの君 玉かづら今は前のといへり

らぬ事とするも少しかたくなし去らるべき程は去り

かたぐに 姫君達

て去るまじきは書まざらばすも物がたりの常なり

君だちの中給へば 中將辨君

男みこうみ給 湖御息所

うちには時々忍びて 内侍のかみの御かたなり

みかどまして 院の御かど

いにしへを思出しが 昔冷泉院の玉かづらに心がけ給

いかにかひあらまし 季春宮にもと思召なるべし

ひしにつれなくてやみ給ひしがおそれ有ゆ糸にと也

女一宮を 抄弘徽殿の女御腹なり

人のみなゆるさぬ事に 大い君を院に参らす事は

いとことに 湖御息所を

みづからさへ 姫君を奉しに世のさだめいろくある

女御を 貞致仕の女御

を又みづからさへもしの事ありてはとなり

おのづから 湖女御と御息所と

さるいみにより 御係想を忌によりてまわり給はぬと

ひさしく成給へる こゝは専ら女御を申なり

は御息所へあらはし給はねばうらみ給ふなり

此御方さまを 孟御息所

我をむかしより 御息所

御せうとの君達 湖中將辨君

あまうやは 湖かねて申たる事

心やすからず 貞玉かづらの心

おほうへは 細玉かづら

聞えし人々 係想文など

さてもおはせましに 其人にゆるして有べきにとなり

宰相の中將 或説匂宮の巻に薫十九歳にて宰相と見え

たり又云匂宮巻と同時に見せて匂ふやかをると同詞

をかけり

大臣の御むすめ 湖誰ともなし

聞いれずなど 湖薫の

そのかみは 湖玉かづら詞

わかう 孟薫の

少將なりしも 御等のいふ

うるさげなる御有様 細院中のくせくしき事をいへ

り

よりはなどいふも有て 湖少將にゆるし給は

此中將は 本の藏人少將なりし人三位の中將なり

左大臣の 系圖には竹川の左大臣とあれど此巻にかく

出たる故に竹川とは暫るせし物なり外にさるよし

みゆる事なし

道のはてなる 東路のみちのはてなるひたち帯のかこ

とばかりもあはんとぞおもふ

思ひしやうには 思ひしに異なり

御ありさま 今の有様をいふ

内の君は 細内侍のかみなり

左大臣うせ給て 細前に見ゆ

右は左に 細夕霧の右大臣左大臣に成給へり

藤大納言 暁紅梅按察大納言

此かをる中將 或人云薫廿二のとしなり紅梅大臣と薫

中納言の事こゝをもて前々の違を知べし

三位の君は かの藏人少將なり

此御ぞうより外 夕霧と致仕大臣の族をいふ

中納言 薫

さきの内侍のかんの君 玉かづら

御前の庭にて舞し 或云昔は方々にて拜賀せしなり儀

制令のむね元日には天皇を始めて三后皇太子を拜し

て親王以下を拜する事なき制るなを我親戚また家令

以下は禁の限りにあらずと見え其外の時も致敬も四

位より七位まで許すべき人の制あれども其外は私の

禮にまがへと侍り然れば玉かづらは薫の姉として

故六條院の御遺狀も明石中宮に次ほどの事なれば私
の致敬有べき事なり玉かづら昔の御事思ひ出られて
なんとのたまふも此こゝろなり
いと草ふかく 赤染家集に擧周はじめて殿上ゆるされ
て草深き庭におりて拜しけるを見侍て赤染衛門「草
わけて立居る袖のうれしきは堪すなみだの露ぞこぼ
るゝと有てこゝに似たり
ますむかしの 細源の事なり
ふりがたくも 孟玉の事
院のうへは 細冷泉院
よろこびなどは 薫のたまふ也 薫は道心あれば昇
進の悦はさのみ深からねばおやあねなどの御前へ御
らんじ悦び給ふ事なれば必出べきは常の事故にまゐ
りしとなりすべてさるべき悦ある時に父母を拜むも
我敬のみならず見悦給ふかたも専らなるなり或説に
薫物思ひあるよしを合めたりといへるはわろし
よぎぬなど 津の門を云々
おろかなるつみにかうがへさせ給ふ 是は考課とて人
の善惡の考を爲る介法によりし語なり故に一本をよ
しとす今本うちかへと有はわろし

けふはさだすぎ 玉かづら
ついでにも 慶賀におはせし日なればなり
たいめんなくて 花入づてにはくたくしき事はのべ
やられぬまゝにかゝる對面はまれなれば次でにかた
らんとなり
院にさぶらはるゝが 細御息所
女御をたのみ 抄こきでん
又后の宮の 湖秋好
覺しゆるされなんと 源の御子のよしなれば
いづかたにも 細女御秋好
宮だちは 近き年頃生れませし
さぶらひ給 院に
みづからは 細御息所をいふ
まかでさせたるを 里に
それにつけても 里住をも
うへにもよろしからず 院にも里居を
ほのめかし 薫に院へ
をさなくおほけなかりける 玉かづらの我心やりなく
身のほどもなき事を思ひ立ぬるをくゆるとなり
うちなげい給ふ氣色なり 藤へだでて薫の思やる

さらにかうまで かせるの御答
位をさり給てまづかにおはしまし 或云院の閑におは
しませば内春宮にて女御更衣のいどましましより心安
かるべきと人はおしはかれどもいづかたにても后女
御の御いどみ心はおなじ事となり
人はなにのとがとみぬことも 湖外の目には
我御身にとりては 后女御
さばかりのまぎれも ねたみごとなど
あらしものとてやは 本よりまか思ひて有べき事ぞと
の意にてやはとはいへり
たいめんの 細玉かづら
あわの御ことわりや 淡のとは餘りあへもなき御こと
わりてふ意なり常におはくしきといふは浮たる様
の事なり同じ語ながら少し用ゐ様のかろきとおもき
とのみなり
人のおやにて 玉かづらを薫の思す
いとわかやかに 三物の分別し給ふ程に合せては御年
の若げなるとなり
うちの姫君の 或云此ひめ君をかく擧るは椎本卷の中
ほどにあたり

かうざまなるけはひの 若やかにおほどきたる事なり
内侍のかみも 孟中君
すのうち心はづかしう 湖薫
おほうへは 湖玉かづら
ちかうもみましかばと 咲薫を聲にてもみましかばと
なり
大臣殿 細紅梅大臣
此殿のひんがしなりけり 細玉かづらの殿の
兵部卿宮左のおほいどの、 細相撲の事は見えす前に
有し山にて書るも例あり
おはしましゝを思ひて 湖紅梅の
おはしまさず 匂は
心にくゝもてかしづき給ふ 細紅梅
宮ぞ 細匂宮
源中納言 湖薫
おとゞも北方も 細紅梅大臣同北方
めとゞめ給ひけり 湖むこに思ひ給なり
となりの 細玉かづら
むかしの事 細鬘黒の大纒
こ宮うせ給て 玉かづらのゝ給ふなり故宮は整兵部卿

なりこの事は此御息所のむづかしくいはれ給ふも
時過ばまきばしらの君の如くめやすく成給はんかと
て玉かづらのおぼすなり

このおとゞ 湖紅梅

かよひ給ひしこと 湖横柱へ

左の大との、宰相中將 細藏人少將

こゝにまわり給へり 孟玉へ

おほやけの 湖宰相中將

かすまへ給ふよろこび 湖昇進など

わたくしの 湖姫君の事

廿七八のほどの 湖宰相中將

みぐるしの君たち 玉かづら詞 こゝの子たちの時無

につけてなり

いませがらふや いましむらふよといふ語なり

故との 崑黒

こゝなる人々も 子たち

右兵衛督右大辨にて これらは各一つの官なり此官を

もて宰相にならぬほどをこゝには非參議といへり第

木に非參議の四位どもとある所にいへるは今四位の

大辨にてはあれどほどなく參議もしるき人にていへ

り 非參議なるを 宰相ならぬを云
人におくるとなげき給へり 湖官位は

宰相はとかく つきぐしくとは何事にも似つきてよ

ろしきをいへりこゝはかの侍従は頭に成たれど猶は

へぐしからず人の思ひよりをかをると此宰相など

の様にあらぬをつらねて書るなり或説に猶御息所の

かたへいひよる事といふはいかにぞやさる事をつぎ

ぐしくといふこと有やは又これを此物語の終とし

て宇治を別の事といふ説もいかにぞやはしひめより

は宇治にうつりたれば別のごとくはおもへど猶句宮

黨のことこそ専らいひたれ此文の終といはんは雲隠

にてその次より宇治の終までは人々の傳とみゆるな

り 官などの違も見え文の様も筆ほそくこと葉も所せき

なり其後年月を経て又おもひ起して此宇治をば書き

けんかしその程久しくして筆をたてたればことあら

たまりて此前の巻どもよりも中々に筆ふとく文もよ

ろしき成べし若又間もおかで書けるとせんにも初

巻には心もひろく文もゆたか成しを中ら過るより漸

にこの様所せくなりもて来て末ばそに成たれば今

はまた立かへりさまをかへてたしかにかゝんとて書

つればことなるやうにも聞ゆらんかし

その頃世にかすまへられ給はぬ古宮 こは桐壺の帝の

八の宮にて御母もやんごとなきよしはこゝにいへり

此宮わかうおはする時冷泉院の春宮にてますをとゞ

めて此宮を立まゐらせんと弘徽殿大后のよこしまに

物し給ひし事此巻の下に見ゆこゝにすぢことなる

云へるは此事なり

時うつりて 大后の方の心ざし通らず光源氏方の榮行

くまゝたゞならばさも有まじきを中々にその争ひの

後なりければ此宮はいともれ給へり

御うしろみなども 大后の御里がた又は御母がたの御

さとなどの人々も或は世をうらみてそむき又は時に

源氏物語新釋

橋 び め

此ひは濁るなり古書に此
ひに多くにごる字書たり

此巻の名は「はし姫の心をくみて高瀬さす棹のしづ
くに袖ぞぬれぬるてふ歌によれりさて此巻よりは宇
治のうばそくの宮の姫君達の事 此宮の御母も宇治におは
する事も巻の中にかい
又にはふみやと薫の事を書たり薫宰相此巻には十九
はたちの年の事あり

此宇治の巻どもは文の様前の巻々に異なりとて後に
こと人のつぎて書るにやといひ又桐壺帝より今は四
代にて七十年餘りを移り來つれば同じく式部が筆な
れどさる心もて文の様をかへたる歟などいふ説あれ
ど式部が後にかくの如くかきとるべき人も見えす猶
同じ筆とするはさあるべきなり然れども時代のかは
るよしならばいと前の巻々より漸に書もかふべき事
なり此宇治にいたりて俄なるべきよしもあらねば此
説はよりがたし今強て思ふに凡光源氏の物語はまほ
ろしの巻にて終れり故に初はこゝにて筆をとゞめつ
らんを猶あかぬ心地すれば暫有て句宮紅梅竹川三卷
をば書きけんかし此三卷はさのみ心もとゞめぬ故に

八宮 へつらふも有べければ此宮に志ある人なきなるべし

おほやけ 冷泉とはかのあらそひにはなれ給ふべく

わたくしに 家の内事とる人もよろしきはなきなり

北の方 八宮の

思ひ出給に 春宮の御息所とならんの心なるべし

女君の 細總角の君なり後大君と云

同じさまにて 中君なり

うせ給ぬ 母君

宮あさましく 八宮

ありふるに 宮

かぎりある身にて 或説かぎりなきとは天皇を申し限

りあるとは親王などのやんごとなき限りをいへりさ

れば姫君達をかるくしうはやしなひたてがたきに

萬たらはぬをわび給ふなり

ほいも 發心をせまほしくとなり

みゆづる 姫君を

たゆたひ 萬葉猶豫不定とかけり

おのく 姫君たち

いでや いでやは紀にも萬葉にも乞の字を云ていひ出

す時の發語なり折ふしとは此生れ給ふをり母君うせ

給へばなり

かぎりのさまにて 北方うせ給ふ時の事なり

これをいと心ぐるしと 中君の事を

さきの世のちぎりも 中君をうみてほどなくうせ給へ

ば母子の契りも皆つらけれど宿世のなす事となり

いまはと 北方の

ひめ君 姉君

いたはしく 是も姉君をいふさればやんごとなき筋は

増りと書り且上に中の君の事をいひたれば二君をか

ねていづれをもといへり

たづき 萬葉此ことばを鶴寸とも多頭伎とも書たれば

つをにごりきを清みていふなりさて手著手寄などい

ふに同じ語なり

つぎく 細次々なり

わか君 中君

さるさわぎに 北方むなしく成給ふさわぎなり

ほどにつけたる 弄いやしきに付たる心淺さに堪ずし

て若君のおよすけ給ふまでえあらでまかでたるなり

みやぞはぐみ 八宮

池山などのけしき 京の御所

おなじ心に 北方と

かゝるほだしども 姫君達をいふ

わが心ながらも 誰とむるならねど御出家も叶はぬ

なり

まいてなにか 或云女方のことなどおぼしはなちた

るとなり世の人めいてとは世のつねの人のやうには

となり

心ばかりはひじりに 御かたちはかへ給はねど

故君のうせ給ひし 北方なり

わかるゝ程のかなしびは 世人をのみ年経て覺すべき

となり

ありふれば 世に在人のならばしはさのみやはあると

なり

猶世人に 又北方をまうけ給へとの心なり

きこしめしいれざりけり 宮

へんつき 或云いと古き本にきを濁りて有と是に依べ

し俤は白の字を出すに木の筈を繼て柏とし犬を繼て

狗とするが如くにて其數多く繼たる人を勝とする成

べし

姫君は 大君

わか君は 中君

はねうちかはし をしのみならず梟の類皆同じ萬葉に

そのよしかたぐに見ゆ

つねははかなきこと、 水鳥のめをはなれぬを

うらやましう 北方のうせにしかば

うちすて、 我をも子をも打捨て、北方の身まかりぬ

ればその哀れにおくれ居てあることよとよみ給へり

さてその心盡しに悲しう覺ゆることをば歌にいはず

ふくめるをこと葉をそへて去らせ給ふなり且かりの

子はかるがもの子をいふいにしへよりかるがもをか

りともいひたること既にもみゆ

なほしのなえはめる 光源氏の常にはうちぎなどにて

おはせし事前に見ゆ此宮は姫君達をかしづき給ふと

てなほしき給へるとなり

まどけなき御様 河細 大きみすがたてふが如し

すゝりには 或説に「見る石の面に物もかゝざりきふ

しの楊枝もつかはざりけりと管相願の詠給へるは硯

は文珠の眼なりとて眼石といふをみる石とはよみ給

へりされば硯の面に物をかゝざるよりこゝにもしか

いへりと侍り中頃のことわざなるべしいふにもたら

ぬ事どもなり

いかでかく かく母上にもおくれて哀れに生たつはいかなる事ぞとおもふにたやすくせのうき身なりけりと思ひしらるゝとなり

まだよくもつゞけ給はぬ はなちがきよりは過たれどまだよくは書つゞけ給はぬが末にはよく書ん物と見ゆるなり

わか君も 中君

今少しをさなげに 中君去づかに書たまふなくくも 鳥のかいこのかへらであるを巢守といふによせてなげきつゝもはぐゝみ給ふ父宮のおはさゝらば我はひとゝならでうせましをとなり古今に鳥のこはまだひなくからたちていぬかひの見ゆるやすもり成らん

御ぞどもなどなえばみて ひめ君達かしづき給ふにも御心になはす哀れに見え給ふ様をいへり

經をかたてに 御心は佛道に有ながら君達をせんかたなくいかでとおほすまゝに且は經よみ且は琴をならはしめ給ふ御心ぐるしさいとく切なりすべて此のあたりいと哀にかきたり

さうがをし給ふ 唱歌して姫君に琴をあはせならし給ふなり

ざえなど 學問

まいて世中に 末世を政ごつ方に對てまいて云々といふにてこは世に住べき經濟の事なりいとわかおはする程に御うしろみして世を治むべきざえをもらはせまらする人もなくまして家のうちのくたくしき事はいよく見聞も教も中人なかりしかば知しめさぬとなりされどざる筋はさのみ學問にも見聞にもよらぬ事にて侍りたゞ餘りにおほどかなる御生れ故なりけり

おほちおとゝ 宮の御母は大臣の女なる事上に見ゆればこは其大臣よりつたはりたる御處分その外の庄園をしも人にとられ給ひ御たから物も皆うせてまのあたりの調度のみ残りとなり

うたづかさの物の師 職員令雅樂寮の下に歌師四人歌女師二人舞師四笛工八人これは皇朝の樂師なり唐樂師十二人高麗樂師四人百濟樂師四人新羅樂師四人妓樂師一人腰鼓師二人是は他國の樂師なりさて雅樂寮は和名抄によるに宇多末比乃豆加佐といふを略きて

うたづかさともいふなり

そのかたは 樂道をいへり

源氏のおとゝの 八宮の御傳をこゝに書けりかくおくれて云も一つの事にて此文にはをりくみゆわが御ときもて 大后の御勢有ときをいふ

あなたさまの 源氏方をいへりいよくかの御つきゝに 光源氏は御兄弟ながら右の後さしはなちてむつび給はずまして夕霧の時となりては物遠くなり絶たりとなり

すみ給ふ宮やけにけり 八宮の京の家焼たり

うつろひ住給ふべき所の 京には別に御家をも持給はぬなり

宇治といふところに こゝにてうちの事書出せり

山里もたまへり 山莊なり

思すて給へる世 宮のあじろのけはひちかく こは瀬々の網代木による波の音のかしがましきなり下にあらましき水の音波のひびきに物わすれ打しとあるも是なりはなもみち水の流れ 宇治のをりのけしきなり心をやる 思ひを遣るなり

いとゞしくながめ給より

むかしの人 北方

みし人も宿も 八宮山かさなる御すみか 萬月よみの光りにきませ足引の山かさなりて遠からなくに

たづね參る人もなし 都にてだに參らざりしかば峯の朝ぎり 古今「鷹のくる峯の朝霧はれずのみおもひつきせぬ世中のうさ

ひざりだちたるあざり こゝには験がたなどをせず一向に隠居して佛道行ふをひざりといふ成べし

たふとび聞えて 宮佛法を學びたまふとて阿闍梨のたふとみて參るなり

年比學びしり給へることゝもの 宮のとし比學び給へる佛法の中にいや深き心をあざりのとくなり

心ばかりは 河極樂佛土有七寶地八功德水滿其中池底純以金沙布地池中蓮華大如車輪拾遺空也上人「たびもなむあみだぶといふ人のほちすのうへにのぼらぬはなし

へだてなく物語し給ふ 宮の罪障さんげの御心なり
冷泉院にも去たしく おほやけごとの御佛事などには

めとめらるゝ 宮の如く
ぞくなから 八宮の

出侍らねど御みづからのめしにはかく院へも申いる
なるべし

出家の心ざしは あざり申す
侍り給ふとそうす 傍書に侍りたふと有るぞよき

さるべきふみ 經文

さすがに物の音めづる 塵外の心ながら

八宮のいとかしこくないげうの御ざえ

げにはた あざり又申す

さるべきにてうまれ給へる人にや 此宮かく有べき御

極樂おもひやられ 或云極樂歌舞の菩薩の事をいへる

宿世にて生れ給ふ人にや佛法たぐひなくさとり給ふ
となり

こだいに 古めかしきなり

まことのひかりのおきてになん見え給 俗ながら眞諦

御門ほゝゑみて 或云院號の後なれどもさきに院のみ
かどといへる其心歟

いまだかたちはかへ給はずや 院の仰なり或説淨名居

ゆづりやは 孟姫君達を冷の我に

士身在家心出家てふ類ひ俗形にて戒行を持する人
なり四部弟子の中に優婆塞是なり

て御弟なれば去ばしもおくれんほどはともたまへ
りさて朱雀の御弟の六條院へ女三をあづけ給へる類

宰相の中將も 或説に云此卷の中に宇治へかよひ給
ふこと三とせばかりといひて夫は廿一歳の十月まで

の事より去かの給ふなり

の事なれば今は兼十九歳成べし且竹河紅梅等には中
納言とあれば此卷は右の二卷よりも前の事を書り

朱雀院の 細院の御心なり入道の宮のためしとは女三
宮を源に預け給ひしごとくにとなり

我こそ世中を 柏木の事につけて出家の心ざしある事
前に見ゆ

故六條院 源氏
入道のみや 女三

中將の君は 薫

なかくみこの 或云薫の心に出家より此八宮の趣心

に叶へるなり

山は住うしとよめる如く宮も眞の道心よりよみ給ふ
といふは少し違へり

かならず 薫

聖のかたをば 此をばと書るに山を付べし聖てふ事を
ばひげし給へど惣ての様は専ら世のうきにつけたる

人傳にきくことなど 直に御對面なき御くやみの心な
り

を誠のべたるなり故に恨残れりと院はおぼせり
中將の君 薫

世をいとふ 今ほ我も世の外を思ふ心有て君を去たは

かたり聞えて 宮へ

しく思ひやれど君はことの外なるひじり心におはせ

法文などの心得まほしき 薫

ばなまくの道心人をば猶さらはしく見おとし給ふ
ならんやとなり

おほかたははかくしくも 薫

此御つかひを あざりにも別に御使にてまゐらせ給ふ
となり

世中をそむきがほならんも 湖はかくしからぬ身な
がらとちこもりゐて法文などをよまば世をそむく心

いとめづらしく 八宮

ならんと人のおもはんもさして憚るべきにはあらね
どとなり

もてばやし給ふ 御使を

おのづからうちたゆみ 湖世人のおもふ所を憚らずと

あとたえて 八宮御返なり 仰らるゝ如くの世に心の

いへども猶世にふれば怠あるとなり

かよはぬほどの聖心にはあらずたゞ世のうきにつけ
てかりに山住するのみなりとなり且聖の方をばひげ

御有様を 宮の
年わか 薫

して聞えなし給ふとは書たれど前よりの様を見るに

こゝにはさべきにや はじめ世に捨られ北方にをくれ

此御歌を誠の御心をのべ給へるなり或説によつて水
やすみよかるらんとの御歌にこたへて雲の八重だつ

家焼うせなどして世をそむくやうになるは佛の去か

おもむけ給ふが如しとなり
 のこりすくなき心地　かく静に道を行ふべく成行きぬ
 れば又わがよはひのほどなくなりて此上いかほどの
 つとめの功も成しがたく覺ゆるをかをるは今より去
 かこゝろざしなば末たのもしとなり
 かへりては心はづかしげなる　薫若くより道心有なれ
 ばなり
 かたみに御せうそこ　宮と薫
 みづからも　薫の
 げに聞しより　薫まうでて思ふ
 草のいほりに　椎本卷にも此莊の様見えたりいと山里
 びてかりそめに去つらひ給ふ所々多かるを草の庵と
 は云へるものなり
 思ひなしことそぎたり　湖道世の御有様と見るより
 何事も殊に畧きたる様に思ひなざるゝなり
 さる方にて心とまりぬべく　閑に面白きことあるをと
 なり
 いとあらましき水の音波のひゞきに　上にあじろのけ
 園はひ云々水と波とをいひしは下に薫の此宮を問給ふ
 様をいふに水の流どもをふみしだく駒の足音云々と
 あれはこゝの山水の音なり波のひゞきとはかのあじ
 ろの波なる事下にも見ゆ
 吹はらひたり　風を略せり
 かゝるしもこそ心とまらぬ　孟浮圖は桑下に三宿せず
 ちとも住所に心の不_レ留やうにする物なればなり
 よのつねの女しく　薫の思ひやり
 佛の御方には　孟或云姫君のかたと持佛と障子をへだ
 てたる事にてせばき家の様なり
 さすがにいかゞと　なよすかにはあらじやと思へど或
 云上の詞に世のつねの女しくなよびたるかたはとほ
 くやなどいへるによりてさすがにいかゞといへり
 されどさるかたを　或云薫の打かへしておもへるこゝ
 ろなり
 うばそくながら　俗の形ながら佛道に入たるを優婆塞
 といふなり
 の給ひしらす　宮の
 宿徳
 上臈しきさまなり

いむごとを　戒なり
 こと葉だみて　詞のなまるなり
 無骨
 こちなげに　無骨にして物の様なれ知たるがましきが
 あるものなり
 いともものしくて　句
 けちかき御枕がみなどに　さして寝ながら法文を聞か
 んとの事にも有べからず只やすく問聞給はん様をか
 く書ける成べしさすがにとはさばかり打とけ心やす
 き様にてかたらひ給ふにも人がらのこちなき僧など
 はむづかしうおぼゆるをとなり
 いとあて心　此宮は
 たとひにひきませ　臂をよくとり給ふなり
 よき人は　貴く生れたる人はおのづから物の心得もた
 かき筋による物なるをいふ
 戀しうおほえ給　薫のなり宇治にもといふ説はこゝの
 文にそむけり
 をかしきやうにも　風流
 まめやかなる　眞
 三とせばかりに　細薫十九廿廿一の年なり
 秋の末がた　四季に七日づつの念佛なり

うつろひ給て　宮
 姫君逢はいと心ほそく　宮の山寺におはすほど
 中將の君　薫
 有明の月の　九月の末
 川のこなた　宇治橋は孝徳天皇の御時造てより後まで
 絶たる事も聞えねばこは同じ河といへど上の山かた
 つきて此山莊の有にて橋には遠ければそこは舟して
 わたす所にや古歌にもかけるふ日記にも舟にて渡れ
 る事多し且こゝに道も見えぬしげきが中など有も山
 深きよしなり
 玄げきが中を　六帖「ことならば山下水となりなゝん
 人めしげきが中に行べく
 人やりならず　夜をこめおはして心づからぬれ給ふを
 いふなり
 山おろしに　たへぬは堪やらで散なりあやなくは何の
 事故とあやめもなく涙の落るとなり或人あぢきな
 き心といふは此語にも歌にもかなはず
 すい玄んの音も　さきおはせ給はぬなり
 玄ばのまがきを　湖道すがらの様なり賸賤が屋などの
 柴のかきねをあまた行過ぎ給なり

そこはかとなき水の流共を 同じ山水を右へ渡り左へ

みにくきかほ 細宿直人

わたる所多きものなり

まばしやと 薫

ぬし去らぬかと 古今に「ぬし去らぬ香こそ」にほへれ

つきなくさし過てまゐりよらんほど 姫君達の御遊び

秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも

のほどにおぼしよらぬわがさし出なば御琴どもやめ

ちかくなるほどに 八宮の山莊

給ひてんとなり

つねにかく 薫

御けはひかほかたちの 薫の様を宿直人の思へるなり

わう去きでうに 此は琵琶に常ある黄鐘調なりよりて

人きかぬときは とのゐ人の詞

常あるかきあはせなれどといへり然るに或説にはび

おともせさせ給はず 御遊びの

はの秘曲に風香調は笛の黄鐘に合せ又反風香調は笛

あなかしこ 此とのゐ人

の一越調と双調とに合すてふ事有に泥みて其事をい

はたけのすいがいしこめて はの字一本になきをよし

ひたれどこは外へ走りたりこゝのお前に仰られしな

とす文集竹編ツクガキ 姫君達のおはする所のさまなり

りやゝもすれば本の文をよく見ずしていへる説の多

月をかきし程に 扇ならで 扇もて月を招く古事有にやなどいへどわか

きなり

ひとりは 或云大君なり

かきかへすばちの音も 琵琶に下より上へかきかへす

き姫君の去たゝかに故事をおしてのたまふべくもあ

事あるをいふなり

らすされば陵王に目をかへす手てふ事の有を轉して

こもりおはします 寺に

月にかくのたまへるならん樂の事は常ならひ給ふ物

御せうそこをこそ おはしますたる事をその寺へ申さ

んとなり

何かは 薫何かは申入べき

かぎりある御おこなひ 七日の念佛

なればなり

これしても 撥をいふなり

いみじくうたげに らうたき人の心去れかくれてあ

るをいふ

そひふしたる人は 或云申君なり

いる目をかへす 此は淮南子に魯陽てふ人戈をもて落

とりて目をかへす手といふ事ありこゝは又その手に

目をまねきとめしてふこと有をかの陵王の後序に

よりてのたまふ意にや書つらん姫君達の才がりのた

まふべくもあらねば樂によりてのたまふらんこと右

に同じ

さまことにも 入目をかへすといふ事はなきものをと

たはぶれの給ふなり

およばずとも 大君花琵琶の撥をおさむる穴をば陰月

といふ覆手の上にありと侍り今思ふに猶たゞびはに

は半月の形の有もの故のみにや侍らん

うちとけの給ひかはし たはぶれの給ふなり

さらによそに思ひやりしには似ず 薫

むかし物語 或説に住吉うつぼなどの物語に姫君たち

の翠ひき給ふを人の聞きつけたりし事などを引きた

れどこゝには思ひやりしには似ず云々とあれば上に
ある如く此宮の聖心に生し立て給ふ人だちなれば女
しくなよびたる方は遠くやと思ひ給ひし心よりいへ
ばさのみ物の音にかゝはる所にあらずかの箏木にい
ふ葎の門にらうたきひとのとぢられたるを見つけ又
親せうとなどのにくさげなる家によろしきむすめな
どの有類ひの物がたりを聞いて心にくゝうたがひしを
てふ意なるべし
心にくゝうたがひしなり
にくゝおしはからるゝ かの箏木に思ひの外に心のうつ
こゝろうつりぬべし
る事を書しがことし
月さし出なんと さし出よかしとの心なりいせ物がた
りにはや夜も明なんずるといへるが如し
人おはすとつげきこゆる 薫のおはする事を姫君達に
告げるべし
おとろきがほにはあらず 姫君達の上臈しき様なり
あはれと思ひ給ふ 薫
京に御車 夜深く忍びやかに馬にておはしつるに宮の
おはさで御歸もはやければ御迎の車をいそがせやり
給ふ

さぶらひに 殿の人
 をりあしく 宮のおはさで
 いたうぬれにたる 夜ぎり分來給ひし勞をいふ
 まりてきこゆ 殿の人
 かくみえやしぬらんとは 姫君だち
 うちとけたりつる 彼さきのほど
 おもひがけぬほど 薫の夜深くおはさんとは
 はぢおはさうす 姫君だち
 御せうそこなと 薫のいひ入給はん
 をりからこそ萬の事もとおもひて かなたの案内によ
 りて入居給ふべけれどさる事とるべき人もうひく
 しげなればかゝるをりにはあないにもよるべからぬ
 事とおぼしてそも又けん法やうなる書などは猶心も
 すべけれど露のまぎれにことよせてたゞちに入てさ
 きに姫君達のおはせし簾の前に居給ふなり
 ついる給ふ 薫なり
 わかう人ともは 女房など薫に聴て
 このみすの前には 薫
 はしたなく せん方なくわびしき意なり
 やまのかげち 和名抄磯道を夜末の加介知と訓て山路

閑道也といへれば山のそば路ともがけ路とも常にい
 ふにて行がたくあやうき路をいふけを濁るべからず
 さまことにこそ かく心ざし深くて参りし物を御簾の
 外にすゑ給ふは事の様いとこと様にこそあれとうら
 み給ふなり
 さりとも御らんじまらんと かやうにして参るをば
 さは有ともおぼしき給はん物とたのもしきといひ
 ていさゝか心の中をあらはすなり
 わかき人々 女房共
 かややかしげなるも 証恥かやかしきなり
 御いらへいふ女房
 女ばらのおくふかき 既に人々といふも女なるをとり
 分て女ばらといふは意得ず一本に女房と有はもし上
 のはまだいとわかき女どもにて女房といふは局など
 して侍るほどのおとなしき女をいふ故にわけて書る
 にや葵の卷に紫の方のわらはを源の越て女房出立や
 との給ひしもさるべき程の女をいふにやと覺ゆ
 おこし出る程 御いらへもいふべき女房
 くるしうて 大君の御いらへをいひ出し給ふも
 何事も思ひしらぬ さりとも御覽じ知らんと有しこた
 へ

かつ去りながら 世間のことを去りながら去らぬさま
 つくるも世のならはしぞと思ひしらるゝ物をこゝに
 のみひとへにかうおぼめき給ふがかりなう思はるゝ
 となり
 有がたうよろづを 世に類ひなう思ひすまし給ふ父宮
 にたぐひて姫君の御心も萬曇りなく明らめ知給はん
 とおしはかられ侍ればとなり拾遺に尼になりたる人
 をよめる公任「さやなみや志賀の浦風いがばかり心
 のうちの涼しかるらん
 はなつべうや 放
 つれなくとのみ ひとりすみなり
 まぎらはしにも 湖なぐさめといはんがごとし
 おどろかさせ給ふばかり 湖薫にかたらんとて姫君よ
 りおどろかさせ給ふほどに去たしまばやとなり
 つゝましく 大君
 老人の 柏木のめのとのむすめ辨のおもとなり
 たとしへなく 此辨は心づかひさる人と處々に見えた
 るに爰にさす過たるよしいへるは柏木の御子と思へ
 ば心やすく覺えて老人の心せはしくまれのたいめん
 の嬉しさに心も置ぬ御いらへせしなるべし

あなかたじけなや 辨が語
 おましのさまにも 御座
 みすのうちにぞ みすの内にはいれ参らすべき事なる
 といふを略けり
 君だちは 姫君
 いとあやしく 宇治の宮のありさまを申
 さも有ぬべき人々に とぶらひ参べき人もなり
 敷にも侍らぬ心にも 我身をいふ
 あさましきまで 餘りの事におぞまるゝまで思ふをい
 ふ
 わかき御心地 姫君だち
 いとつゝみなく 辨が
 なまにくき物から 薫の
 いとたづきもしらぬ心地しつるに 薫
 うれしき御けはひにこそ 辨をさす
 なに事もげにおもひ去り給ひけるたのみ さきに薫の
 かく露けきたびをかさねてはさりとも御らんじ知ら
 んとの給ひしに姉君の何事も思ひ去らぬ有様にてと
 の給ひしはたづきもなくおぼえしに今辨が若き御心
 地におぼし知ながらなど申ければ何事もげに思ひ

給ひけるはたのもしきとなり

よりの給へる 内に入給ふを云なるべし

几帳のそばより 人々

げにやつし給へる 前にやつれておはしたりとあり

この老人は 辨柏木の事を思ひ出且その御子のかくえ

ならぬを見てもなくべきなり

まだきにおぼれたる涙にくれて はやく涙の落ると

なり

おほかたさだ過たる人は 凡ならば例の老のくせとお

ぼしてあらんを除りに思ひ入たるさまなればあやし

うて事の心委しう聞んとおぼすなり

うれしきつゝなめるをことなのこい給ひそかし

さし過たるつみなどは比つればなり

かゝるついでしも 老人

又侍るとも 次手は

ふるもの 薫のまろしめすべき筋に古く傳れるものゝ

かくて侍るなりけりと思し知給ふ事を申さんとなり

三條の宮 或云女三宮なり細ほのいひ出せるなり

小侍従 細女三宮の乳母のむすめなり

同じ程の人 小侍従などと同じ程の友だちを云

はるかなる世界 筑紫に下りて住し事下に見ゆ

つたはりまうで来て 宇治宮へ辨が來りし事なり

えまろしめさじかし 薫には

此頃藤大納言 紅梅大納言を云此卿竹河卷にて大臣に

成給ふとあれば此はし姫はそのさきの事なり

衛門督にて 柏木なり

かの御うへとて 名高き柏木の御ことなればてふ意

手をりて 薫の生れ給ひし年に柏木は身まかり給ひ

しかばそのとしの數をかぞふれば薫の御としもしる

きとなりさて薫は二十許のほどなり

故權大納言 柏木の御めのとよりし辨が母にて女三宮

の御めのと侍従があねなり小侍従は辨がいとこな

り つかうまつり 柏木に

人かすにも侍らぬ 辨の我はなり

御病のすゑつかた 柏木の末期に辨をめしよせて遺言

ありしとなり

きこしめすべきゆるなん 薫の

きこしめしはて しはさせの誤り歎聞しめさせ果なる

べし

あやしく夢がたり 薫の心なり

かななぎやうの物 巫はよりましとてくさくさのこと

をいふなり

哀におぼつかなく 細 柏木の事をおぼつかなくおもは

れし事匂宮の卷にあり

さしぐみに 細 或説にさしよりにてふ意といへるはさ

も有意とは聞ゆれど語は泪さしぐむといふはさし含

む意なり是によれば俄に物を含みなどする方より轉

してかく打つけなる様の事にもいふ成べし

こちぐし ちちたきを重ていひて餘りにはなはだし

き様なるべければといふ意成べし

そこはかと 薫のこたへ

御らんじとがめられぬべき 姫君たちの

かのおはします寺の 八宮の

みねのやへ雲 後 鷺 思ひやる心ばかりはさはらじを何

へだつらん峯の白雲てふ歌にて書て宮の御事を思ひ

給ふさまをいへり

此姫君達の たまぐ 聞にも宮の御寺のかたおぼつか

なく思ひやらるゝ鐘のおとなるにまして姫君達のか

かる雲霧の中に住給ひておもはぬ事なく思ひ盡し給

ふらんが心苦しとなり

かくいとおくまり給へる 或人云心にももののおもしろ

き時こそ人に物いひかはすも興ありて覺ゆべきにか

く物思はしくて過し給ふなれば人に物いひかはしな

どはれぐしき事なくおくまり給ふもことはりぞと

なり

朝ぼらけ たづねこしかひもなく姫君は霧とゝもに物

へだてゝあひ給はずさらば歸らんとする家路も見え

わかでせんすべなくわびしきめにあひぬる事とかこ

ちたる意なり

たちかへり 姫君に心残りてえ立さりがたき様なり

猶いとことに 薫をば

御返り聞え傳へにくげに こは侍らふ女房の姫君にか

はりて此御こたへ歌をよみて薫へ申傳へんとすれど

えよみかねたれば大君のよみ給ふなり

例のつゝましげにて 大君

大君歌 雲のゐる もとよりはれぬ雲に霧さへへだてゝげに

御家路のわびしくおはすべき事よと薫の歌をうけて

有のまゝによみ給ふなり少し打なげき給ふといふも

即ちかゝる所の御すまゐもかをるの家路も見えずと

よみ給ふをおぼすなげく成べし

げに心ぐるしき 前に宮の此姫君だちを心ぐるしきよ
しのたまひしをうけて今薫の見まらするにあて、
げにとはいへり

ひたおもて 直面なり

なかくなる程に 姫君へ物いひかけていひもはてぬ
ほどに立給ふをいふ

いまましおもなれてこそ 猶度々まわりつゝ、

よの人めいて 薫は大方の世の人めきて心置給ふべき

いろこのみなることはあらぬをおぼしわかざるよと

恨むるなり

御供の人の誦

あじろは人さしがしげなり ひをば和名抄に水魚と書

り内膳司式云山城國近江國水魚網代各一處其魚始

九月二十二月卅日供之あじろのさまは古き繪に

見ゆ

人々みしりて 網代の案内を

われはうかばす かをるの我は玉の臺に住て水に浮た

る舟人のかくみるめもはかなげなるわざはあらねど

いづれかさしてはかなからぬ事なしと思ひとり給ふ

なり

あなたに 姫君だち 薫

はし姫の 次にながめ給ふらんといふは姫君のかゝる

所に住て物おもひ給ふらんとてふ事なり然ればこは姫

君の御心をおもひやるにわが袂のぬるゝとよめるな

り古今集に宇治のはし姫と有はいと古歌なれば萬葉

に愛嬌をはしひめともはしきつまともよめるに同じ

さて此はしは愛の意嬌はつまと訓べきを古今集の後

の本に誤りてはしひめと書るなるべし橋の意にはあ

らす侍るを例の後人作りごととしてはしひめてふ神有

などいふよ

高瀬さす 波の高き瀬を云

もたせ給へり 文をなり

いららざたるかほ 孟或云寒き時鳥肌立を云なり

御返がみのかなど 大君の

ときをこそは 疾

大君返

さしかへる 朝夕といふより姫君の身の上をそへたり

身さへうきてと 細さす掉の竿にぬるゝ物故に身さへ

うきてもおもほゆる哉今考るに此歌の出る所おぼつ

かなし猶他の歌有べき歟

まほにめやすく 姫君の今めかず真にこたへ給ふを薫

のおぼすなり

かへりわたらせ給はん程に 八宮の

この人にぬぎかけて 殿の人

老人の物語心にかゝりて 薫

おもひしよりは 姫君達のさま

なほ思ひはなれがたき世 世中の心をはなれんために

宇治へ参り給ふ物のかく姫君に心のうつればなり

うちつけなるさまにやと 文の詞

あいなくとめ侍て 前に中々なるほどにうけ給りさ

しつる事おほかる云々と有し心なり

おぼしゆるすべくなん 姫君のさこそ

御山ごもり 宮の

いふせかりし霧のまがひ 楨の尾山は霧こめてけりと

よみ給ひし事をそへたり姫君におもふ心はいひはら

さんとなり

さこんのぞう 左近將監なり

此頃のあらしには 秋の末なり

さておはします様の 七日

ふせたまふべからんと 僧どもの

御おこなひはて、出給 宮

けさ衣 或人云是は宮の御設にや

かの御ぬぎすての 薫のぬぎかけ給ふきぬの事なり

かりの御ぞども 狩衣

身をはたえかへぬものなれば 衣はうるはしうなりて

も本の身がらのいやしげさはかはらぬなり

えもすゝぎすてぬぞ 是はいと久しくなりてときあら

へども猶香のさらぬをいふ

こめかしきを 女子めかしきなりいと前々より有こと

ばなり

みやにも 宮へ申なり

何かはけさうだちて 何かはの下に苦しからんなどい

ふ語を略けりさて薫のかやうにの給ふをつね人のす

きくしきなみにもてなし給はんはかへりて餘りし

かるべしとなり

なからんのちもなど 此こと前にありしなり

心ぞとめたらんなど 薫の

御みづからも 宮の御みづからなり

さまの御とぶらひの 絹錦など奉りしことなり

山の岩屋に餘りて 宮の御ことばに身に餘りてなど仰

らるべくもあらねばかく書なしたるをかしきなり

まうでんとおぼして 薫の宇治へ

三の宮 或説句宮なりかやうのかくろへたる事み出だ

さばやの心ふかくませしことなり且句宮の宇治にか

よひ給ふ事紅梅巻にあり爰にて始て聞給へば此巻は

紅梅よりもさきのことなり

きこえはげまして 句宮に宇治の事を

宇治の宮の事 薫

みしあかつきの かの姫君たちのあそびたまひしこと

なり

宮いとせちに 句宮

さればよと御けしき 薫さればよとこそ御心とめ給ふ

薫の思なり此注千原本に書入たりき
れど自筆本にはけしきなり

さて其有けん 宮の詞なり

まろならましかばと とく見せん物をとなり

はしをだに 艶書の

かのわたりは 宇治の事

うもれたる身に引こめ 薫ひげしてわがうもれたる身

の物とのみ爲べき姫君たちのやうにもあらねば句に

御らんせさせまく思へど大方の人こそあれ句はえは

ひわたり給ひがたからんとなり

かのわたりは 宇治の事

うちかくろへつゝ かくれたる所におかしき事の多き

ぞとて是も句をねたがらせ給ふ語なり

さるかたに 惣てをいふが中に専ら宇治をこめたり

このきこえさするわたり 宇治の事なり

いとよづかぬひじりざまにて 八宮の

こちくしうぞ 骨々

ほのかなりし月影の見おとりせずば 湖彼のかいまみ

の暁の俤の如くにて後にも見おとりせずばとなり

まほならんはや 此語の本は正面の意なるをこゝはそ

のよきと見しかほのまことによきにてぞあらんてふ

ことにいへりはやは者よなり

さばかりならんをぞ 此姫君たちほどならんをよしと

いふべく思ゆとなり

おぼろけの人 凡なる人にはと云なり

心うつるまじき人 薫を云

人をすゝめ給て 句の薫をすゝむるなり

よだけさを 世の覺えのつよきに御身のかろくしく

しがたきなり

をかしくて 薫の心

いでやよしなくぞ 女の事にかゝらふはよしなき事

ぞ我が道心も是につきていかゞづれぬべしやとて

宮をねたまするなり

かなはぬ心 道心も

いであな 句宮

見はてゝしかな 末とげるやいなや

心のうち 薫

ほのめかしゝすぢなど 柏木の事

いとやうちおどろかされて もとよりも心には有しを

更におどろかされてなり

をかしと見ること 女の上をいふ

きこゆる人あれど 従者のいふ成べし

何かは 薫

ひをむし 和名抄此乎無之朝生暮死蟲也これを水魚の名

によりてのたまふなり

そぎ捨給ひて さる興の方は殺捨給ふなり

あじろ車 細むかしは女などのみのりたる車なり

かとのなほし 佛道修行に参り給ふなれば常の綾錦

ならぬ平絹の直衣さしぬきをわざとぬはせて着給へ

るなり右にこと更びて着給へりとも書り

ことさらびき給へり わざとめきて着給ふなり此びは

ぶりの反にて其様をいふ語なり

文などの 經文など

あざりもさうじ 湖阿闍梨を山より請じおろしてなり

おろして 山より

ぎなど 細義理などなり

ありし玄のゝめ 姫君の御ことを思出るなり

琴の音の哀なることのついで 八宮琴の上手におはせ

れば先其事を薫のいひ出でそれにつけて前の夜の事

をのたまへり

さきのたび 薫詞

ゑるべする びは、拍子のかしらあざやかなる物なれ

ばそれにつけても宮もおもひ出つゝ引給はんとなり

とりて去らべ給 薫

さらにほのかに 薫の語

同じ物とも 我引琵琶の音のよからぬをいふ

御ことのひゞきがらにや 過し夜に姫君の引給ひしび

はの音の面白かりしは御器のよきゆゑならんと思ひ

しに引給ふ人によりけるなりとなり

あなさがなや 此は姫君達の上を宮ののたまふなり

あるまじき 湖さやうにほめ給ふ事あまりなりとの心なり

かたへは峯の松風 そのあはれに聞ゆる片かたは松風の云々となりおほくはと註せるはわろし拾遺に松風入夜琴といふ題を「ことの音に峯の松風かよふらしいづれの緒より去らべそめけん

いとたどくしげに 宮 このわたりに 細宮の中君の所作をのたまへりこゝろえたるにやときくをり 晝よくひき得たるかと聞く時も有となり

こゝろとめて 宮の心にまかせて 姫君たちろなう 孟勿論 ようにすばかりの 孟用にたつばかりはあらじと也はうしなども 女の玄どけなき拍子をのたまふ

かきならし給へと 宮のすゝめ給ふなり 思ひよらざりし 姫君たちひとりごとを その曉にみなきし給はず 姫君たちうけ引給はぬなり

とかく聞えずまひて いひのがれ給ふなりすまひは前は末々違へ侍らじとなり とうれしきことゝ 宮 姫君の御うしろみ 辨の君の事は椎木の巻に委しうか

きたり 故權大納言 柏木 げによその人の 薫 ゆかしう 柏木 さてもかく 薫

はづかしうも 親のまめならぬむかし語をいふかく辨の知てあるにつけて他人も知てひそかにはいひ傳るかたも有んかと問給ふなり

はなちて 外にはなり かの御かげに 柏木の身に添てありしとなりものゝけしきをも 女三の御事を

御こゝろよりあまりて 柏木 ふたりの中になん 辨と小侍従 今はのとちめに 柏木 かゝる身には 辨

いかにしてかは 薫へ はかしくしからぬ 湖木にはるくゝと有は誤り

に委し いとくちをしう 薫 そのついでにも 宮の御心はぢらひまぐまひ給ふにつけてもなり

かくあやしう 山里におひ立て人の思ひやりも去るかく世なれぬ姫君達なればわが後には思ひの外なるものにやはかられて落あふれなんやと恥かしくおぼす故に前より人にも去られじとぞだて來つる云々とてそのよしをかたりてかをるにおもむけ給ふなりこ

こを薫の心とする説あれど語のさま必宮の御心なりさすがに行末 死後にとをき人は 姫君をさす

おちあふれ 崇神記に溢をあふれとよめる意にて落はふれといふに同じ古今に「世は捨つ心をだにもはふらさじてふも是なり是を後世放埒の音語と思へるは誤れり

心ぐるしう 薫 うとくしからず うとしとおぼさん様にはつかふまつらじとなり

ひとことも 一言にてもかく申聞えまらせたらん事この宮わたりに 湖八宮の御かたへ薫のおはする時を待出しかばとなり

ちから出まうできて 晝力出來なり この世の事にも 晝前世の宿縁なるべしとなり生れ給ひける 薫のむなしうなり給し 柏木

母に侍し人は 辨が母柏木の乳母なり 藤衣たちかさね 本主の服に又吾母の喪を重ねるなり心をつけたりけるが 辨に心をかけしなり

人をはかりごちて 辨をたばかりてつくしまでゐて行しとなり太宰の官人なるべし

とりもて 辨を その人もかしこうて 具して下りし人なり此宮は父方につきて 辨がちゝ左中辨は宇治宮の北方の母方のをむなり

れせい院の女御 致仕大臣のむすめ柏木のいもうとなり 山がくれの 古今「形こそ深山がくれの朽木なれ小侍従はいつか 女三宮の人なれば薫の知給はんとて 問申なり

さすがに かひなき身の人におくれ残るはかなしう思ひながらまかりとて死なぬ身なればかくながらへわたるとなり

めぐらひ いきめぐるとなり

れいの明はてぬ 前にも物語のつきなくに夜の明つれば例のといへり

よしさらば 燕

かゝるたいめんなくば たいめんして父の昔物語を聞きすばなり

さゝやかに 辨

とり出て奉り 燕に

御まへにて 女三の御まへにて失はせ給へ我はいくべ

くもあらずとて御文どもを辨にわたし給ひしより辨は小侍従に付て女三へ奉らんと思ひおたれどもと小侍従に逢侍らぬ間にかの喪など過てほどなく西の國へいきしと成べし或説に御まへにてを燕のおまへにてといへるは次の下のこと葉にそむけり

我猶いくべくもあらず 柏木

給はせたりし 辨に

さだかに傳へ 小侍従して宮へ

御ふみの返事 女三の御ふみなり

かの御手にて 柏木の手

病はおもく 柏木の文の語

ゆかしう思ふことはそひにたり 弄柏木いまはのほど

なれば女三の宮を思ふ心のことこそひたるなり

御かたちもかはりて 女三宮の尼に成給へるをいふ

柏の歌のまへに 或人云古今「辨をだにきかでわかるゝ玉

よりもなき床にねん君ぞ悲しきてふ歌の心を引かへ

てよめるなるべし

めづらしくきゝはべる 燕の生れし事

松のおひすゑ 松の二葉にたとへて祝ふ意なり

うしろめたう 源氏の御子と聞ゆべければ生さきうし

ろめたくはあらねど命あらばよその様にても見めで

ましをと歌に引つゝけたり

しみといふむし 和名抄衣魚一名白魚之云々衣書中白

生蟲也といへり白氏文集蠹蟲と有も是なり

げに落ちりたらましかば 前に辨がいひしをうく

みやの御まへに 女三宮

いとなに心もなく 女三宮

なにかは 燕

やがて別侍り 小侍従に別ること私のかなしみにはあらず此御文どもを傳へぬをうれへしとなり

つれなくて 或人云かをるははづかしう思へば何とな

くまぎらはして此文をとり給ふなり

かやうのふる人は 燕 ふと人にもいひつるやとなり

返々もちらさぬよしを 辨

ちかひつる 誓

さもやと思ひみだれ給ふ さまぐに心をやり給ふな

り

御かゆこはいひ 宮の御かたにて

きのふはいとまの日 燕の宮へ申給ふなり

うちの御ものいみも 物忌の程は出入を禁せらるれど

もあきぬれば參るべきとなり

院の 冷泉

からのふせんれうをぬひて 河唐の浮線綾 糸をうけ

て織たる綾なり

くみして 湖緒なり

かの御名のふう 細或説に柏木の判形あるなりといへ

り今思ふに花押なるべきか古への花押には名の字を

せしなり

しりにけりとも 柏木の事

源氏物語新釋

椎本 宇治二

卷の名は「立よらむ陰とたのみし椎がもとむなしき床になりける哉てふよりつけたりさて此卷には薫宰相中將廿二のとしの春より此秋中納言になる次のとしの夏迄の事をかきたり

宇治のわたりの御中やどり かげろふの日記などに初瀬まうでの時宇治にやどりしことあり

うらめしといふ人も 古今に世をうぢ山とつけたるはよの中をうきとてこの山里に住ぬるてふ意にてここにうらめしといへるとはことなり然るをかくいひかへ侍るは物語のつねなり

つかうまつり給 匂宮の御供に 六條院よりつたはりて右のおほい殿走り給へる所は

花こは宇治院といひて河原左大臣融公の別業なりしを陽成上皇も暫くおはしまし宇多上皇も領じ給ひしよし扶桑略記などに見え又承平の御門爰にて御遊獵ありける事御堂關白李部王記に見えたり其後六條左大臣雅信公の領と成しを長徳の頃御堂關白買とりき

宇治關白御堂殿息の時になりて永承七年に寺になされて平等院と名付侍りかく六條左大臣より御堂關白に傳りたるを六條院より傳りてとは書なし侍るなりと或説化鳥にありさも有べし

右の大殿 夕霧なり 川よりをちに 川のあなたをいふ御まうけさせ給へり 夕霧より

つゝしみ給べく申たれば 人の

宮 匂宮 宰相中將 薫

中々心やすくて 細説はじめは夕霧の参り給はぬをすさまじとおほせしかど薫の参り給へばかへりて御心ゆき給ふとなり かのわたりの 薫 八宮邊 おとやをば 夕霧

右大辨侍従の宰相權中將とうの少將藏人の兵衛のすけみな夕霧の子達也 頭少將此頃は少將に頭をかぬるも父の尊によりてありしにやくは中將も少將の下に在もあるべし若中の誤にて少は消ちなんか 六條院の御かたざまは 夕霧をはじめてみな

ところにつけ 彼夕霧よりの御まうけ

こゝにやすらはんの 八宮の御方をゆかしく思ひ給ふより

むかしのこと 八宮の心なり 笛をいと 薫の笛なり八宮の語なり

六條院 源氏の御ふえ ちじのおとやの 薫の笛の音いたりことを空にいへり御ぞうの 族流の意なり

かゝる山ふところにひきこめては 爰は山の間の意也 齋宮女御集の詞に例の山ふところと有を引こめて人

にいはぬことにたとへたり 宰相の君は 薫を御御にて見たく八宮はおぼせと薫は

さもおもひよらぬとなり いまやうの心あさからん 匂宮などへはおぼしよらぬ

心をこめたるなり つれづれとながめ給 かの遊びなどを聞給ひていと

つれづれ 所は 宇治は山里にて浪の音などかしがましかれば春

の短夜をもあかしわぶる所なるを匂宮は所めづらしさも御遊びにつけかの姫君の事をもとりあつめて一

夜の御やどりを出がてにおぼすなり

散櫻あれば 「櫻咲く櫻の山の櫻花散る櫻あれば咲く櫻あり

河ぞひ柳 紀に顯宗天皇まだ皇子にて明石のまゝむ首が家に隠れおはせしときの御歌に「いなむしろ川ぞひ柳水ゆけばなびきおきたちそのねはうせず或説に六帖を考誤りて貫之が歌とて引たるは云にたらず

見ならひ給はぬ人は 匂宮をさす 宰相は 薫

かれより 八宮より 山風八宮に 笛の音のみは風につけてきくべく人は心のへ

だて有てとひ給はぬよとなりかの笛を薫の吹給へると思しはかりてかくよみ給ふ成べし

宮おぼすあたりと 匂宮 われせんとて 匂

をちこちの 遠近人は心へだつともわれはむつまじく おもふ故あれば御心へだてずおぼせとそへ給へる成

べし 中將は 薫 さしやり給ふほど 舟

かんすいらく 一本にかんすいらくと書たるによりて
或説に村上御記に藤宴に舟樂奏三酣醉樂と有といへ
り又或説に一本かすい樂と有によりて河水樂一越調
なりといへり此所には河水樂ぞよせ有て聞ゆ
水にのぞきたるらう 臨なり 家集に池にのぞきたる
松などもいへり是は八宮の常の家より渡りて物見給
ふ料なり

こゝは又さまことに 八宮のおはする所

あじろ屏風などの 今昔物語山階の郡領が家檜澄をも
て天井にしたり廻りに蓮條屏風を立たり和名抄蓮條
阿無云々字書に此二字を緋竹爲座といひ又障水取
魚などもいへり爰は右の如く天井屏風などに専す
るを和名の様にあみむしろの意か又網代の意にても
有べし屏風はぬり骨に片面にあじろを張て網組して
とち合せたりと或説にいへりされど骨はぬらでも有
べし

さる心して 此人の間給はんとおぼしてなり
いたうしなし給へり 風流をつくし給へるなり
いにしへの 古き樂器のことなるをなり
ひきもの 琴の類

ふるめきたるなど 皇の御孫を二世より五世までは
王といひ孫王ともいふ又その末も氏給はらぬ間は王
といふなり仍てなま云々といへり爰かれば爰はおほ
きみといふまでつゞけてさる王だちのあまたつどへ
るをいひきて四位の古めきたるとは王ならぬ四位の
人をいふ成べしおほきみ四位とつゞくべき語はなき
ことなり又こと更に四位の王をいふべき所にもあら
ねばなり

かく人の見るべき折と

句宮此宇治にとまり給へば
此八宮にももしかやうに人めもみるべき折に取持人
もなくてはといははりてかく皆々参りあひたるなり
へいしとる人も これ右の王ならぬ四位などなるべし
かの宮は 句宮なり
かやすき程ならぬ御身 句の常にかろらかに参らんこ
とかたきなり
うへわらは 殿上童
山ざくら 山櫻にはふとは姫君を云てそのなつかしけ
れば同じ櫻の陰に一夜のやどりをするとなり扱「わ
がやどとたのむよしのに君しいらば同じかざしをさ
しこそはせめといふ歌を本にてよみ給へり此かざし

つきく引出給て

こは宮のとり出させ給ひて薫にも
誘ひ給ひし人々にもひかせらるゝなり或説に人々の
引出給といへるはわろしわざと設すと書けるからは
その席に設おかぬなりかゝるうばそくの専ら遊に御
心入たるとみゆまじき用意なるべし
一こつてうの これは客人だちのまらぶるなり 此は
櫻人をうたひてまんとして行しとなるべし且櫻人は
双調にて双調と一越調は相わたす物なればなりと仰
られしなり今按にこゝろとはそのわたしてうたふと
いふなるべく覺ゆ或説に双調の樂にはおほくは一越
調をわたしてふくゆゑなり一越調も則又呂なり薫中
將を櫻人にたとふるなりといへるも是なり且此歌は
舟にてわたりこしと又下段にあすもかへらじやてふ
を此宮におりあはぬ事にそへていふなるべし

さうのことをぞ 八宮
心にもいれず 道心故なり
みゝなれぬけにやあらん むかしの上手の今の京には
なければ耳なれぬといふか
あるじ 饗
なまそむ玉めくいやしからぬ人あまたおほきみ、四位の

とはかりの庵をさして居る事なり旅にもかりは作り
てやどるなれば句の御歌にかくはよみ給へり且庵さ
す事に又花を挿頭に折をかねたるつゞけなるべしか
くかすかに轉しいへるは此ふみの常なり
野をなつかしみ 万葉「春の野に葉つみにとこしわれ
ぞ野をなつかしみ一夜ねにける今句宮のこゝに一夜
とまり給へるは姫君をなつかしみてと云なり
いかでかはなど 大君の心なるべし
わざとがましくも つくろひがましく
ふる人ども 女房達
中君にぞ 前にも大君の歌を中君にかゝせ給ひしこと
あり
大君 あり
かざしをる わがやどをさして間給ふにはあらず花折
給ふ便の過しがたくてのわざならんとなり
野をわきてしも 此歌考べし河海にいづれともなくな
びくを花と云を引れつれど出たる所まられず其上に
櫻の歌のついでに秋のうたをもていふべくもなし
げに川風も 前の川風よめる歌をうけてげにといふさ
て宇治院とは宮にて御遊びの物の音の通ひ聞ゆるな
り

御むかへに 京より

藤大納言 紅梅

おほせごとにて 是は内の仰にてなり

宮は又 句

去るべなくても 薫よりの傳ならで匂ふよりたゞちに

も御ふみあるなり「あふみちをしるべなくても見て

し哉關のこなたは侘しかりけり仲正

宮もなほ 八宮

きこえ給へ 御こたへをなり にはふ宮は色このみ給

へばこゝにかゝる人有と聞てたゞにもあらぬうは

べの心すすみにのたまふ成べしそれを實の懸想の如

く用意して返事も聞えずばかりてこなたに心時め

く様にきこゆべしよりて一わたりの御返事などは去

給へと父宮ののたまふなり

聞給が こゝに在と

なほもあらぬ 此なほはたゞてふ語に同じなりよりて

直の字を書べし猶の字はあたらす

そゝのかし 姫君に返事を催し給ふなり

姫君は 姉君なり

雲のつれづれは 孟「思ひやれ霞こめたる山里の花ま

つほどの春のつれづれ上東門院少將 今考るに此歌は同
じ時の中に此文よりは後にやあらん

ねびまさり給ふ 姫君達

あたらしう かゝる山里に埋れ給ふを

あけくれ 父宮の

宮はおもく 八宮のうせ給はん前つさがをかけり

いでたちいそぎを 後世の

涼しきみち 極樂

たゞこの御ことにもに 姫君達のことを

かぎりなき 宮の道心は堅固なれどとなり

一所世に住つき給ふすがあらば 姉君か中君にても

一人に聲とり給はゞいま一人はそれに見ゆづりおく

べきをとたり

物まうでの中やどり 前の匂宮又は薫にもなひし人

人などを暗にいふ

三の宮ぞ 匂宮

さるべきにや 可然人にてまします故昇進も早速にし

給ふなり 孟薫昇進をいへり師此御説は下の文にかけ

て薫の昇進のことをいへり又一説上の文につけてみ

て匂宮の中君との宿因なるにやとなり此説に去たが

はいさるべきにやおはしけんともみ切べし然ども古

説何も下へかけて讀來れりいか已上かく書てけしたり

改書しならん 匂宮宿縁有て終に中君にあひ給ふといふ

なり此語を或説に薫の昇進といふはいとわろし

宰相中將 薫

其秋中納言に 弄其秋とは匂宮宇治に宿り給ひし年の

秋二歳なり薫宰相にての秋てふ事といふ人あれどは

し姫に宰相にて宇治へまうで給ふ事三とせと見えた

れば此説はわろし

いぶせく思ひ渡りし年頃よりも 實父の事をたしか

に知てより

つみかろく 柏木の

かのおい人 辨の君

七月ばかりに 弄 中納言に成し七月なり

をとほの山 こは都を出でて先づ音羽の山の秋風の音

を聞くに都とことにてひやゝかに覺え又宇治にいた

れば今ひとしほ秋のいり立ちてみゆるけしきをいへ

り

猶尋ねきたるに 猶といへるは宇治を問もおこたられ

たるが今尋來てみれば都にて思ひしよりもまだ興有

りとの意なるべし惣て此文に猶といふ詞には含める
ことあり

例よりもまちよろこび 上に姫君たちの事をおぼす事

かきたり

たのもしげなき生さき 生さき少きとは常は命短きを

いへど爰は道心ありて長命榮耀を思はぬ心よりいへ

り 右の心どもながらそれに随ひて

めぐらひ侍らん 世に有ふるをいふ

夜深き月の こは月明らかに出て山のはも手にとる計

見ゆる山里の月の夜のさまをいふのみ或説に我よは

ひにくらべてといへるは西の山のはにかたぶける月

とおもひ誤れる物なり月の出るは必東の山なるを知

つゝも私のこゝろにひかれたる説なり

り

物の上手とおほしきかぎり 細男方の上手などをいへ

り

ひとのけ 人氣

おほかりしかな 八宮昔のことを思ひ出たのたまふ詞

なり

この道のやみを 姫君達の上へかけてのたまふなり

女は限有ていふがひなき方に 弄或云女子はかひなし

とおもひすてゝも又心ぐるしかるべしとなり

すべてまことに 薫よろづのこと思捨たる故にやみづ

らは管絃などふかく去り侍らねど人の去らべの哀に

おもふ事は思ひ捨がたしとなり

こゑにめづる心 物の音

かせうも 或説に優婆塞の宮に對していへり香山大樹

緊那羅於佛前彈瑠璃琴奏八萬四千音樂迦葉尊

者忘威儀而起出法華文句第二引

あかず一聲聞し 前に立聞せし

うとくしからぬ 八宮の姫君を薫に聞えあづけ給へ

はそのむつびのはじめにもとなり

さうのことをぞ 姫君

いと人のけはひもたえて 只にもさびしき所のよ更

けたる様なり

わざとなき御遊びの まうけもて出たる音楽とはなく

てほのかにかきならし給ふが夜のさま所がらにつけ

ていと哀深しとなり

うちとけても 姫君達

ならし初つる 暁馴すと鳴すとを兼

よごまれる 若くて久しきよはひのこまれるをいふ

かく去たしきははじめをならはし初たる残りせば皆行

末久しく聞ならし給へと是もゆづり聞ゆること葉な

り

我なくて かく契りつる言は我が後にもたえじとたの

もしく思ふとなり一言に琴をかねられしは草庵によ

れる詞なるべしかへしも同じよせなり

かゝるたいめんも 是も宮

かぎりならんと 此次にやがて薨じ給ふべき前つさが

なり

いかならん 薫

すまひなど すまひのおこりは垂仁の御時なり扱神龜

三年に諸國より相撲の人を進たり是より後東國など

へ使をつかはされてよきすまひ人をめして七月相撲

のせちといひて十六七日にめしあはせとて有廿六日

内取廿九日扱手とて勝れたるものどものとるなり委

は諸記録に見ゆ

とはすがたりのふる人 辨なり

君たちも 姫君達

世の常のけさうびてはあらず 薫のさまなり

さるべき御いらへなど 大君なるべし

三宮 匂

心のうち 薫

すくせことにて 薫に

りやうじたる心ちしけり 姫君を

こゝろほそくのこりなげに 上にみゆ

さわがしき程過して 相撲など

兵部卿の宮も 匂

女はまめやかに 匂宮のまめにおもひ給事とは去り給

はぬなりなほざりの事のやうに返事をもし給へる也

わづらはしくもあらで 匂宮への御返事のことをさし

て思ひも煩はずとなり前にもわざとけさうだちても

ななじとありし心に同じ

あきふかく成行まゝに 八月ばかりのこと成べし

例の去づかなる所にて あたりの寺

世の事とし 宮の仰 世の習ひ

思ひなぐさむかた 夫のおはせぬをのたまふなり

うちすてゝむか 宮のうせ給はんことをおぼしてのた

まふなり

わが身 宮の

すぎ給にし御おもてぶせに 母君の

かるくしき心ども あだなる人などになびき給ふな

となり

おぼろげのよすがならで よくくの縁ならではとい

ふなり土佐日記其外此文も此詞は皆かくのごとし

たゝかう人にたがひたるちぎりことなる身 かく様に

山里に生立給ふ身なればよの人にはたがひたる宿世

の此身とおもひとりて爰に一生をつくし給へとなり

かくおもひとりて過せばおくの月日も何のことも

なく過さましもぞとこは此宮よに捨られ給へる様

子なれどもよく思ひとりて今まで過し來給ひてとて

もかくても夢のごときよの中ぞとおぼしさとりたる

御心よりのたまふなり

まして女は かゝる人去れぬ所に堪こらへて在を云

いちじるくいとほしける 下へつゝけて心得べし

ともかくも身の かくは聞たまへども今更姫君の御心

には

身のならんやう 末に

おくれ奉りては 宮に

かく心ぼそき 宮の御身の久しかるまじき様にのたまへばなり

御心まどひ 姫君達の御心おもひやるべし

心のうちにこそ 八宮

思ひすて給つらめと 恩愛を云、

ならばひ給ふて 姫君達を

にはかにわかれ給はん 俄に山ごもりして世を捨別るべき事

つらき御心ならねど 捨て山ごもりし給はんも姫君達

につらき御心にてのわざにはあらねど姫君達にとりてはげにもうらめしうも有べしとなり

こなたかなたたやすみありきみ給ふ 今はと捨給はん

につけても住なれ給ふ家のなごり有べきことなり

おとなびたる人々 辨などやうの人々

もとよりかやすく 下れるすぢの人なり 王孫なる身

のいふがひなき様にはふれたるはよそ人はこゝろに

もさのみかけて思ふまじけれどみづからみかどをは

づかしめ奉る理なれば忝なしされども宮とまづしき

はよの常なればさびしく在ははぢならずたゞ心のおきてを守るべしとなり

かゝるきはに 王孫を云

さすらへん契り すべなきもの、妻などになることを

以て契りとのたまふならん宿縁の意にとりてはこゝ

はかなはず

生れたる家ほど 即皇子の家に生れてたとひさびしく

ふるともまばしなからその家風あるをよしとすべき

なり

もてなし 姫君を

きゝみゝにも よそ人の外聞なり

わが心ちにも 後見つかふまつる人の

にぎはしく 爰の専らの下心はもし入内などすべき

聞え有とも時の后女御などのいと時めく有て中々に

心に叶はずあなづらははしかるべき時世ぞとならばか

ろくしくもてなしも参らする事なかれとのたまふ

意なるべし又は外の人にゆるさんにも是になぞらふ

べし世とならばと云にて入内などの心を去らせたり

或人おちぶれたるよのごとく心得しは此前の文にた

がへり

なからんほど かりに寺にまんほどの様にはのたまへども心には今をかぎりとおぼすなること前後の文

にて去らる

心ばかりはやりて 身はかくて堪こもりますとも心ば

かりは慰てとなり

ふた所 姫君

ひとりゝ たい一人のことをかくいへり歌にも文に

も多き語にて前に出たり

いま行末も 必しもかくてのみもあらぬ世の中なれば

常に誰もいひ思ふことなりかく宮は物哀にのたまふ

につけて女はらからのかくおぼすべきをりなり

三昧 念佛三昧

人参りて 宮より

むねつおれて 姫君

いかにゝと 姫君より

ことにおどろしくはあらず 宮より御こたへ

いまねんじてなど 寺より下らんとなり

はかなき御なやみと 阿闍梨の中

なにかおぼしなげくべき 御心なとやめ給そとなり

今さらにないで給そ 寺より

そなたのしとみ 此寺のかた

見出し給へるに 姫君

うせ給ぬると 宮

心にかけて 姫君

なみだもいづちがいにつん 常にもあることなり

おぼつかなさそひて やま寺におはしながらふればな

り

なき人に 魂さりて

御さま形 宮

今さらになでふ あざりの申なるべし

かたみに御心とやめ給まじき 執着をいましめたるな

り

おはしましける 寺に

あざりのあまりさかしき 常にならひ給はぬ行者のつ

とめ萬にあまりしかりけんを女君のかなしく覺すべ

きなり

にくつらしとなん 姫君は

入道の 宮の

かうみゆづる かくの如くなり

生るかぎりは かゝる山里の御なぐさめにも姫君達を

朝夕に見給ふなればはなれがたくて一向の出家はと

げ給はざりしが死別はせんかたなしとなり

またひ給ふ御心も 姫君

中納言殿には 薫

さゝ給ひて 宮の薨じ給ふを

かたくやなど 前に在

朝夕のへだて 此へだては限りの意にて死なん命はい

つもの朝夕とかざる事なきをいふ或説はまはり遠し

人よりけに 勝に

きのふけふ 古今「終に行く道とはかねてさゝしかど

昨日けふとはおもはざりしを

あざりのもとにも 薫より

又おとづれきこゆる人だになき 薫より外には

物おぼえぬ御心ちどもにも 姫君達の

年比の 薫の御心

御身どもにて 姫君達のなり

おぼしやりつゝ 薫

爰にもおい人どもにことよせて 姫君達の御方へも辨

などに心よせ給ふにことよせて御誦經の布施物など

まるらせ給ふなるべし

あけぬ夜の心ちながら 姫君達の夢の様なる心ながら

過行く月日なれば九月になりしとなり

涙の瀧も 河古今「我世をばけふかあすかとまつかひ

のなみだの瀧といづれたりけん

かぎりあらん 姫君達

なぐさめきこえつゝ 君だちを

思ひまどふ かくてはいかゞせん

こゝにも念佛の僧 寺にはもとよりにて

おはしましゝかたは 宮の當におほせし方は佛を安置

して宮のかたみに見るとなり

兵部卿の宮 匂

さやうの御かへりなど 姫君達

中納言には 薫

我をば 匂宮

いで立給ひしを 此は既に出立給ひしをかくと聞てや

め給ふといふなるべし少し詞をはぶき過たり

をじかなく 此歌の意は姫君の此秋のかなしからん御

心を覺しやり末は大かたの野邊の萩の露に匂宮の戀

しうおぼす心のあはれと涙とをそへ給ふ物なり下に

かれ行野べと有も則此萩のよせにて且折ふしの秋の

哀れもいとゞしうながめてものおもひまゐらせらる

るをおもひまゐり給へとなり或説どもは皆わろし

たゞいまのさうの 御文の詞

げにいとあまり 大君の

たびくゝ 御こたへ申さぬ事

けふまでながらへて 中君

又かきくもり 涙に

おしやりて 硯を

やうくかう なげきも限りこそあれと人のいふがげ

にも日敷ふれば起るゝほどに成ぬよと思ふこと

われながら世はうとましきもの哉とおぼすなり

きたる 宇治に

いかでか 大君

たちかへりこそ 御使の中なり 下に匂宮の傳給ふこ

と有をみるに必夜も歸るべき仰有しなりけり

いとほしうて 使の心を

なみだのみ 宮の御歌にをじかなくと有をうけて鹿と

われともろごゑになくといふなり問人もなきをこめ

たるか

いだし給つ 侍ふ人上をつゝみふんじてやるなるべし

雨もよ 雨夜といふをのべていへる語なり後撰にも落

くばもの語にもたゞ雨よのことにいへりめもの反ま

なればまかひふなり此事諸説誤れり

さゝのくまを 此は古今に「さゝのくまひのくま川に

こまとめてまばし水かへかげをだにみんてふ語のみ

をとりにて小ばた山の篠生まげりて物おそろしき所の

さまにいひなせるなりされど此歌は萬葉に佐楡の隈

楡のくま川と有を後の人誤りてさゝの隈と出たるを

即とりたるは古學なき世のわざなり

参りつきぬ 京に

御まへに 匂の

いたくぬれて 使人

さきくゝ さきくゝは中君の手跡なればなりまへくゝ

は中君書しを是は大君の書給へばなり

いますこし 此度は大君の書たればなり

よしづきたるかきさま 姫君

いづれかいつれならん 先なるや中の君後なるや大君

の手とも知わきがたきとなり

まつとても 待

まだ朝ぎり 手のかはれるを又も見ば思ひわかるゝこ

とも有やと成べし

朝ぎりに 鹿の音はよべのかへしをうけて且父宮にお

くれ給ふをそへたり
もろごゑは なげく筋はことなれど鹿もなく音はおと
るべからずとなり

あまりなさけ 姫君

ひとゝころの 父宮をのたまふ

うしろめたげに 父宮のさきく仰置れしも只かゝる

事

聞え給はず けふの御返りは

この宮 匂を云

なげのはしりかい給へる 匂の

あまたはみしり給はねど 此御姫君達かゝる文をあま

た見あつめ給はねどなり

ゆゑくしく 匂の

ことをませ聞んも 此御姫君達

山ぶしだちて 風流なきものになりて過さんとなり

中納言殿 薫

かれよりも 薫よりも

けうとげには 氣疎

御いみはてゝ 暇五十日

みづから 薫

東のひさしのくだりたるかた 古へは父母の喪にはす

べてかくなりおちくほ物語に此君の父君の喪の中を

いふに君たち例にぬ屋のみじかきにのぼり給てと

いへり

ちかうたちより給て 薫

ふる人めし出たり 辨

いとまばゆく 薫の

かたはらいたうて 姫君

かやうには 薫

昔の御心むけに 八宮の聞えおもむけ給ひしをいふ

なよびけしきばみたる 我このましき心をもたらねば

人もけやすくいひ習てかく人づてのことはいひなれ

ずとなり

あさましう 大君

心より外に空の光 服忌は日の御かげにはゝかるは常

なり自らもさるときはまかおそれらるゝ物なり

事といへば 事とのみいふは惣て大きなことをいへ

り今はそれ迄はなけれど事有といへば餘りなる迄ふ

かくとりなし給ふよとなり

月日のかげは 御心と月日をはゝからで問ひなどし給

はゝこそあしからのおのづから家の内にして客人な
どにもかくおはさんるさへさるかたにのたまふはい
かなること共思ひやりがたくいふせきとなり思ひや
れども行かたもなくてふ歌の思にてのたまふなるべ
し

又おぼさるらん 姫君の此ほどの御心をもいひなぐさ

のんとこそ思へとなり

げにこそ 細さぶらふ人々也 かく頼ひなく歎給ふ御

さまを薫のなぐさめ申給ふ心ばへはあさからぬよし

を申なり

御心ちにも 大君

むかしざまにても 今いよゝなり故宮のおはせし時に

問給ひしにてもこゝろざしはおもひ去り給はん

すこしむざりより給へり 大君

おぼすらんさま 姫君たちのなげきおぼすらんほど又

故宮の薫にいひ置給ひしことなど薫のこまかにいひ

てとなり

うたてをゝしき 大君の薫のさまも思ひ給ふ心なりう

たては物をあやにくにするなりをゝしくは雄々しく

にて爰はつよきまひことなどは見えすとなり

はゝこそあしからのおのづから家の内にして客人な
どにもかくおはさんるさへさるかたにのたまふはい
かなること共思ひやりがたくいふせきとなり思ひや
れども行かたもなくてふ歌の思にてのたまふなるべ
し

又おぼさるらん 姫君の此ほどの御心をもいひなぐさ

のんとこそ思へとなり

げにこそ 細さぶらふ人々也 かく頼ひなく歎給ふ御

さまを薫のなぐさめ申給ふ心ばへはあさからぬよし

を申なり

御心ちにも 大君

むかしざまにても 今いよゝなり故宮のおはせし時に

問給ひしにてもこゝろざしはおもひ去り給はん

すこしむざりより給へり 大君

おぼすらんさま 姫君たちのなげきおぼすらんほど又

故宮の薫にいひ置給ひしことなど薫のこまかにいひ

てとなり

うたてをゝしき 大君の薫のさまも思ひ給ふ心なりう

たては物をあやにくにするなりをゝしくは雄々しく

にて爰はつよきまひことなどは見えすとなり

東のひさしのくだりたるかた 古へは父母の喪にはす
べてかくなりおちくほ物語に此君の父君の喪の中を
いふに君たち例にぬ屋のみじかきにのぼり給てと
いへり
ちかうたちより給て 薫
ふる人めし出たり 辨
いとまばゆく 薫の
かたはらいたうて 姫君
かやうには 薫
昔の御心むけに 八宮の聞えおもむけ給ひしをいふ
なよびけしきばみたる 我このましき心をもたらねば
人もけやすくいひ習てかく人づてのことはいひなれ
ずとなり
あさましう 大君
心より外に空の光 服忌は日の御かげにはゝかるは常
なり自らもさるときはまかおそれらるゝ物なり
事といへば 事とのみいふは惣て大きなことをいへ
り今はそれ迄はなけれど事有といへば餘りなる迄ふ
かくとりなし給ふよとなり
月日のかげは 御心と月日をはゝからで問ひなどし給

有べきやうもなかなしきとなり

はつるゝ糸はと末はいひけちて 古今「藤衣はつるゝ

いとわび人の涙の玉の緒とぞ成ぬるてふ意なり掛

末はいひけちてとあるは置所なきとの給ふが薫をた

のむかたにや聞えんとおぼして其袖のはつるゝいと

は泪の玉の緒ならぬとはかなき様にとりなし給ふと

いふにや

ひきとゞめなどすべきほどにもあらねば また御歌の

さむる程ならぬと云ならん

おい人ぞ 辨

こよなき 大君とはことの外かはりたる御かはりなれ

ばこよなきとなり

ありがたく 柏木のありさまを見知たるなり

かうあやしく 薫

いはけなかりし程に 薫

古院に 光源氏

世の中のにほひも 人のおぼえ身の榮など

かくはかなく 故宮の

とまり給へる御ことゝも 姫君達をいふ

ほだしなど聞えんは 姫君達の心ぐるしさに世を見捨

侍らずといはんはわがものがほにかけ参らするやう

なれどといふなりうけくしてふ語は前後にも有て

人をかけておもひはなれがたきをいへり此ほだしも

古今に「世のうきめ見えぬ山ちへいらんには思ふ人

こそほだしなりけれどふを少し轉してのたまへる語

なるをおもへ或説はいかにぞや

かの御事 故宮にいひ契りしこと

さるはおぼえなき 是は柏木の事

この人は 辨

たゞそれかと覺え給に 柏木によく似給ふとなり

おぼはれるたり 涙に

かの大納言 柏木

は、北方 八宮の北方

遠き國に 西の國へ下りたるなり

は、君も 姫君の御母

かのとのには 致仕大臣方へ

人もいとやんごとなからず 辨がさま

心ちなからぬものに 心なきにはあらぬものとなり

むかしの御事は 柏木の事

中納言のきみ 薫

御心どもには 姫君の心をいふ

いとほしくも 柏木の爲なり

つまにもなりぬべき 此柏木の事を外へもらさじと思

ふが姫君を得たく思ふはしとなるべきとなり

今はたびねも 宮もおほさず君だちも引入給へば

古宮の 此れやかぎりの 「あふ事はこれや限のたびならん草

の枕も霜がれにけり猶あらんか

秋やはかはれる 故宮にたいめせしは八月今は九月に

て同じ秋の内なればなり

おはしにけんかた 宮の

ことに人めいたる 宮の御住の

聞給にも 薫

かゝるさまの人かげなど 佛さへおほさずは僧なども

こじとなり 姫君たち

とまりて思ひ給はん心ちどもをくみ聞え給 こは上に

日敷も隔てぬにおはしにけん方もしらすあへなきわ

ざなりやと有ごとくもとよりはかなきをおもひくし

てをるに此よをかりそめなる物ぞと鳴きて去らすな

らんとなり新撰萬葉に「常ならぬ身を秋くれば白雲

に飛鳥すらもかりとねをなくてふ歌に似たり後撰に

もかりくゝとのみ鳴きわたるらんとはよめり

秋ぎりの こは上に日敷もへだてぬにおはしにけん方

も去らすあへなきわざなりやおぼして

兵部卿 句

いまはさりととも 句 姫君は

はかなき御かへりも 此めるも辭は下のうひくしく

おぼさるべかんめる ふるめきたらんと云にかけて見るべし或人此もは助

辭と思へるは誤なり

かういとうづもれたる 姫君達

し出たらんてつきも 宮への返りごとせんは見ぐるは

しからんとなり

さてもあるまじくて 是も姫君達の心なり

かくたのみがたかりつる 宮のはかなくなり給へるを

いふ

きのふけふとは 河「終に行道とはかねて云々

あけくれの事にきゝ見しかば 古宮の御命のほど長か

らんことを朝夕にのたまふをきゝてやがてかくれ給

ひしをも見れば常にもいひ去らせ給ふるがごとく

はかなき世とおぼえてわれもおくれまゐらするほど

はあらじといひしにかく猶ながらへて月日を過すか
 なとなり或説には聞見しかばてふ詞のみしをすて、
 いへれば理りたがへり
 おくれさきだつ 「末の露木のまづくや云々
 きしかたを 古宮おはせし時を
 れい見ぬ人かげも打つれこわづくれれば 下に何とも見
 ざりし山がつはおはしまさでのちたまさかにさしの
 ぞき参るは珍しく覺え給ふとあれば此うちつれて見
 ゆる人かげは匂宮などよりの使の來りたるときそれ
 とさかぬ間には先おそろしうおぼすをいふかさもあ
 らぬものゝ打つれ來べき所ともなければなり
 心をけたすいふも 二たび榮ゆる春にあはんの心
 きゝ給 姫君
 御念佛にこもり給しゆゑ 古宮
 人もまゐりかよひしか 弄寺よりも宮よりも
 いかゝと大方にまれに 姫君のいかゝおはすやと問也
 ほのめき参らん あざりのみづからは
 おはしまさでのち 八宮の薨じ給ふ後なり
 たきゝこのみひろひて 山里のさまをいふ
 とし比にならひ侍りにける あざり

冬ごもる山風 こなたよりも
 わらばななどのぼり行も見えみ見えすみ たゞ人のを
 めづらしみてのみにもあらで古宮の入給ひし山方な
 ればけふの法師原のかへるもことにたゞならず見送
 り給ふなるべしかつ山里の様をもよくかきたり
 御古宮ぐしなど 出家し給はんと覺せし時はうき事に思ひ
 しを今はさやうにてもましまさまじかばとなり
 いか大君に哀に 宮の山住しておはしまさば
 君なく 宮のおはしますとおもはばそなたの山の松
 のゆきも一入ことにながめられましを今は見ても興
 なしとなるべし
 がけみち 和名抄磯道也磯乃和 氣未知と有てけはしき道を云
 或人陰道といへるは誤なりさらば木かげの道といふ
 ごとく山かげの道といふべし
 おく山の 雪ははかなきものなれど又もふるをきえに
 し人のふりこぬをなげくなり大輔集に松の雪の氷り
 たりしにつけて紫式部「奥山の松葉にこほるゆきよ
 りもわが身世にふるほとぞはかなきてふ歌有を記者
 の歌を前にはのせず宇治に至りてのせたるといか
 ゃといふ説あれど少し詞をかへてはのせまじきもの

にもあらず前にもみづからの歌に似たるが一向なき
 にもあざりしなり
 あたらしきとしは 公事多ければ
 ふとしもえとぶらひ 宇治へ
 よろしき人だに 大かたの人だにうとく成たるをい
 ふ
 なのめならぬけはひして 薫はおもき人なるをいふ
 見られて おもはぬ人をば目にもかけぬうちにて深き
 に見入るゝなり
 すみぞめならぬ 喪の中のいろは専ら黒染を用るから
 に調度もくろうなしたるを用ひて即それをも黒染と
 いひなすなりさて姫君達はまた黒ぞめにてます故に
 客人の爲に俄にさらぬを取いづるなり
 たいめし給ふ事をば 姫君
 人の思給へれば 薫の
 聞え給 物ごしになるべし
 うちとくととは 大君の様を薫の思ふ
 かやうにて 薫
 猶うつりぬべき 薫はもとより世外の心あれど猶色に
 はうつるべきものと思ひ給ふなり

宮のいとあやしく 古宮の仰せしことを匂宮へかたり
 けんやそはさだかには覺えずまた此宮はかゝる筋に
 おもひいたらぬ事なき御心のくせにておしはかりに
 のたまふにやそはあらねどかくに我こそよく聞え
 まゐらすべきをさもなくして中の君のつれなきと恨み
 給ふと大君へのたまふなり
 もうしきこえたりけん 古宮の仰られしことを匂宮へ
 薫のもらしたりしやさだかには覺えず又匂はかゝる
 筋を耳とめて聞置給ふ御くせなれば君たちの御う
 へをまゐりてせめ給ふにやあらんとひめ君へのたまふ
 なり
 おしはかり 匂の
 こゝになん 薫の自らをいふ
 つれなき 君の
 もてそこなひ 薫の我さまたぐるとのたまふなり
 心より外なるごとく 我はいかでと心にかへりてこと
 の外なる恨ぞと
 里のゑるべ 此宇治のさとのゑるべはげに我身ならで
 はあらじとおもふゆゑ匂へあらそひ侍らすとなり
 古今に「海士のすむ里のゑるべにあらなくに恨んと

のみ人のいふらんでふにて書たり
なにかはいとさしも 何とてかくつれなくはいらへ給
ふぞとなり

すい給へるやうに 匂宮

おどけたる人こそ おどけとはおほどけおほどかなど
いふ皆同じことなれど爰なるは心のほれくしきさ
まなる方にいへりさて爰は世中にさるおどけたる男
こそ心になふともなき女をも心ながく見過してこ
となくて終るも有又はじめは心ながかりしもことに
よりてふと思ひくづれそめては我好ましき名をもた
ち女をもなごりなくはなる、様のことも有は世のつ
ねにて少なからぬこと、先人々の上をいひて匂宮は
さるおどけたる君ならず心におもひたて思ひ入給ふ
ふしのおはすれば其御心にそむき給ふ事多からぬ中
君におはさば終に途給ふべきなりとなり或人こは匂
宮のことを先はいひながら薫の心をもおぼせまゐら
するついでなりといへるはさも有べし

さるべきにぞ 宿縁

くづれ初ては 「神なびのみむろのきしやくづるらん
心のふかく 匂宮は

そむく事おほくなど 心みなはかなひがたき物なれば
多といへり

人の見たてまつりまらぬ 匂宮の御心は人はよくまら
ねばたゞすき給ふ心淺さなといふなれど御下心のさ
はあらぬを我こそよく知て侍れとなり

もしにつつかはしく 匂宮にあはせまゐらせて
心のかぎり 薫の

御なかみちの 薫の中だちのことを戯れていふなり
みだりあし 中道といへば足つかからかする事にのたま
へど惣てそれにつけては我くるしきことも有べけれ
どの意なり

いらへんかし 妹君の方にとりて
いかにとかは 姫君の詞なりいかにのたまふにか聞わ
きがたしとなり

かけくしげに 下の詞によるに君は妹君のごとくお
もふも又わが上の様にも又匂宮の上ときも且薫の
みづからの事の如くも有てかづらひきこゆればこ
たへにくしとなり

かならず 薫詞
夫は雪を 或人云御身のうへは只かく雪を分て参りた

るうへばかりにさしおかせ給へどあさきやうにい
ひなしてふかき心を顯したることばなり

御心よせば 匂宮の

又ことにぞ 中君をさす

ほのかに さきく匂宮と御ふみのかよひ侍りし様に
承りしが君達の中いづれとかきこえ給ふとふなり
ようぞ かく問給ふにつけてさきく我よく中君にゆ
づりてみづから御こたへをかゝざりしとなり

はづかしうむねつづれ 若我匂へ返しせしならば
雪ふかき 薫の外にわれは交通はせしことはなしとな
り

さし出給へれば 弄言にはいひがたきなるべし

つらとち 本は通はん道の勞をいひ末は匂宮の道し
るべがてら我思ひを先とげんとなりさてこは右の歌
にもよりけふこし勞にもつけて雪ふみわけてなども
いふべきを河をわたるを萬葉にも古今にも戀の成こ
とにたとへ侍ればかくはつかけ給ふなり

さらばしも しもはこと深いひ入る時の助辭なり
かけさへみゆる 萬に「浅か山かけさへみゆる山の井
の淺き心はわがおもはなくてふをあげて我心ざし

雪氷をふみてこしからは淺くはみ給はじとなり
ものしうなりて 何とやらんみづからの事に成て

えんげにも げは付字なり 艶なり

かうこそは 薫の好みにかなひたるなり

しらすかほ 大君は

心はづかしう 薫

空もとぢぬべし 雪の空くらかるべきなり

心ぐるしう 薫

たゞ山里のやうに 薫京の住みの静なることをいへり
いとめでたかるべき事 前に心細く悲しきことの改ま
るべきを春待出でしかなといひしをてらすことばな
り

いかにさやうには 故宮の仰ありし故なるべし

かの御うつり香もてさはがれしとのゐ人ぞ 橋姫卷に

薫の衣をかげ給ひしとのゐ人なり

かつらひげ 燈のごとく長くたれたる髭をいふか又つ

くりひげか考べし或説におもつらひげなりといへり

おもつらひげといふ事俗にいふ事あるか覺束なし

いかにぞおはしまさで後 古宮

うちひそみつゝ 殿の人

野山にまじり 或人いへる後撰に「春雨のふらば野山にまじりなん梅の花笠あるといふなりてふ梅の花がさをふくみて暹昭の「わび人のわきて立よる木のもとはたのむ陰なく紅葉散けりてふに引かれたりとおはしまし、かた 古宮

おどろくしく かく仰あることなれば ひきつれ参りたるを 秣などもて おぼえがけす御庄の人ども多く参りたるははしたな くおほすべきなり

ほとけのみぞ ばかりの意なり身と思ひ誤り易し花のかざりは瓔珞花臺などなり 御ゆか 床 おこなひ給けりとみゆる 古宮の

老人にまぎらはし給ふ 下の語を思ふにかの御庄のの、いかと思はんとてはしたなくおほす故に爰にわが問べき老人の有て又も來べしさる時はくやうにつかうまつれとのたまひて老人のとふといひまぎらはし給ふなるべし

ほいをもとげば 薫も出家したらばこゝに参りて行ひ侍らんとちぎりしなるべし

としかはりぬ 薫三十三のとし 空のけしきうらゝかなるに 宇治のけしきかうまでながらへ 君達ほうれへのとげがたきなり有がたくも 宮におくればかたときもながらふる事有がたくおほしつるを氷とけて春になるまでながらへしよとなり

立よらん 六帖「うばそくが行ふ山の椎がもとあなそはそはしとこにしあらねばといふ歌によりてうばそくの宮のおはせし所を椎がもと、いひなしてわれも世をのがれんときの頼み所と思ひしを今は空しき床となりしよとなり

御ざうなどつかうまつる人々に 薫の知給ふ庄この近くにはまくさなどの事いひやりしなり既日暮ぬれば御ともの人今は出給はじとなり 君もしり給はぬに 御供の人の心していひやりしなり

君が折 上にも有し如く古宮の御くしおろしてもおはする山のわらびとて給はらばげに春の心ちもすべきをとて人々のかたるにむかへ給ふうたなり

櫻をばいかでかためて折りてんやといひてまた喪のかなしみにこもるをそへたり まことにこゝろうし 匂宮 たや中納言を 薫 をかしと思ひながら 薫 うしろみかほに 薫姫君の後見になりて 心にかなふあたりを 宇治の君の如き心になふあたりを得ばかくはあらじの心も有べし

雪ふかき 春るべき親もあらねば春來て雪氷を分て小せりつまんよしもなしとよみて我身をも誰爲にかはもてはやす様にはせんでふ心を下にそへたり且小芹に子をそへたりおやなしとは紀に片岡山のいひにうゑてこやせるたび人おはれおやなしになりけめや云云てふをとれり

おほいどの、 夕霧 六の君を 前にもかく有 おぼしいれぬ 匂の されどゆかしげなき 匂宮の御母方にて近き御中なればなり 見とがめられんが 夕霧のゆるさす すまひ給ふ 志、まひて志たがひ給はぬなり 入道の宮も 女三 宇治のわたりを 薫 昔の御心忘ぬかたを 古宮へちぎりしこと ふかくみしり給へど 大君の その年常よりもあつさを 宮かくれ給ひての明るとし

宮よりも 匂 花ざかりの比かざしをおろし 同じかざしを折てける 哉とよめる去年のはるの事なり 宮かざしを 匂 いとゆかしう 匂宮は姫君のことを すでに見し 匂の中君へ 心をやりて 我領じたる心 あるまじき事哉と 君達 見所ある 心はなびかねど御ふみ様のたゞならぬ故に うはべのこたへをし給ふなり

いづくとか 大方の霜にだにあるを黒染にくらう霞む

源氏物語新釋 椎本

の夏

俄に 薫なり

西のひさし 暁朝日のさしくる故に西のひさしにおはすなり

そなたのもやの 西なり

うちみじろき 姫君達の

なほあらじに たゞにはあらじになり

とにたてたる 外に

几帳をそへたてたる 障子の外には屏風内には几帳を

そへて立たるなり

ひきかへる 薫の

折しも 此助辭かゝる所にて明なり

あらはにもこそあれ 内の女房など

をこがましき物の 薫

うれしうて見給へば 几帳おし出したればかの穴より

よく見ゆ

此さうじにむかひて 此さうじの通に向て開たる障子

なり

あなたにとほられんと 姫君達のあなたに入給はんと

するなり

まづひとり立出て

中君なり

こきにび色のひとへ ものきぬなり

くわさうのはかま 萱草色黄ばみたる色にて喪に着る

なり

おひはかなげに いとやんごとなき人の裳をき給ふ事

常にはあらねども御喪の中には大かたも衣などうち

とけておはすべからぬにこは御玉の前へまゐり給へ

ばもをかけ給ふべし或説に物語などにかくる帯なり

といへるはいかにぞやさるかけ帯の事むかし有しと

も見えず

すゝひきかへして 珠數

そびやかに せいたかきなり

かみうちぎに こはたゞきぬをいへり小袿にはあらず

女一宮も 今上の皇女明石中宮の御はらなり宿木卷に

も薫の見給ひしこと有に童におはしける時見奉りし

まゝのよしあり然ればそのほどの御さまをおぼえた

るなり

またわざり出て 大君なり

かのさうじは 女一宮心かけてゐ給へば此君にくらべ

て

あなたに屏風も さぶらふ人のいふなり

いみじうもあるべき 大君のもしかゝるののぞき給は

ばいみじうかたはらいたきことならんとなり

くろきあはせ 鈍色のきぬなり

同じやうなる 中君と

かみさばらかなる 少しうすき様なり

暫切てよむし いろなりとかいふめるひすいだちて 髪の色也 色と

かいふ翡翠めきてなりひすいは古事紀に翠鳥と書て

そにとりとよみ和名には鷓は曾比色青翠而食魚云

々といへり

むらさきのかみ 古への紫紙金泥の經今ものこりて有

ものなり又淺き紫には黒しても書べしと或法師のい

へり

かれよりもほそさ 中君よりも大君はほそき様なるな

り

たちたりつる君も 中君

こなたをみおこせて 大君のかたなるべし

源氏物語新釋 總角

卷の名「あげまきにながき契を結びこめおなじ所に
 よりもあはなんわらはのかしわにあげたるをいへ
 どこは東などにいとしくみてかゝるをあげまきと
 いふによれり神樂催馬樂にあることばなり薫廿一歳
 の秋より冬までの事なり
 ぬぎすて給ほどの 喪服の表衣なり
 みやうがうの糸 河行香の机四角に結たる糸なり花種
 種の香を紙につゝみて五色のいとにて結かけて佛に
 奉るなり
 たりの糸 糸柱 糸をくる物なり
 そのごとく心得て 名香の用の
 うちの人は 姫君なり
 まけたたましむにやと 匂の我にのたまふやいなや
 などかうあながちに 大に中の事を
 あるまじげなるを 人通は有まじ
 たがへ聞えじの心にてこそ 大は薫に中は匂によろし
 からんと

さるは少し 是より中の事を大のたまふなり
 よごもりたる すすとをきこと
 あつかはしう もてあつかう意なり
 けざやかにおとなひても 大君の自らの事なり
 たゞ後の世さまの 八宮の聖心になづみて
 いとあやしき本性にて 薫のみづから
 さるべきにてや 宿執にてや
 おもほしむけたることのさまあらん 外に御心むけあ
 るやと
 ことよがりなども 思はぬ事もよき様にいひなす
 人にたがひたる御くせ 姫君の
 とし頃だに 宮の御在世にさへ
 ましていまは 宮の隠れ給ひての後は
 こだいなる御うるはしさに 宮の
 松のはをすきて すきては食てなり
 よからぬ事を聞ええらせ 女房共のうちに
 いづかたにもみえ奉らん 御兄弟は同じ事なれど
 さまで さやうに
 心のひくかた 大にひくとなり
 思ひすつる 薫は世を

あらためて 大君を改めて中君へは
 なよびかなるすぢにも 風流の心にてはなしとなり
 ことのこいたる 事殘
 はらからなどの 薫に女兄弟もなければ
 まいて心にまめたる 我思をば色に出して申事もなし
 まかせては 我に
 あざやかならず 薫のさま係想心あり
 大方にて有がたう 薫の人から
 あらはになどいさめて 火をばのけ給ひしなり
 かたはらふし給へり 添ひぶし
 うちとくべう 大君
 ほどもなきものへだて 簾屏風
 内には人々ちかう 大君のかた女房達近く侍れど
 もてはなれ 用捨して
 いとしもまもり聞えず 心してわざと
 物むつかしくて 大君心
 山路分いる人 薫詞 自きし心をはんとて
 いとむくつけう 大君心
 へだてなきとは 大君詞
 かゝるをやいふらん 薫をあはめて言

へだてぬ心 薫詞
 ちかごと 誓言
 御心やぶらじと わりなきわざはすまじきとなり
 玄れものにて 愚癡なるなり
 過し侍るぞや 大君に逢はで過す事をいふ
 心にくき程なる火かけ 火影かすかなり
 かう心ばそう 薫心
 さはり所あるまじげ 我こといませては過すまじとな
 り
 あらましかば もし我外に尋る人もあらばとあやぶみ
 給なり
 さてやみなまし かうはみかたがらんとなり
 心ぐるしくて 重てあはんと
 かゝる御心の 大君詞
 袖のいろ にび色
 いとかうしも 薫詞
 さばかりのいみおくべく 隔心なり
 はづかしうも 大君心
 人よりはげに 薫心
 かゝるいみなからん程に 一周忌過てとなり

いとみ所多く 薫心
 みやのたまひし様 大君心 八宮のなり
 ながれあふ 泪の
 たびのやどり 薫心
 女もすこし 大君
 なにとはなくて 薫詞
 やうく 大君心
 いとほしたなうして 直面にはあらで
 いまだにいと 大君心 明はてばいかにと
 ことありがほ 薫詞
 又人はいかおしはかり 實なる事なしとは
 たゞ世に 夫婦の様にてさもなければ
 あさましう 大君心
 いまより後は 大君詞
 もてなし給はんまゝに 薫の心のまゝにならんとなり
 けさは又聞ゆるに 今朝は先大君の詞に隨て歸り給へ
 となり
 あなくるしや 薫詞
 さうじくちまで 薫大君をおくりてもとのおまし所に
 歸りていね給ふなり

心のどかならましや 評すぬかりつる心うつとも覺
 えすむねわるしやいかでかう立入し上にそことのく
 だくしきまめ事をば去でしなきと思ふなり
 たのもし人ならで 父母ならで
 みづからの 大君の我身は誰かうしろみんとなり
 この人の御さまの 人とは薫なり我大かたのはづかし
 げならば
 此君は 中君
 まらうどは 薫
 あげまきを戯に 大君心
 ひろばかり 詩計
 人々日はのこりなくなり侍ぬ 父君の一回忌の事
 くみなどして 名香のいと
 おき給ひて 大君
 中納言殿 薫
 けさより 大君詞
 さもみぐるしう 御返事自せさせ給はぬとて
 御ぶくなど 姫君達
 うすにび 輕き服
 み奉り給ふに 大君の

よのものの思 大君心
 おもふ様になひて 薫の前に大君を置て中君にはう
 つるまじとのたまへどもとなり
 かの人 薫
 つゝみ聞えし 大君の
 例のやうに 一夜のやうに
 心あやまり 大君心
 思ひの外に 薫詞
 今はとて 大君詞
 恨むびて 薫
 人めして 辨
 よにまらぬ 辨其外内の人々心
 たゞ入れ奉らんと おもふ様に薫にあはせ申て京へ入
 れ奉らんと思ふなり
 かうとりわきて 女房達の薫をなづけ給ふほどにうし
 ろめたきこともやと
 心もてやはと 吾心とうちとくるとはなし皆女房など
 の媒にてこそ
 ほのかにも見初ては 我よりよければ
 ほいになん 中君は薫の本意にあらぬとて

けしきだに 大君の中君にそのけしきまらせたきとな
 り
 萬にうちかたらひ 中君を
 むかしの御おもむき 父宮の
 此人々 女房達の
 げにさのみ 大も中も同じ様のものにひとりすみは
 御ことをのみ 中の
 君だに 中
 かゝる身の有様 薫などにあはせてかく山里にまづみ
 たる身も慰ほどにせば
 いかにおぼすにか 中君心
 ひと所 中詞
 きこえ給けん 二所ともに仰しものをととなり
 敷そひたる 中へ
 げにと 大心
 なほこれかれ 大詞
 まらうど 薫
 姫君いとむつかしと 大君
 うらみ給を 薫の
 いらへもし給はず 大心

ひと所おはせましかば 父にても母にても
 すくせなど 縁にまかせて
 こははかしくしき 宮の遺言の様に奥深き事はあらね
 ば
 ひきうごかしつばかり 人々の手をひくがごとく深切に
 すめれど
 かゝるすぢ 縁の事
 いますこし 大君よりなほ
 あやしうも 大君のせんかたなくて
 さる心すべかめる 薫に合せん
 さはり所 係想人のさはり成べき辨などさへ薫に心を
 合すれば
 かゝる 御住所の奥深からぬ
 まらうどは 薫心
 けせう 顯證
 いつありそめけんことゝもなく 何となく逢たしとな
 り
 御心ゆるし給はずば 大の
 おい人 辨
 姫君おはしわづらひて 大心

思ひしにたがふ 思ひの外に好色の心有て
 思はなれ ひとりすみと
 この君の 中
 此御ゆかりに 中の事を云
 みを分たる 兄弟なれば
 よろしげに 薫へ此おもむきを申べしとなり
 いと哀に 辨詞
 さのみこそは 辨詞
 いとよく聞えさすれど 夫も申しに
 さはえ思ひあらたむまじき 薫の
 兵部卿 匂
 いとよくうしろみ 中をよくとりもたんとなり
 ふた所 父母
 聞えさせ給はんにはえしもよく 異本させ給はんにし
 もいかゞ世にと有り
 さしつどひ 其通りよからんとなり
 かしこけれど もたいなけれど
 此殿の 薫
 ことさらにもつくり出まほしき 匂に中を薫に大をあ
 はせまゐらせん事は誠につくり出たらんやうなる事

なり
 雲霞をやは 雲霞を分てうき世の外にもやはといひの
 こしたる詞
 いとにくゝ 大心
 あつき程 八月
 いかなれば 薫心
 ものごしなど ものへだてゝのはなしも
 心して 内の人々
 人の玄のび給へる 薫
 たどくしからず 薫と大と中とを
 うちもまどろみ 大の
 何心なく 中の
 いとほしく 大心
 うちきすかた 薫
 いみじういとほしく 大心
 いかに覺え給はんと 中の心おしはかりて
 あらまじごと たゞ教訓してだに
 中納言 薫
 あらざりけりと 大君にあらずと
 あさましげに 中の

かくれ給へらん 大の
 ほいのたがはん 大を
 此一ふしは 中の君へ御心をうつさじと
 例のをかしくなつかしき様に 前にかたらひ給ふ事も
 あれば
 おい人共はしそじつと 草子地
 御かたち 薫の
 はうちすきて 薫
 あふひとから 薫心 大にあらぬからとはいへど
 あひおほせよ 薫心 中もいさめて
 いとほづかしう 中心
 姫君をつらしと 大
 かべの中のきりくぞはひ出給へる 大
 おぼすらん 大心
 かたみに物も 兄弟ともに薫の見給へることゆかしげ
 にならんと大のおもひてありしにたがひて口をしと
 なり
 辨はあなたに 薫より
 きしかたの 薫詞
 身もなげつべき 大のつらさに身をすてんとすれば中

君をばすてがたくおぼす大の心をむなくするなれば
ばさすがに心ぐるしくて又すてがたきなり

おとし置 中を

思聞ゆる 大の事

いづかたも 二所ともに

かたぐくに 大をうらむの深きなり

宮など 句

心たかくと 句へなづまへとて我をばはふくにやと

恨て書なり

姫君もいかにしつる 大君

おろかなる心も 中君をよそに思給ふてはと

御文あり 薫の

例よりは 大心 中への後朝のふみかと思ひ給ふなり

そこはかとなく 大心

きこえ給へと 大心

ゆづらんも 中へ

ことなしびに 大の事 無いとよむべし

をかしく 薫心

うけひかぬにわびて 薫の中を

かくつれなからんも 中へ

思おかれて 大君に

はじめの 大君に思ひ寄り

心をそめけんだに 薫の大に

参り給 薫

宮も 句

まざるゝことなく 薫心

おきおはしけり 句

風につきて 薫の

ふと夫と 句心

はしをのほり 薫

なほうへになども 句の

かのわたり 宇治の事

ものゝついで 句心

みづから 薫心

あけくれの程 地

山里 薫心

宮此比 句詞

なほわづらはしかれば 薫心

心をよせて 心だに深くは

なべてやは 大形の志しにては見せ奉らじとなり

年頃 薫心

人の御有様 中君のかほかたち心もとなかりしに

うちくくに 中を我にと大の思はるゝにと薫の

玄り給はで 句の

例のころらかなる 薫詞

物おもはせんこそ 句の末とげ給はず中に物思はせん

事心ぐるしとなり

よしみ給へ 句

かのこゝろどもには 薫詞

おはしますべき様など うちへ

きさいの宮 明石中宮

せちにおぼしたる 句

みとがめ奉るべき 地

殿の人は 宇治の

例の中納言 薫

けいめいし 敬命なり

ひめ君 大君

うつろふ方 中君へ

思ふかたことなめりしかば 大君なり

宮をば 句

辨めし出て 薫詞

こゝもとに 大君なり

ひたやごもり 一向

いままばし 中君へ

いづかたにも 辨心

おもひて参りぬ 此事を大へ告げよ

さなんと 大君へ

さればよ 大君心

一言聞えさすべきが 薫詞

また人きくばかり かく物へだて、聲高にいはんも

かくても 大君詞

今はと 大君心

ひきよせて 薫の

いとうたても 大君心

こと人と 大君詞 中君も同じ事なりと

姫君は 大君

おかしうも 薫心

かたらはれ奉りぬらん 句に

今すこし 大君心

かく萬に 大君詞

今はいふがひなし 薰詞
 つみもひねらせ給へ 二所ともにとりはなつ様成い
 やんごとなき 宮に
 おしはかり 人々もかやうに隔有せば
 人の御心 句
 いはん方なく 大君心
 此のたまふ 詞
 をこめて作り出せる をかしく作り出せる
 心のほどをも 薰の
 おしはかり 句の
 さすがに 薰心
 心はづかしく 薰の本性
 あが君 薰詞
 かくまでかたくなしく 二所ともにとりはなつ様成い
 くちなきなり
 はひ入て 大君の
 いと哀れと 薰心
 かばかり 同詞
 いぎたなくて 句の
 心やましく 大君

こはづくり 薰の
 薫歌 初句 句をたすけて
 たるべせし 中句
 まどふべき 自らはならで
 結句 あけくれの道 まどふなり
 心から 大君心
 大君歌 初句
 かたに 二所
 思ひやれ 中句 二所
 いとあかぬ 薰心
 いとこよなうへだりて 薰詞 障子の事なり
 いとやはらかに 句の様
 くらき程に 句心
 道の程 句心
 みなわらひ給て 薰と句となり
 をろかならぬ 句詞
 たるべの 薰心
 おこがましさを 我身獨ねの事は
 宮は 句
 様々に 中心
 出し給はざりける 大のみな工なりと思て
 あね君 大

宏らざりしさま 大のかの事の
 御けしきみ奉れば 大の
 たのもし人 大
 御ふみも 大
 さらに 中
 かきなれ 大心
 大かたにつけて 前々
 うしろめたう 末とくべきやと
 ぐして給ふ 使に
 物宏くなん 句心
 宏るべきそひ 薰
 冷泉院に 薰詞
 例のことに 句心
 いかはせん 大心
 はいならざりし 薰も思ひしに
 はるかなる 句
 さうじみは 中心
 さかし人も 大心
 世はかりに 同詞
 御ことを 中君の

はかしく 大君心ひとつ
 あり給しと 薰を中へと
 はづかしきこと 句へ
 おぼしなぐさみなんに 句宮のことわりを
 宏らざりし 句の入給ふ事
 つみもぞえんと 婦なれば罪もえんと云
 いらへも 中心
 人わらはれに 句にもし見捨られ給ひなば
 さる心も 句心
 あはれとも 中心何とも思ひ給はぬとなり
 いひしらす 地
 なのめにやあらん 大かた成べし中の君はぢ給へるさ
 まをいふ
 あがめきこゆる人こそなけれ 中の身上
 かく山ふかき 夫でもかく山ふかきと詞を入れて心得べ
 し
 いひ出んかたなく 中の自卑下したまふ
 此君 中君
 もちゐなん 祝首の
 ことなに 大心

よべ參らんと 薰詞
 宮づかへのらうも 宇治への事三日の祝の宮仕にもと
 去るしなげなめる世に 自の外に成たれば
 さうやく 雑々の御用
 おいつきかき給ひて ちらしなどもせざるなり
 宮の御方に 女三の宮の所在の分なり
 たなるきぬあや 染もぬりもせぬ
 御れうと 大君中君の
 かくとばかりは 大の我よりけばなれ給へどかごとは
 かけいでばとなり
 こなたかなた 大心二方共に薰の見給ひし事
 なれし袖とは なれし袖とはいひがたしとなり
 心あわだたしく 大心
 なほくしき 歌のさま
 人は 薰
 其夜 三日の夜
 中宮 明石
 なほかく 中宮御詞
 物好ましく 好色事など
 いとくるしと 匂心

そなたの心よせと 匂心
 よく御けしきを 薰心
 日比へて 薰心
 かく参り給へる 日比へて参内ありて
 いとさにくくぞ 匂心
 世にとがめあるばかりの心は さしたる好色の事も覺
 えすとなり
 いとほしう 薰心
 おなじ御さわがれに 宇治へ参らずはあなたになげく
 らし参らば中宮の尋給ふべければ
 こよひの 御出有がたきは理りなれば御身にかはり申
 さんと
 いたづらになし 薰のたまふ
 いとものきこえや 御馬にては猶かるくしきやと
 御馬 匂
 御ともに 薰詞
 此君 薰
 中宮 明石の
 参り給へれば 薰
 あさましく 明石中宮詞

あまた宮たち 薰心
 大宮は 明石中宮
 女一宮も 薰の心がけ給へる宮
 かやうなる かやうにちかやかなる物からとをきへだ
 ての有事にことすいたる人はあるまじき事もあらん
 となり
 心に叶ぬ折の すき人なれば心に任せんとなり
 ひがくしき 薰の好色の心なきを自そへるなり
 見え玄たふ 薰にけさうを
 大かたはづかしげ 中宮の御家風
 かしこには 宇治
 御ふみのあるを 匂の
 されば 大心
 さうじみも 中心
 思ひ玄り 地
 けしうは 匂心
 大姫君の うけひき給はぬ事ども
 姫君 大君
 宮は 匂心
 大宮 明石中宮

思ながら 匂詞
 たえまあるべく 中心
 わが御有様から 匂にかかけあはぬみのうへと
 つまどおしあけ 匂
 きりわたれる 匂心
 女君の 中君
 いつきすゑたらん姫君も 女一の宮
 我かたさまの 后腹の
 なつかしからず あらまほしくて
 いとづかしと 中心
 男の 匂の
 中納言の 薰の
 おもふ方ことにも 薰は大君への心あれば
 よそに思聞えし 匂の事
 一くだり 好色風流のなれば
 ひさしう かへりて
 かぎりなくおぼされけり 匂
 地 わかき人の 匂の御様中君などの御心玄まんとなり
 ざれたる御心哉 中君の匂宮に玄み入さま地よりいふ
 中納言殿は 薰なり 女房だちめしかふこら

いとことに 皇子なれば
 みちすがら 句心
 おろかにはあらぬにや 大君心
 みじと思ひしものを 中をもむざとあはせじと
 姫君は 大
 中納言 薰心
 宮 句
 いといたく 句の
 宮いとや 句心
 おしはかりて 薰心
 いたうれしと 句心
 むすめども 女房どもの
 めづらかなる 句薰御勢の人なればいきほひ有に人の
 悦心なり
 姫君も 大君心
 人のそひたまへる 薰
 人はかく 句
 宮を 句
 この君は 薰
 いとからしと 薰心

やうく 大君心
 人の御うへにても 中に句のたえぐにても
 心づかひ深くし給へり 薰の
 宮の 句
 けしきをみありく 薰詞 句のいかいと窺と
 例より 大心
 猶かく 大詞
 人にく 薰心
 おぼさるやう 大の
 かるくしくこと様に 大の句などには
 たいいと 薰詞
 わが面影 やせおとろひて
 あやしう 薰心
 いかなるべき 中空になりはてんと
 宮は 句心
 旅ねなるらんとも かりね
 中納言の 句詞
 女君 中君
 げに心盡しに 地
 京にも 句の

左のおほいどの 夕霧
 さばかり 句心
 六の君 夕霧娘
 なまうらめしく 夕の
 うちわたりにも 帝
 いや／＼おぼえなくて 句心
 いたしすゑ給はんも 中宮の世の覺なくて句宮の北の
 方にする給はんも憚おほきとなり
 人のきは 平人ならば
 宮づかへの 中宮へ中君を
 さやうのなみくには 中君は
 おはしまさば 句の東宮に立給は
 たかきさま 御息所中宮にも
 中納言 薰
 かたみに 宮と中と
 中宮 明石
 ころもがへ 十月一日なり
 かべしろなど 至徳記に壁に夏は生絹冬は練絹を一襲
 たて間ごとにかへるなり
 あしくも 薰心

そのかし 句を
 かしこには 宇治
 ろなう中やどり 勿論句の御出を薰の告給ふ詞なり
 みすかけかへ 宇治にては
 よしあるくだ物 薰の
 かつはゆかしげなけれど 大君心 句宮の事はゆかし
 げなけれど是もさるべき契りにやと
 さうじみの 句を云
 ふみつくらせ 句
 をちかた人の 中君
 時につけたる題出して 御供の衆
 人のまよひ 立さわぐ人を
 地はしたなくなりぬ 中君への御出はなりがたく
 心あはたしくて 御供の衆
 かしこには 中君
 人めしげく 中心
 よそにてへだてたる月日は 地
 宮はまして 句心
 あじろのひをも心よせ奉りて 氷魚よるのえんの詞

みづからの 匂心
 ふる宮の 八宮
 かうまのびくくに 地
 宰相中將 夕の子貌
 あるじ方と 薫を
 衛門督 夕の一男
 八宮
 みこのわかくおはしける世のことなど 地
 つくりける文どもの 地
 かしこには 姫君達心
 姫君は 大君心
 月草の うつろひやすきなり
 なほくしきなりに むかしきなり
 故宮 八宮
 こゝにも 人々
 さうじみは 中心
 思ひいられ 心いられ
 うち過給ひぬるを 此度
 忍びがたき 中君まのびがたき御氣色を大君の心におもふなり
 人めきたるすまひをおきて あまりうちすぎたるこゝ

ろおきてにや
 ながらへば 薫にうちとげてかやうならんと
 人の心をみると 是も眞實にはあらじとなり
 こしらへやるかぎりこそあれ 辨などが薫へ
 ある人の 内の女どもなり
 のたまひ置しは 八宮の
 人々にも 父母
 やうのものと 姉妹一やうに
 なき御かげ 父母
 此君を 中君
 かぎりなき人に 匂心
 宮はたちかへり 匂心
 うちにかゝる 右衛門督詞
 あいなく物をおもひありき給ふ 御中だちのことやう
 なるはさるものにてみづからの大君のうけひき給はぬにかゝつらひ給をやすすらをにあらすめり
 わがあまり 世上にたがへる愚按をしつると
 みこの 八宮
 いづれも 妹をも姉をも
 覺す人あらば こちのこと

すぢことに 東宮にもと
 かるび 輕
 大宮 明石
 女一宮の 匂の
 かぎりもなく 匂心
 あてに 女一のさま
 冷泉院のひめぎみ こきでん女御の御腹
 山里人 中君
 よそへらるゝ 我身のうへに
 すこし聞え給て 此名を少々申うけてと
 かしこへ こちへ
 ざいこが物語 かくやうのいせ物語りのあだしぶみ有しにや
 きんをしへ 琴
 いにしへの人 匂詞
 いかなるゑに 女一宮心
 おしまきよせて 匂の
 うつふして 女一
 かたそばゝかり かたはづればかりの事
 すこしも せめて別はらばものせんと思ふとなり

おまへなりつる人 女一の女房だち
 この宮 匂
 ことしもこそ 女一宮
 ことわりにて 匂心
 ざれていくゝ この歌を好色事にとりなしたり
 さぶらふ人をも 女房だち
 はしたなげなり みにくしと思して一人えらびしてあればみなよひみやすき人々多とみしなり
 かのわたり 宇治
 物から ながらの略
 待聞え給ふ所は 宇治
 中納言おはしたり 薫うちへ
 なやましげ 大君の
 ことつけて かこつけて
 おどろきながら 薫詞
 うちとけて 大君
 いれ奉り 薫を
 いとかたはらいたき 大君心
 けにくゝ 異惡
 みやの御心 薫詞

きこし給ざめり 妹の君は何とも不思議なり
 こゝには 大詞
 なき人の 八宮
 いと心ぐるし 薰心
 世中は 薰詞
 ひとつさまにて 不定にて
 人の御うへをさへ 句の御おこたりをとりもちて云
 よるく 大君
 まして 薰詞
 いとみぐるしう 大心
 ことさらにも わざとも死なまほしき身を
 思ひ給へる 薰の
 すこしよろしく 薰詞
 日比ふれば 大君詞
 いと哀れに 薰心
 くるしうて 大君詞
 かぎりなう 薰心
 かゝる御すまひは 辨などにのたまふ詞なり
 ところさり給に ものけなどは所さくすることのよけ
 ればそれにかこつけて

此君の 薰
 かの匂宮の 薰の供詞
 わが殿こそ 薰
 間にも 大君の
 いとゞ 大心
 おぼしけんを ものをの心
 おもはん所を 句は薰のおもてみてこそこれまで契り
 けんと
 姫君物思ふ時 中君
 かひなを 中君の
 つみふかんなるそこ ならくのそこ
 よもまづみ給はじ 八の御おこなひ果給へれば
 夕暮の空の 地
 ひるねの君 中君
 物思ふべきさま あまりかたちのめでたければ
 こ宮の 八宮 中君詞
 いとゞしく 大君心
 うせ給ひて 大詞
 此頃 大君心
 をりは少し 時雨などの折歎

是より名残なき 句よりましたるあだ人の
 香のけぶりぞ 返魂香
 此人の 句
 心つかふ人はあらじ わくらはにもよのあだ人は思か
 けじとなり
 おくらさんと 中詞 人の中をあとにのこさんと
 かぎりあれば 大詞
 かた時もとまらじと ちゝみやの世をさりたまひし時
 だに
 なげかしきも あとのさま
 かく袖ひづる 地
 みゝなれにたるを 大心 いつも偽のみ
 なほあらじ事と 句のたゝあらんよりはと御心にま
 ねどわざとし給ふ事と
 世に有がたく 句の好色
 程ふるに 中心
 御返今夜 御使歸らんと云なり
 かくいふは 地
 月もへだゝりぬるよと 句心
 宮は 句

あさましう うちには
 はかなく人を よそくの好色のことに
 まばしさおもふ 句詞
 まことにつらきめは 中君へ
 まじ給はねば 中君の
 月日にそへて 宇治の姫君達心
 みし程よりは 薰心句を見おとす程よりはなり
 御心哉 句の
 おほやけ私 五節の前後
 まうで給 宇治
 おい人 辨
 そこはかと 辨詞
 この宮 句
 などかかくとも 薰詞
 御枕がみ 大君の
 御聲も 大の
 かくおもく 薰詞
 くるしよ かをるの近きを
 御なかを 大君と薰の
 法華經 不輕品云我深敬汝等不敢輕怪所以者何汝等皆

行菩薩道當得作佛釋尊因位に當不輕菩薩時に此二十四字の偈を唱て四衆を禮拜し給へ

几帳を 薫
心ほそくて 大の
などか 薫詞
心ちには 大詞
給はざりつれば 薫の
かくまたれ 薫詞
さくりもよと さくりあげせきあげなり
御くし 大君の
なにのつみなる たゝりつみにや
うるさうも 大君心
むなしう見なして 薫心
日比み奉り 中へ薫の詞なり
おぼされつらん 中の
うしろめたけれど 中心
ひたおもて 薫の用意也
いとくるしう 大心
こよなうのどやかに 薫のことをおぼす
かたつかたの人 匂

むなしくなりなん後の 大君の死なれし跡にても薫の
あさき心と人にいはれじと
こゝろごはく 薫のおもはくはかひなきと見し様には
あらじと
夜もすがら 薫
いみじう 薫心
露ばかり 大
くうづきて 切のいりたるなり
いかゞ今夜 あざり詞
故宮 八宮
はなまばく あざりのさま
たへたるに 堪なり あざりのきはにまたひて
つかせ侍る 額つくにて禮拜なり
君も 薫
常不輕 道心しや 法華經不輕品の文既に上にいづ
かの世に 大君心
かのさだまり 八宮の中有にます時参りて
嵐にわびて 風をさむがりて
中門の 宇治の宮の中門
まらうど 薫

あざやかに 薫
ゐなほり給ひて 中への會釋の心
不輕の聲 薫詞
こと葉の様に 歌ともなくなり
つれなき人 中君心 匂なり
かやうの 薫心
宮の 八宮
みづからも 地 大君の事
なほかゝる 大君心
この君 薫
残なく 夫婦のやうに
この思ふ事 出家の事
心ちの 大詞
たのもし人 薫にも あざりなり
くちをしう 大君心
聞つきつゝ 聞傳へ
ふりはへ わざと
とよのあかりは 薫心
いとかうしも 京の雪
ことごと 大君と薫と

ひかりも 雪天
おはする 薫
例のちかき 薫
いとちかうよりて 薫
いかゞおぼさるゝ 薫詞
もの覺えず 大
よろしき隙 同詞
いよゝ 薫心
すこしうきさま 大君の貌容に難有所を見せ給はゞ
こゝらひさしく 大君の
たましひは 薫の
つひに 薫詞
たゞいと 中のことをかをるの
とまり給はん 中の事
かほかくし 大君
かくばかなかりける物を 大君詞
ほのめかし これよりさきなん聞ゆれどうけひき給
はぬとなり
とまりぬべく 大の念
かくいみじく 薫詞

いとくるしげに 大の
 我も佛を 薫
 世中を 薫心
 消はて給 大君廿六歳なり
 あるにも 中の
 中納言 薫
 たいありしなごらの 薫心
 まことに 佛の
 おそろしげに 大の死骸に
 おいみにこもれる人 薫のまします故に人多きなり
 中の君は 中のことゆゑに大のうせ給へば
 又なき人に まじる人のありさまに
 宮より 匂
 思はずに 大の思はずになり 中心
 うき人 匂
 中納言かく 薫
 三條の宮 女三
 此君 中君
 かうもの思はせ 中君に
 七日くの 薫

かはらぬを 妻にてなければ
 ゆるしいろの氷り解ぬると 紅の緒のうちたるがきし
 の氷の様に見ゆるなり
 かたぐ 大中共に
 この御かたには 中
 昔の御かたみ 薫詞
 よるづのこと 中心
 この君 薫心 中君なり
 京の家 薫心
 なかばなる偶 諸行無常の事なり阿含經に書此鬼は帝
 人天にて四句の三句を唱て釋尊の雪山童子の時其口
 へとびこみ給へば口より紅蓮花を出して童子をのせ
 たりといへり
 心ぎたなき 地 ながめにてうく思へば
 人々 薫
 御こゝろの 老人詞 大君の事を云なり
 此宮の 匂
 御かたには 中君
 あいなう人の 中君
 わがこゝろ 薫心

宮 匂
 さなりと 薫心
 中納言 薫
 いみは 四十九日
 心許なく 匂
 對面し給ふべき 中心
 おほしなげさ 大の
 誰もく 女房達さまく申て物ごしに中君對面し給
 ふなるべし
 物ごしにて 匂
 つくくと 中君
 これも 中君のさま
 宮も 匂
 御身をすて、 ゆりに求給はんとを
 今すこし 中詞
 中納言 薫
 御有さま 詞
 にくからぬさま うらみいふべきすぢもにくからぬさ
 まにすくめなせとなり
 いやく 中心

此君の 薫
 聞えし 匂心
 わすれ給ける たとへもあらんと契
 人やりならず 中君
 例の 匂
 いかでかく 中君心偽なるべしと
 中々いふせう 匂心
 なにごとも 匂心 大君のかくなり給ふにつけても
 こゝちも 中君
 人のみるらん 匂心
 中納言 薫
 御らんす 匂の
 心ぐるしと 匂の
 ありさま 薫心 匂にこそ中すめ
 宮に 匂
 ねをのみ 匂心
 かほがはり 薫の
 おほしたるも もし中の心あるやと
 かくつれなき物から 中
 うちわたりにも 内裡

言の葉を 句の
つれなきは 中心
年のくれ方 薫心 うちのさま
宮より 句
かくてのみや 薫心
こゝかしこ 女三冷泉
かへり給はん 薫の
こゝちも うちの人々
かくおはしならひて 薫の也 宇治の人々心
いみじかりし折の 大のうせ給へる折なり
御心ばへを うちの人々思由なり
み奉りさしつることゝ これよりはこじなど
わたい奉る 京へ
たばかり 思ひ出し
ささいの宮 明石中宮心
中納言 薫
思ひがたうこそは 形などもよろしからんと
女一宮 句心
御方にことよせて みやづかへなどの様にやと
の給ふ成けり うちへ

さなゝりと 玄かあらんと
中納言 薫
かの御かはり 中君をだに
みやの 句
おほしよるめりしすぢをば 薫を疑行て

源氏物語新釋

早 蕨

卷の名はわらびつくくしをかき籠に入てとてあざり「君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬ初わらびなり中君のこたへ「此春はたれにか見せんなき人のかたみにつめるみねのさわらびてふにていへりさてこはあげまきの卷の次のとしの春にて薫は廿四のとしなりやぶしわかねば 古今「日の光やぶしわかねばいその上ふりにし里も花は咲きけり此意を宇治山里にとりて書り且やぶは彌生の間にて草木にても竹にても彌が上に生えけりたる所をいひて即里方のさまなりいかでかくながらへ 中君の大君におくれおはする心の程なり
同じ心に 大君と
もとすゑをとりて こは何の事にもいへど此語は専ら歌の本いへば末をつきいふを以ていへり歌の上の句を本といひ下の句を末といふなり
みやのおはしませす 八宮

やゝ打まさりて 今中君一人になりぬればなり其上
女兄弟は殊にむつまじきものなればなり
かぎりあるわざなりければ 人の命は限り有る物にて
死なんとするもまなれずとなり
あさまし をぞましと云に同じ
としあらたまり 文の語
供養して侍るはつほなりとて 童の初穂とて佛に供養
たるを奉るとなりはつほは祝詞式に初穂と書て新稻のぬきほを神に奉るをいふそれより轉して何物の出来しをも神佛或は君などに奉るをばはつほといへり
三代實録に新錢にも早蕨二十文とあり
てはいとあしうて 此あざりのは
わざとがましく引はなちてぞかきたる むかしは文の
うちにある歌をば文に引つゞけて書しを是は法師の
こちゝしさに文と引はなちて歌をば平書などの體
に書しなるべし土佐日記の貫之か自筆には關字して
歌は書しとぞ定家卿はまゐるされたり然れば今の世に
もそのさまに書べき事なり
常をわすれぬ こはあまたの春ことにまゐらせなれた
れば春の常の例なりしを君まさでも其春の常をわす

れず生出る厭そ是なりといふなりさて古宮を猶たたふ心はおのづからこもり此常をわすれずとは古今に「花のごと世の常ならば過してしむかしは又もかへり来なまし又繪をよめるに「櫻花春の常にやなりぬらん咲初しより色のかはらぬなどいふをとりかへてよめるなるべし

御せんに 中君の

大事と思ひまはして 此あざり歌などは常によまねば

大事としてひねり出たるならんとなり

おぼせば 中君の

なほざりに 匂宮の御文歌などをいふ

かきつくし給へる人の 匂宮をさして

こよなくめとまりて 此あざりのは

かゝせ給ふ 人におほせて

此春は 此春は古宮のかたみのわらびを専らと見るべ

き大君もおはさねばたれにか見せんとよみ給へりこ

は古今に「君ならでたれにか見せんでふを思ひたる

語なりさて籠に形見をそへたり貫之集に「行てみぬ

人も忍べと春のゝにかたみにつめる若なりけり

匂ひおほく 中君

むかし人にも 大君のやせがたち成し事前にいへりかよひ来る便りに 薫の方の人こゝの女房へ通ふこと

前に見ゆその便りにかなたにもこなたにも事の有様

聞かはし給ふなり

思ほれ行て 細薫の大君の事を

いやめになん 泪もろきを云歟

きゝ給て 中君の

げにうちつけの 薫の大君をおぼす心は

宮は 匂

京にわたし 中君を

ないえん 内宴は春の間に有ことにて王臣参りて文を

作る御宴なりことしは正月にとく有し意にかけり

心にあまる事をも 大君の事なり

れいの御心よせなるうめのかを 匂宮は梅蘭などをこ

とにめで給ふ事前に見ゆ

匂ひのいとえんに 梅が香と薫の人香とをかねいふ

をりをかしく 宮の心

をる人の 梅のまだ下枝などのみ咲てにはひを内にこ

めがちにて有を薫のひそかに中君を領じぬらんに似

かよひたる花をるべしとのたまふなり

やみはあやなき 御二人の香はかくれぬをいはで思は

せたり

かたみに 共に御物語りの残り

えはるけやり給はで まだいひはらし給はぬ程なり

よにためし 薫と大君枕まき給ふ事はなくてめをのこ

とくむつび給ふ事を今日ぞ宮に語り給ふをささはのた

まふとも猶さてのみはあらしをかくしのこし給ふら

んと猶とひ給ふぞ例のわりなき宮の御心となり

さりながらものに心得給て さもわりなく問などし

たまふ心ながら且心やりも有て薫の心を且はいひな

ぐさめ且は哀れと思ふ心をいひあさめて思ひ明らむ

べき様にとりなし給ふなり

哀をもさまし 惣て思ひ入たる事をも人にいひさまさ

れて明らむる事も有なり或説はわろし

をかしきに こは面白くよろしきなり

げに心に 是も上にたれにかと有をうく

中君

いとうれしき事にも 薫

みづからのあやまち 中君にうとき様に成しかば媒せ

しわがあやまちに思ひなざるゝに今むかへんと侍る

かよふ 似なり

みる人に 薫のみづからを云 古今に「梅の花立よる

ばかり有しより人のとがむる香にぞしみけるてふを

本にて中君の方へしたしき我にかこつけごとをいひ

よせ給へばさる心もなき物故に心してをるべき事な

りと也且かごととはかけつけごと也折に居をそへたり

すぎにし方の 大君の事

そのかみより 大君を思ひはじめより死給ふ後まで

まして 匂宮の

人の御うへにてさへ 古今に「我身からうき世の中と

なげきつゝ人の爲さへかなしかるらんでふをいひか

へたり

かひくしくぞ かをるのなげき給ふにかひ有さまに

匂のあへしらひ給ふなり此かひといふは易有と云に

同じ常にかひくしくといふとはことなり

あひまらひ あへと有べきを後にあひと書誤か

げにぞ哀まらばほに 匂宮の薫の哀を知り給ふなり上

かの人 中君

あるを宮のかくかひくしく物し給ふなれば空のけ

しきも又げにぞ云々とはいへり

はうれしとなり
 あかぬむかしの 大君をいふ
 又たつぬべき 中君の外には
 聞ゆべき人となん 薫のみづからを云
 もしびんなくや 細宮のうたがひ給はんやとなり
 かのこと人とな 大君ののたまひし事前々にあり
 すこしはかたり 宮に
 いはせのもりの 或説に引る歌は物にも見えす例の事
 と見えて歌も穩かならぬなりこは萬葉八「に神なび
 のいはせのもりの呼子鳥いたくな鳴そわが戀まさる
 てふ歌にて中君を大君の我にゆるせし事をいたく
 わしく宮に語らんには我戀の増りて色に出べければ
 いひのこしたるとなりさてそのよしは次のことばに
 てもまらる又一本にいはたの森と有といへりさらば
 六帖に「聞からもゆる思は山城の石川の森になく
 呼子鳥と有歌にて書しか猶いはせの方によるべし
 げにさて 大君のおもむけの如くわが物にしてこそは
 かく渡して萬をとりあつかふべかりし物となり
 たが爲も 中君の爲も我爲もなり
 さても 思ひはなれてもなり

おはしまさんにつけても 京へ中君の
 此ふしみを 細説古今に「いざこゝに我世はへなんすが
 原やふしみの里のあれまくもをし此意を宇治にとり
 よせて書たり前に同じ宇治をふるの山里ともとりな
 したる類なり
 たけかるまじく たけくよき事もあらじとなり
 淺ましく 是より句宮の文なり此一句一本になきはわ
 ろしこゝの文を心得誤りし人の私に去たるならん
 淺からぬ 宮との契なりこはおぞましく遠き所は我所
 せければおふなく深く思ふ中も絶やしなまし然れ
 ば思ひ定めてわたり給へとなり
 思みだれ給へり 中君さまぐくに
 たつを見すてん 古今「春霞立を見捨て行鷹は花なき
 里にすみやならへるてふにてこゝの文はなせりさて
 も鷹はおのが故郷へ行を我はこゝの花のや、咲んほ
 どを捨てわが故郷ならぬ都へ行て旅ねのごとくてあ
 らんはとなり
 いかにはしたなく 都に出て後句宮の御心うとくなり
 なば
 御ぶくもかざりあることなれば 細大君は十一月身ま

かり給へば二月の初に九十日の服をぬぎ給ふなり
 みそぎ淺き 服をぬぎて身滌するにも大君の爲には
 御母の服の如く一周をもし色もこく染まくおぼせど
 定めなる事なればかく程なく解除して立出んをあか
 すおぼせばかくは有なり淺きは薄染染より出たる語
 なり大君の爲には御母云々とありこは中の君の書た
 がへにや
 御車御せんの人々 除服の祓に河へ出給ふ料
 はかせなど 細解除は除陽博士のわざなり故に是をも
 參らせらる或説こゝを劍の事といへるは誤れり
 はかなしや おもては月日はなくなつて霞たち花
 も咲といひさて御服衣をたちしもいつの間にか過て
 花のたもとになりぬるよと添へたり猶花のひもとく
 には句宮に逢給はん事をも下にそへたるなり
 げにいろく 細説花のひもとくと有をうけたり
 御わたりのほどの 御渡も除服してほどなきなり
 御心よせ 薫の
 人々はきこえまらず 中君へ世人の上を引て申まらせ
 參らするなり
 あぎやかならぬ 老人はかたちも心もふるびくして解

かならぬなり
 かゝる方 かをるの御心ざしの方
 みたてまつり 薫を
 今はとことごまに 中君の宮の御方につきて薫とは
 身づからは 薫
 今はやうく 大君のおはさば今ほどはなれ近づきて
 我こそ先大君を京へかやうに渡さんと思ひしかとな
 り
 ありしさま 大君のさま
 我心もて 餘りに穩し過たりしなり
 むねいたく 今更
 よりてみまへど 外さまになりたるさまなり
 思ひ出聞え 薫の外におはすにつけてむかしを思ひ出
 るなり
 あすのわたりも 京へ
 月頃の 薫のいひ入給ふ
 あらぬ世の 大君のなくてより同じ世とおもはぬを
 又今かく外様にしてはしたなめ給へばいとゞことの
 外に物かはりたる心ちすとなり
 はしたなしと 中君の人々へのたまふなるべし薫への

こたへとは聞えずこは人々の薫のうらみ給ふを理りよに侍らんかぎりは 薫
ぞなどいへば君人々へかく語り給ふなり下にたいめ 人の心さまぐに 匂のもし疑ひていみやし給はんと
んし給ふことあれば別に御こたへはなかるべし なり

いさや心ちも 不知いさいかなれば心地のかく例ならぬ云 宿中君をばかれじ 古歌かんがふべしかの人またん宿をば
となり

いと はかしくしからぬ 薫にたいめんせば かれずてふ歌にはあらずこは古宮の仰もあり行末
いと はづかしげに 薫のさま のおぼつかなさと思ふにも此住なれし宇治をばはな
おもかけさらぬ人の 大君の事 大君のおへしらひ給 じと思ふを宮よりちかく京へうつろへとのたまふに
ひし事を思ひ出て薫をもゆかしく見給ふなり つけてよろづ思ひみたる心なれば薫の今仰らるゝ事
つきせぬ 薫のたまふ の御いらへもいふよしまでひて侍るといひけつなり

御物がたり 大君のむかしの事 こたへと見ては宿をばかれじの語も思ひ亂れ侍ると
わたらせ給べき 京へ 有るも聞え侍らぬなり

所ちかく 中君の渡り給はん二條宮は薫の移り給はん いとようおぼえ給へるを 大君に似通しなり
三條に近ければ夜中曉にも御もとに疎くおぼさずば 心から 薫の
聞え奉らんとなり よその 此君を

うつろひ侍るべければ 三條へ かひなければ 今更いひ出てもかひなき事なれば大君
夜中あかつきとつぎくしき人の こは次々しきにて の中君を薫に心むけ給ひし事をば御心に思へどもい
やんごとなからぬ人のいふことばなりと諸説にはい ひ出給はぬなり

へり耳なれず聞ゆれど暫たがふべし 春やむかしの 古今に「月やあらぬ春やむかしの春な
うとからず 中君より らぬ我身一つはもとの身にしてこは思ふ人は外に隠

れてあるじなき宿をきたひ来てよめる歌なれば今薫 どもかしにことなるにやとおもはるゝと上にいへる
も中君も大君のなき宿なれば月花もむかしのにては 月やあらぬの歌をとりかへてよみ給ふ意なるべし又
あらぬやとたどらるゝをおのゝはもとの身にして かりにもわが袖ふれし中君はかはらずおはせど人の
在といふ意をかしくとりなしたり心まどはし給ふ 物とうつろひ給へば同じ君の如くもあらぬ様なりと
どちといへるにその心をこめたり ぞへたるにや猶考て定むべし

むかし思ひ出らるゝ 古今に「むかしの人の袖のかぞ ねごめ 後撰に「垣ごしに散來る花をみんよりはねご
する ことおほくも 言多 めに風の吹もこさなんとよみて根ながらと云に同じ
つまなり はしといふに同じ ことおほくも 言多

こゝろとめて 此梅を 御わたりに 京へ

心にあまり給へば 心に思ひ餘りていふともなくて此 さぶらふべければ 中君渡り給ひて後も
歌を口ずさみ給へるとなり中君のかたより打出んは ちかき御さう 薫の

さし過たる様なればことわりて出るなり なたちもかへてけるを 又此下の詞に依に髪をおろし
みる人も こはたゞ見めで給ひしむかし人もあらずい たるにはあらず切たるなり

づこともなくうせたる山里に花のみむかしの如しと 亥ひてめし出て 薫の
いふなるべし木を中君の物思ひまどふ意といふ説あ あはれとみ給ふ 柏木古宮大君の心よせなればいと
れど玄からばあらしにはよまじたゞ見る人もあら しきを老はてゝ残りゐるなどかたゝ思すべし

ずといひかけしものなり いとふにはへて 後撰「あやしくもいとふにはゆる心
なつかしげに 薫右の歌を 哉いかにしてかは思ひやむべきさて何にても失なは
袖ふれし こは大君の袖をふれし梅はもとの身にてあ んとする物のあやにくにさかゆるをいへり

り其人のかたちも何もうせはてゝなければ宿はあれ またいかにせよとて 大君の

おもひけることいも 記者の語より薫の心にいひうつ
せり

うれへかけきこゆるも 薫に

そぎすてたれば 髪を云

かゝるさまにも 前に大君のいんことを願給ひしを

それへのぶるやう 命

この人さへうらやまし 辨がいんこと受てかく命長き

にやと思ひうらやむなり

さきにたつ 契哉古今に「先だたぬくひのやち度悲き

は流るゝ水のかへりこぬなりてふを下に持て大君は

行く水の如く過て歸らぬをかくながらへてくひのや

千たびかなしまんよりは先にたつ泪の川に身をなげ

まし物をといふなり

それもいとつみふかくなる 身をなげばといへるをい

さめてさまで執深きはつみ也たとひ水に入につけて

思ひ明らめんよしはなどかあらん然れば佛果を得て

彼岸にいたる事は有まじき物にてならくに沈み過さ

んことなりたゝなべて萬づを空しき物と思ひ明らめ

てよとなり 此れも右のことわりをいひて且忘ん世は

死ともあらじとなりさてむなく思ひとるべき世と

は忘れど猶此執ははなれん世なかるべく我もと思ふ

尼を且はいさむれど我も同じく明めがたしとなり

はてなき心地 此世の後までを思ひやり給ふ成べし

かたりて 中君へ

いよ／＼やつして 辨は

袖のうらに 物ぬふといふよりいひかく金葉に忘ほゆ

あみに西の海の方へまかりたりけるにみるといふ物

をみづからつみて都なる娘のもとへつかはすとて母

の歌あり扱むすめかへし「長るするあまのしわざと

みるからに袖の浦にもみつ泪哉とよめればかの袖の

湊といふより袖の浦ともいひて筑前の名所とする成

べし此事はいせ物がたり古本によれば共に誤なれど

こゝには用なければいはず或説に出羽にありといふ

はよしなし右の歌も新古今とて引たるは誤りなり

ひとりも 藻をそへたり

中君 尼に海士をよせて古へを戀ひてしほたれ我

はうきたる事故になげきて袖ぬらすにてなげきの筋

ことなりとなり「心からうきたる船にのりそめてひ

と目も波にぬれぬ日ぞなき

すみつかんことも 匂宮の方に

さまにしたがひて 宇治へ又も立かへるべしとなり

さらばたいめんも かへりなば

かゝるかたちなる人も 尼を云

よのつねに 世間の尼のたぐひになり

時々もみえ給へ 京へも出てまみえ給へとなり

むかしの人 大君

かく人より 辨の

とりわきたる契もや 大君と辨

むつましく 中君にも

いよ／＼ 辨のさまなり

わらはへの 萬葉にこひやわびてんたわらはのごと

皆かきはらひ 或云立出給ふ時ちりなど拂ふなりとい

へれどこは人も調度も皆残らぬをちりを拂にたとへ

ていふ成べし地を拂てなどいふがごとし

御身つからも 匂宮

心もとなくおぼさる 待給ふほどの様なり

いづちならんと 道をも京をも見給はねば

いとほかなく 行方も去らす出給へば

有ふれば 末は大君に別れし時は身もなけてんと思ふ

ばかりなりしをいへり或説はわろしさて或説に歌二

首引たれど此頃中君に近き時のなれば引ずも有なん

辨のあまの 中君のおぼすは

こよなうも有哉 違ひて有となり

心つきなく 大輔を

けふはたまづも 將先なり

みなかの御方をば 大君

心々の世やと 中君は

つらきにのみ 匂宮のたえ間を

七日の月の 二月なり

いととほきに 道のほどなり 上に日くれぬべしとい

へりしにげに道の空に月の出たるを見て遠き道なる

を知給ふなり

ならばずくるしければ はじめてかゝる道も行き給ふ

をいふ

ながむれば 土佐日記に「都にて山のはに見し月なれ

ど海より出でて海にこそいれてふ心有べしさて月の

山より出ても世にはすみわびて又山に入か如く我も

かく出るがいか大輔にうき事有て又宇治山にかへり入時

も有べきやとおほつかなさを前にも辨に宣ひ爰にさ

まかはりて終にいかならんと有るも其意なり或説々 玄なてるや

さまかはりて 匂の心かはりてなり
年頃なに事 宇治に在し程うしと思ひしは物の數なら
すとなり

みもしらぬさまに 二條宮の様
みつばよつば 古今序「此殿はむべもとみけり云々
宮いつしかと 待給ふ程のさまなり
いかばかりの事にかと 宇治へ通ひ給ふ程はいかほど
の人ならんさすがに山里人なればなど人はおもひお
としつるをかくよびす給ふを聞に中君の様を心に
く、おもひあなどられぬよしなり
おぼろげならず 宮の
こゝろにく、 中君を
このるん 二條
夜ふくるまで 七日の夜なり
おはしけるに 三條に
御心にいりて 宮の
き、給ふ 薫の
物にもがなやと とりかへす

まは 舟の帆を人の正面にいひかけたり且實事はあら
でも一夜は共ねせし人なりといへり
いひくださまほしき ねたさにかくおぼすなり

この紀に玄なてるや片岡山萬に玄なて
る片足羽川とつゞけしは階立る片とつゞきて山坂な
どのな、めなる意なりては立る意なる事冠辭考に
おしてゐるにはの條に委しくいへり又萬に玄なてる
つくまさぬかた云々とつゞけし一首あれども是も筑摩
の地の階坂にやよりけん其外古歌は見えず今にほの
水海とつゞけし事甚覺束なし或説に「玄なてるやに
ほの水海にこぐ舟のまほにも妹に逢みてし哉てふ歌
萬に有といへど萬葉にさる歌はなし六帖などにもな
し若雜書などに例の萬葉といつはりてことの證など
に書しを皆萬葉にはよく玄らぬ人だちなれば又引に
て誤れるにやともあれ玄なてるやにほとつゞくべき
事もなきを此作者の少し前より古學は絶て偽言附會
のみ多きを此人も萬葉はよく玄らねばあやかりし成
べし契沖が説も皆此事はあやまれり古事紀の玄なた
ゆふさやなみ路てふ歌を引たれどこは玄なえたゆむ
篠とつゞきたるにてこゝの意にあらす

左のおほいどの 夕きり

此程よりさきにと 此方の思ひ定むる日比より先とな

はなれおはすれば 六條院をはなれて二條におはすな
り

いと物しげに 夕霧の
き、給ふも 宮の
御文は 六の君へ
御裳ぎのこと 六君
おなじゆかりに 薫は夕の兄弟にて智とせんもめづら
しからずともなり

さもや 薫をむこにもやとなり夕霧の宮の方を物しと
思ふ故なり

年頃入しれぬ 大君の事
けしきとらせ 薫の
ゆゝしく 忘々

おふなくこといつることを わが方より心をやりて
ねもごろにいひ出る事を此君さへすまぬ様にいふ
べき事かはとなり言出しはなど萬葉によみて智にと
此方よりこと葉を出すをいふ

人さまのいとほづかしげに 強も云々と句を隔てつ

みやり給ふに 薫の方より

ぬしなき宿のと 宇治
心やすくや 「淺茅原ぬしなき宿のさくら花心やすく
や風にちるらん惠慶法師

宮の御もとに 二條の宮へ薫の

こゝがちに 中君の方に専ら宮のおはすなり
すみなれ給 中君

みたてまつる物から 薫の
いかにぞやおぼゆる ねたみくやむなり

たいの御方へ 中君の方へ
にく、すみなして 中君の

あさゆふの 薫詞

世中かはりにたる 疎々しく成て

御まへの木すゑも 中君もへだて行さまをそへたるな
り

あはれなること 大君おはさばかくもあらじをとなり
げに 中君の心

とやかくやと 宮の

ゆきかへり 大君と
かたみに 右の哀なる事多くと有をうけたり
たへこもり 宇治にませしほどよりも今かく興有べき
すまひなどし給ふにつけては大君の薫と三條におは
さばいかばかり心ゆく事あらん物をとくちをしさの
増りぬるとなり

人々も 宇治より侍ふ人々
よのつねに 薫をば世の常の人の如くはもてなし給ふ
ことなかれと申なり
いましもこそ さきくより薫の深き御志をうけ給ふ
なればかく世に時めき給ふ今こそそのまゝ顯はして
見えさせ給ふべき事となり

御まかり申に 中君へ
御わたりには 大君中君へ宇治にて
わが爲は もしまされ出なばなり是より覺ゆれどまで
はわざとつゝしめとてのたまふ成べし
ひとかたならず 中君
かの人も思ひのたまふ 薫は大君のかたみと中君を思
ひ中君は又薫を同じかたみにおもへど宮のおぼす事
あればすなくてはとなり

源氏物語新釋

やどり木

此巻の名は「やどり木と思ひ出すは木のもとの旅ね
もいかにさびしからよしてふ歌によれり又一説に此
巻の名をかほとりとも云と云るは「かほ鳥の聲も聞
しにかよふやとまげみをわけてけふぞたづぬると有
歌をもてなりかほ鳥は萬をさるに即よふ鳥のやどり木の
事は下に其歌の所にいへり
薫のとは或説に廿三のとしより廿四五まで三とせ
の間の事を此巻に書けり然れば椎が本の末よりあげ
まき早蕨の巻のほどの事もこもりぬ其よし末にて見
ゆ此巻には専ら女二の宮の事をいはんとする故に
いとほやくの事より書きつたとへば玉かづらの巻
に玉かづらの四のとしの事より書きて光源氏の三十
五の歳にあたること有るがごとしといへるはまか
なり

その頃藤壺と聞ゆるは 或云椎が本の始の頭をさす成
べし或人云梅がえの巻に明石の姫君の參給はんを源
氏の御心づかひ有て左大臣殿の御女を先參らせ給ひ

し事ありこゝに人より先にといへる是なりさて始梅
がえにては麗景殿女御と有しを後に藤つぼに移給ひ
し成べし

故左大臣どの 或云行幸の巻より若菜の上まで在りし
人にて今上の左大臣なり一説に梅がえの左大臣とい
ふ説は誤りなりといへり
また東宮と 今上
其点るしと見ゆるふしもなくて 後に立給はぬを云
中宮には こゝは前の事なれど明石は今中宮なればか
くかけり
さやうの事もすくなくて 藤つぼには
女宮一所をぞ 女二
御かたちも 女二
女一宮を 明石中宮腹
うちくゝの御ありさまは 藤壺
をさくゝ いつこにても長々の意なり夫を轉して用ゆ
る所はあり

ちゝおとゝの 左大臣
十四になり給ふとし 女二
いにしへよりつたはりたりける寶物 左大臣殿より

女御夏頃物のけにわづらひ 或云椎木の夏にあたる

心ばへなさけくしく 藤壺のさまをいふなり

宮はまして 女二

きこしめして 今上

忍びて参らせ給へり 御母女御は里にてうせ給へば女二

二も御里にませしを四十九日過て忍びて内へまゐら

せ給ふなり御服の間なれば即忍びてなり

日々をいたらせ給つゝ 内へ参り給ひては今上

をちなどやうのはかたしき人もなし 藤壺の同じ御

はらからのなきなり有はことばらにて勢ひもなし

大藏卿 藤壺のことばらの兄弟二人なり

すりのかみ 大夫をいふ

世のおぼえ 今は源氏かたの時なれば藤壺方は官位も

すゝます覚えもわろかるべし

たのもし人にて 女二の

御心ひとつなるやうに 此程の天皇皆かくおはしませ

り

御まへのきくうつろひはてゝ盛なる比 よくうつろひ

極めて色の盛なるなりこの下のを濁るはあやまり

なりいせ物語に菊のうつろひ盛りなると有に同じ古

へは白きくよくうつろひて紅にみゆるをめでたる

事いと多し右のうつろひたるを盛なると心得るは後

人の心なり十月なれば實の盛はいかであらん此下に

も菊のまだよくうつろひはてゝわざとつくりひた

て給へるは中々おそきにかなる一もとにかあらん

いと見所有てうつろひたるをと有るを見よ

うつくしく 愛を萬葉によめり

などかはあらん なにとかてふ意にこゝはかけり一本

などかはあらざらんと有はこゝを心得かねて後に書

なほしたる成べし其心ならば此所をすてかくは書

じこは御うしろみのやうに逢せ奉らん人をおぼすに

女二の御さまを見知てもてはやす人のたとひ有もせ

よそれも末々の事何とかあらんと先おぼしめぐらし

給ふをいふなりさて女三の宮の様を始め終りおぼし

めぐらして終におもひ定め給ふよしを書つかけたる

なり

朱雀院の姫宮を 女三

六條院 源

いでやあかすも 女三を源の紫の如くはもてはやし給

はざりしをあかぬ事に院もおぼし世にもかくあらん

よりはたいにおはさん物なりといひし事の有しかど

となり

さらでもおはしなましと聞ゆる事ども有しかど 其時

はあかぬ様なりしが源へわたり給ひてこそ御子も生

給ひ御子あればこそかく末よろしけれとなり

源中納言 薫

かく萬をうしろみ 御母女三を

そのかみの御おぼえ 朱雀院の御かしつき給ひし時の

御覚え

やんごとなき 今に

さらすば 薫のなくはといふ説は急なりこゝは源へお

はさすばの意なり次の語にてさるる

御こゝろより外なることやも まからぬ人のまのび入

べきなり

ともかくも御らんする世にやさだめましと おはしま

さの後よからぬ事のあらんをおぼせば上の御命の内

にいか成御うしろみをも定めんとおぼす也ともかく

もは今は御うしろみせん人のもてなしはともかくも

にて是も女三のはじめあかぬ事有しが如くはもし有

ともこの意なり且上のなどはあらんと思ひめぐらし

給ひしをうけたるなり

やがて 女三の源へ渡り給ひし次に隨て其御子の薫へ

となり

既に大君に通ふといへども薫はほどくゝに

とりなしてまじへず女二をばことにもてはやして聞

にくききたある様にはすまじき人となり

つひにはさ様の事 思ふ人有とも終に本臺なくてはあ

らじよそよりさだまらぬ先きに此事をいろに出んと

おぼしてなり

花のいろも 菊なり

たゞいま殿上に 今上

中務のみこかんづけのみこ中納言源の朝臣

中務の親王は今上の皇子上野の親王は傳見えず中納

言云々は薫なり且かくうちくゝに問給ふなどに奏す

るには官姓かばねのみ申す事知べしきとしたる時に

は奥官姓名など申こと事につき所によりてさまぐ

なり

めしいづるもかひありて 同じめさるゝかをり有様も

よければかひ有て見ゆるなり

あそびなどすさまじき方にて 藤つほの御璽なれば此

御方にてはこと笛の御遊ばし給はぬなり

目を送る戯れ 白氏文集送春唯酒銷日不過非
よきのり物は 賭なり恭にはむかしよりかけものあり
かるくしくはえわたすまじきを 女二の事をほのめ
かし出給ふなり

三ばんに 上御心してわざとまけさせ給ふなるべし

先けふは 右にかるくしく云々と仰られし意にて先

けふは云々とのたまひて此後女二をゆるさんとふく

め給へりさて或説に朗詠の聞得園中花養艶請君許

折一枝春てふを引り

この花一枝 菊なり

御いらへ聞えさせて かしこけれど給はらんなどのい

らへなり

よのつねの 女二を得まくすれとかしこさにはいかれ

りとの意なるべし

霜にあへず かれにしそのとは母女御のうせ給へども

猶われとりはやしなんと末にふくめてうつろふ菊の

いろのことなるによせ給へり

人づてならで 直ちに仰を蒙るなり

れいの心のくせなれば 薫

いでやほいにもあらず 女二の事

さまぐに 大君の心むけし中君をいとはしけれど
よそに過し夕霧の六君の事聞えしもよそならぬ中な
れど強てのがれしをなり

今さらにひじりようの物の 聖僧めくものなり今本

どもにはひざり世のものとも有を用ゐたれど詞の様さ

は有べからずよりて一本を用ゆ

ことさらに 時の皇女なれば

左のおほいどの 或説に一本右に有につけてさまぐ

いへど左の誤なり

六の君 或説に六條の君と一本にあれど用ゐずといへ

れど爰に六の君といひてはつたなくして此物語の文

にあらず且六君とてはさりとともてふ語も聞えず六

條の君と有を用ゆべしこの意は六條の匂宮も心に

ままぬさまなれどそれは御文などはかよへどあだ人

なれば専らも思ひかけず此薫こそはよそならぬ人の

實人なれば強て恨などせば終にうけ引てんとなり

兵部卿の宮 匂

さるべきにて 宿縁にて

水もるまじく いせ物語「などでかくあふごかたみに

成にけん水もらさじと契りしものを「堤をばとよ
らのみやにつきそめて代々はへぬれど水はもらさ
す貞信公

なほくしきへはにくださんはた こへは上達部の中

にも勝れぬ人々を云なり

そしらはしげに みかどの薫にはのめかし給ふを

中宮をもまめやかに恨給ふ 匂の事を

きこしめしわづらひて 中宮のなり

おふなく思ひ心ざして 夕霧の

うへの御世もすゑに 御齡なり

たい人こそひとことさだまりぬれば こへは匂を東

宮にとおぼすなれば夫に對て臣下をたい人とのたま

ふなり

それだにかのおとこの たゞ人の夕霧だに

こなたかなた 雲井と落葉宮のかた

これは思ひおきて 春宮にとなり

わが御心にも 匂宮

うるはしげなる 紀に善の字をうるはしとよみて實に

全きさまをいふなり

かのあせち 紅梅大納言なり其御まゝむすめに整兵部

卿のひめ君母君につきて住給ふ有を匂宮文やり給ひ
しこと有しなりさて此大納言は既に竹川の巻にて右
大臣なりしをこへは彼大納言なりし時に有し事をい
へれば前に立かへりて右大臣とはかゝす

御おくはてぬれば 此度一周の服はてたるなり

何事かははかり給はん 夕霧の思ふ事など聞しめし

てもかくはばかり給ふべきならぬなり

さも聞えいでば 薫の方より

つげ聞ゆる人々もあるを 薫に

はしたなきやうはなどでかはあらん もてはなれて有

まじき事の様にはせさせ給はぬなり

其ほどに 御むことりの日時

つてにもきき 薫のつたへきくなり

みづから 薫

御けしきをも 御かどの

すぎ給にし人の 大君なり

うたて 物のこと様に有ときいふ語にてこのすべて

の語にかゝれり

契りふかく 忘られぬ宿縁を云

さすがに 玄かしながらにてふ語なり

くちをしき品なりとも いと品くだりたる女にてもと

なり浮舟の事をいふべき本なり

かの御ありさまに 大君のなり

かうのけぶり 反魂香なり前にも出

やんごとなき 女二

いそぎたちて 六君の事

やがてあとたえ 宇治にかへりてみやこにはそのまゝ

たえてかへらすとも都人にははづかしとも覺えずか

の故郷人のおもはんぐるしきなり

宮のたまひ置し事にたがひて 宇治の古宮

草のもとを 草ふかき山里をいふ桐壺巻に立はなれが

たき草のもととなりとかけり

故姫君 大君

つしやかなる所は おもくおちるたるを今人もいふ也

もし世におはせましかば 大君のながらへて

又かやうに 薫にもかゝる事の出来て

さはあらじと 薫の深く物し給へど末終にいかでかは

らぬ心はえあらじ物と深く思ひとりて尼にならんと

思したりしなり

かならずさるさまにてぞおはせまし もしながらへ給

ひてかゝる事にあひ給はゞ必尼に成給ひなんさらぬ

前よりだに尼とならんと覺したればなり然れば今お

もひやるにいかばかりおもりか成し大君の御心おき

てといふべきにかあらんとなり

なき御かげども、

古宮又大君の御靈

かひなきものから いひ恨てもかひなき物故となり

みえ奉らんと 匂に

きゝもいれぬさまに 六君の事をばなり

宮はつねよりも 六君の事のおればたいの君の心を

しはかりて

れいならぬさまに たいの君はらみ給へり

まださやうなる人のありさま 姫の有様を

さる人こそ はらめる人

などのたまふ もしさる事かと問給ふなり

いとほづかしうし給て 中君は

聞えいづる人もなければ 宮へまかなりと

其日など 六君の事十六日と下に見ゆ

ほかよりぞつたへ聞給ふ たいの君の聞給ふなり

女君はそれさへ 匂の隠し給ふを恨なり

まのびたることにもあらず 記者の語

さすがに人の心 大君の心よりゆるすを待べし強とは

本意ならずとはばかりてなり

すこし 大君に

人は心にも 大君は

さすがに 大君は我にあはん事をば心にきらひ給へど

もまかしながら一むきにさしはなれん様にもなしが

たくて我心の恨みをなぐさめよとて中君を大君の同

じ身ぞといひなしておもむけしがさし當りてわが心

のねたかりしまゝに先大君の中君へゆづりし心をた

がへて宮にあはせまらせて後はせんかたなくて我

に大君のおはん物と思ひはかりしなり

めゝしく 女々しきなり

ゐてありきたばかり 匂を宇治へ

思いづる 今は

かの人を 大君を

この君を 中君

おもひ 大君と中君

おもはずなることもなし 外には薫に恨なしとなり

たいかの思ひ 中君をおもはぬ筋にし給ふをいふ

あまがけりても なき魂の

かくいたり給ひにしのもち たいの君の

よるとまふことは 内に

こゝかしこの御よがれ 外の方へおはしてたいの君へ

参りなどし給ひつゝ 内へ

かねてより 「かねてよりつらさを人にならばさでに

はかに物をおもはする哉てふ事も有をかくかねてよ

りならはし給ふをもたつらくのみ君はおほすと古

歌によりたるものゝ古歌を打かへして書り上手の筆

なり或説も同じ

たいつらきかたにのみぞ たいの君は

いといとほしき たいの君の心を

女かたも 六君の方

月比もさもならひ行はで

りしを今よりは 月頃二條院に夜がればはな

なにしにゆづり聞えけん 此君を匂へ

昔しの人に 大君になり是より下十四行ばかりはさき

ざきも有し事なるを今更かくまでかゝずもあれかし

世をも思はなれて 前々は道に入し心をなり

たいかの御事を 大君の事

かやうなる

六君の事

人のうへさへ

中君の御身のうへ

なげのすさび

薫の

さはやかなれ

清う心とまるべきがすべなきなり

かの君たちの程におとるまじき

宇治の君達におとる

まじきほどの孫王などのおとろへ給へるを御心とま

るやと女三の御方にすませ給へとなり

今はと世を

初めは末にほだしなるべき事はせじとお

ほせしをいふなり

いでさもわろく

大君は心とまりしより心たがひして

たゞ其ゆかりをのみおもはしくみかどの御むすめを

しもふさはしからずおもひてかく獨ねしつゝ明しわ

ぶるなど心ながらねぢけたる事とはおもへども猶わ

すれず物思はしきなり

猶ことにめとまる

大君のはかなかりしを思ひ寄るな

るべし

明る間咲て

或説に「あさがほは常なき花の色なれや

明る間咲てうつろひにけりてふ歌を引つれど此歌何

に出しにやもえられず且いとつたなくして古歌にも

あらねば例の作ごとか此外に猶古歌を求むべし

北の院 二條院

をりて 庭に

花の中に 花を折給ふなり

けさの間の 露の消ぬ間にかゝりて有る花なればやが

てうつろふべき物とはみるゝまばしの色にめでて

や有べきとて程なく消べき身を知るゝまはしばか

りの世をかく物を思ひ入て過んがはかなき事となり

かゝる花とみるゝ 露によりてまだうつろはぬなり

云々にかゝり給ふと前にも有しことばなり

をみなへしをば 世のはかなき事をおぼせば朝がほに

は心とまりてなまめきたる花はうしとおもへば折

給はぬなり古今に「をみなへしうしとみつゝぞ行過

る云々此本ばかりをとりて書けり

朝まだきまだき來にけり 朝まだきはまだ明はなれぬ

ほどの事にて次のまだき云々は來り様が餘りまだは

やかりけるとなり同じ語ながら心別なるを以てかさ

ねいひたりこは古歌のことばを用ゐたるなるべし

まゐりて あけたるなり

おりて 車より

みやのまのびたる所より

女房たちは

れいのいとさまことに匂ひくれば 隠れなき此君の香

をいふ

猶いとめざましく この猶といふに依に宮の御さまに

ほひなどに増さらじと思へど薫もまだくおとらす

めざましくことなる君ぞといひて且そのさまに似ず

まめたちてのみおはするがにくしといふなり

おどろきがほには 常のもてつけのよきをえらするな

り女あるじの心より人々のやうだいましあし有こ

と前々も書り

さらば 女房申

北おもてなどやうのかくれぞかし 是は薫の心有て隠

れの方をのぞむなりこは外さまにすゑ給ふを恨給へ

ば女房まからばいか様の所にとおぼすと申すに薫の

こたへて北おもてなどの隠れの方よからんかしと

仰せらるゝなり或説記者の語といふは誤りなりさて

は此文聞えず

かゝるふる人などの 是は北面にすゑ參らせて後の薫

のことばなりみづからこのみて北面に來たれども中

君のおはす所は猶遠げなれば猶我如きほけものゝ打

やすみて侍らんにはよき隠れなりかゝる所にすゑ給

ふも見おとし給ふ君の御心よりなればよしゝ今

申べきにもあらずと恨むなり

あしこもとに かしこと云に同じ今はあそこといへる

も音皆かよへりこは中君に申なり

もとよりけはひはやりかに 薫の様を中君のおぼす

いよゝまめやかにもてなしおさめ給へれば 急に強

ことなるらんさまを此二ことばにこめたり

はかしくも 薫中君の

つねよりも 君は

六君の事によりて薫にむかひてはいよ

ゝ宇治の事をおぼせばなり

世の中の 薫の

世は皆とてもかくても心になふ事のみも

なくいかにおもひおきてたる事も違ふし有る物ぞ

など六君の事もさのみおほしぞ又有る様有べしなど

の事なるべし

中君のこゑ

大君に

おぼえざりし 前々は

こは大君のなやみふし給へるが中

中なよ、かなりしを見給ひしにつけてかのこゑなどの似給ふによりても見まほしきなり

世の中にものおもはぬ人も 薫のわが實心と思ふにだにかくあればなり

人々しく 薫のゝたまふ

なげかしく 是も下のなやむさま云々へつゝなり

心からかなしき事も 大君の事

をこがましく 中君をわが物とせて

ことわりの愁 官位のすゝまぬを愁るは世の理有る愁

なるをわが如き愁するは罪のことに深からんとなり

こは餘りにことわりなき事を書たり官位につきて愁

するをだに罪とする天下に罪いかなるものか罪な

るらん文さばかりの事だに罪と知る人の人妻に係想

のきたなさま惣てかゝる事はかゝであれかしよく道

を得ぬ人のほしたゝ耳に聞覚えしのみにて書くはこ

とつきぬ物なり

あかみもて行も あさがほのうつろひ行色なり

やをらさしいれて 塵の内へ

よそへても おもては露と朝顔は契りしこと有物か共

にはかなさのよそへらるゝぞとなりさて大君に中君

をよそへて思はるゝはさる契りか有けんといひて且

先に同じ身ぞと大君のゝたまひしを契りか置してふ

にこめたる成るべし

ことさらびて 其朝がほを中君のみて

きえぬ間に あさがほのまぼめる後に残る露の如く大

君におくれるてかゝり所もなき思ひする身は先消給

ひしはかなさにもまされりとなりその心のいひたら

はぬを助て何にかゝれるてふことばを添給へるなり

さてかゝり所なきをなげくは六君の事につきては中

君の浮たる身とならんと思ひ給ふをふくめる成べし

さなくては猶ぞ増れるてふ詞穩かならぬなり

何にかゝれる 或説々に引る歌は物にも見えすして古

歌にもなく又は金葉集の歌を引しものと後の人の歌

なりさて思ふにこは草葉にかゝる露の身なればなど

いふをおさへにてこゝはかゝり所無をいはんとて何

にかゝれるといひなしたるにてやあらんさるいひな

し此文の常なり

に似給へる物哉と 大君に

ながめのみ 愁をいふ

庭もまがきも 古今に「里はあれて人はふりぬる宿な

れや庭もまがきも秋の野らなる

たへがたき事おほくなん 宇治の故郷につけて故院の

事など思ひ出給ふなり

古院のうせ給て後 六條院光源氏

うせ給て後 此所に句をするは誤りなり引つゞけてよ

むべし此文を甚わろく心得たる説あり

世をそむき給し 此句は下へつゝなり

さかのみん こは嵯峨院に光源氏の世をのがれ住給ひ

しことをこゝにまらせて書きたり是は雲隠巻に有べ

きものなりさてさかの院は嵯峨天皇おりの給ひて後

承和元年に嵯峨の離宮へ移りませしを崩給て後に淳 宮だちなどを 明石中宮の御腹

和の太后貞観十八年に公家に奏し給ひてさが院を寺 またいはけなく 源の雲隠の時は薫

として大覺寺と名づけ給へる事史に見ゆ是を思ひて 夢こそ 大君

今は書きたり 同じごと 源も大君も

心おさめんかたなくなん侍りける 源氏うせ給ひて後 つみふかき方は 大君は戀の方なれば

もいか様二三年の比は其院などの様かなしき盛なる それさへなん心うく 罪の深さをさへとり添へてうき

べし なり

御あたりの人は 六條院 むかしの人を 大君をさしも思はぬ人

をのゝ心はなるゝ 尼となりて世をはなれて住しな この人 薫

るべし われも物を 中君

思ひみだれ給に 宮の心かはるさまぞ
 おもかげに戀しく 大君
 今すこしもよほされて 泪
 かたみに 互に
 よのうきよりは 古今に「山里は物のさびしき事こそ
 あれよのうきよりは住よりけり此歌は世のうきと
 山里の淋しきを思ひくらべて山里の方につけるが中
 君はもと世中は知給はねばわびくらぶる心もなく
 山里にのみ住しを今世に住てうきを知りたれば今こ
 そ山里住を思へとなり

この廿日あまりの程は 古宮の御忌日
 かの近き寺の 宇治へ行て
 あらさじと 宇治の宮を
 かしこは猶 かの宮の寺になさんなれば夫にまかせて
 おき給へとなり
 つみうしなふさまに 寺として罪尖ふ方にとなり
 なし侍なばやとなん 一本になしてはやといふによる
 べしてはの反りたなれば爲たやといふに同じ爰にな
 し侍りなばやと有は後人右を心得かねて書きかへし
 なるべし

いかにおぼし置つらん 中君の御心には
 あるべからんやう おほし置ての有様をのたまへなり
 此うへもくやうし 此上にも故宮の追善の事
 かやうなるついでに 故宮の御忌日の御とむらひにこ
 とつけてやをら宇治にこもりてかへらじとの中君の
 けしきなればまかるべからずといさめ給ふなり
 いとあるまじき事なり 薰詞
 今又かやうにもさぶらはん 御簾の外なりともなり
 みやの 句
 きつらんと 薫
 さむらひのべたう さむらひは匂宮の家の侍所にて内
 に殿上の侍といふがごとしその別當かねたる右京
 大夫をめし出てなり皇子の家介は公よりつけらるゝ
 如く是は右京大夫なる入宮の侍所の別當かねたる
 成るべし此宮は世にことにおほしおきて給へば例よ
 りもことなるべし
 けふはまりて 右京がこたへ
 夕つかたもとて 又も參らんとてなり
 なほこの 薫心

御けはひ 中君をさす
 むかしの人の 大君の
 御心おきてを 中君を薫に逢せんとの
 思くまなかりけん こは大君の中君を我にとおぼし入
 し事をいたづらにしてもてたがへて宮へ媒せしを今
 はくやしさのみ増りて中君の心にかゝりつゝ思ひは
 なれがたきもかれ是思ひむすほはれて心むづかしき
 なり

むづかしく 此所にて切べし
 なぞや人やりならぬ 中君を宮へ媒して今又わが物に
 せざりしをくゆるは何事ぞやみづからなしてみづか
 らくゆるやうやは有べきと思ひかへしてまばしあき
 らむるなり
 そのまゝにまださうじにて 大君の喪の時のまゝに
 いといたゞ 本より佛の道に心あるをいよくなり
 は、宮の 女三
 かゝる御けしきを 薫の物思ひがちにさうじにてやつ
 れ給ふがもし出家やせんといましくしてなり
 いくよしも 女三詞 古今に「いく世しもあらじわが
 身をなほもかくあまのかるもに思ひみだるゝ

なほかひ有さまにて 當のすがたにて昇進もして見え
 給へとなり
 かゝるかたちにては 女三の入道の身として
 このよにてはいふがひなき もし薫の出家などせば
 心まどひし 我入道の身にて御子の出家をさまたぐる
 つみよりももし出家して後にさまゝ我心をまどは
 さんはつみ深かるべしとなり
 右の大いどの 夕霧
 ひんがしのおとゞを 落葉のおはする方なり
 まち聞え給ふに 匂宮を
 心もとなければ 薫句のおそきなり
 御心にいらぬ 句の
 やすからずおもほして 夕霧
 あないし給へば 句の御方へ人まゐらせしなり
 おほす人も給へれば 中君をいふ
 心やましければ 夕霧の
 こよひすぎんも 事定めたる
 大空の 或説元良のみこの「大空の月だに宿に入る物
 を雲のよ所にも過る君哉てふ引たり此みこの家集な
 どに有る歌にや

宮は中々 今ぞ六の君へおはし初ると見えば中君のこ
 とに思ひなげくべければ却ていつとも去らせて内よ
 りゆかんとおぼしてたい何となく御ふみの中君へま
 るらせ給へるにその御こたへにいかなる事か有つら
 んとなりこは今夜六君へおはすことを中君はとく聞
 えてそのよしを御こたへに聞えけんをおもはせて書
 けるものなり

御ふみ聞え給へりける 宮より
 御返りや 中君の
 なほいと哀れに 去らせじとおぼせしをさても猶哀に
 おぼして二條院へまかで給ふなり

らうたき有さま 中の君の
 よろづになぐさめかねて 古今に「我心なぐさめかね
 つてふ歌をもて書けり
 女君 中君
 中將の 右にある夕霧の使
 かれも 六君の方も
 いまとくまわりこん 中君へ宮のゝたまふ
 ひとり月な 文集に莫對明月思往事
 かくれの方より 宮の常住給ふ殿へ中君の住む西對

よりかへり渡りて寢殿より六君へおはさんとする也
 あらはれて今はと出給はんは中君のいとほしとてか
 くれの方より物し給ふ也
 た枕のうきぬべき 六帖「獨ねの床にたまれる泪に
 は石の枕もうきぬべらなり
 世中を 是より父八宮を云
 あさましき御こといをも 大君さへなく成給へるを云
 こひしく 父宮と大君の
 人の思ひたりし 宇治にて
 人数にもなるやう 匂宮の御もてなしにつけて
 御心ばへ 宮の
 此ふしのみうさはた 六君への事
 ひたすら世に 父宮と大君など
 これは時々も 匂は
 思ひやる方なく これは萬葉などに思ひやり失ふこゝ
 ろにていへるに同じ後にいふ想像する意にあらず
 更にをば捨山の 弄なぐさめがたき思有て見ればいづ
 この月もをば捨山の月なるてふ意にて古今の歌によ
 りたるのみ
 風の吹來る 宇治にて

山おろし 宇治の

いとのだか こゝは

玄ひの葉のおとには 宇治山の

さし方わすれにけるにや 昔の山風のうかりしをわす

れたるにやと右の歌をとがめたり

月見るはいみ侍る 小町集に中たえたる男の忍びて隠

れ立て見るに月のいとあはれなるを見すてゝねんこ

そくちをしけれとてすのこにながめければ男いむな

るものをといふきかぬさまにて「獨ねのわびしき時

はおきみつゝ月をあはれといみぞかねつる竹取物語

にも或人の月のかほ見るはいむ事とせいしけれども

ともすれば人まにも月を見てはいみじくなき給云々

ゆゝしくなり 忌々しきなり大君もながめがちなりし

を云

この御事と 匂宮の六君へ移り給ふ事なり

さいへど 今かくはあれどなり

こはいはざらなん こはいはずあらなんにて人々はと

もかくもいはであれとなり

たいにこそ 宮の御心のまゝにしてこゝろ見んとなり

人にはいはせじ 記者のいふ

中納言殿 薫

そのかみの人々 はやくより侍る人

心ぐるしく 中君の心を

まちつけきこえ 六君のかた

人の御ほど 六君の御さまなり

ものくしくあざやきて 物々しき方に勝れたるなり

秋の夜なれど ながしともおもほえなくにむかしより

あふ人からの秋の夜なれば

ふけにしかばにや 宮の渡給ひし時

たいへば 中君の方

御文かき給 六君へ

天下にあまねき 宮の御心世にかたよらず中君をもゝ

との如くおぼすとも六君はたよろしく夕霧のさかり

にもてはやし奉るにつきてはおのづから此方はおさ

れ給はんなど大よそならず心ぐるしといふなり

御返りも 六君よりの

よのほどのおぼつかなさも 一夜のへだてもなり

いそぎわたり給ぬ 中君の方へ

ふしたるも 中君の心

うちあかみたまへる よもすがらなき給ふ故なるべし

あいなく涙ぐまれて 宮の中君の心をおしはかりて
はづかしく 中君のなり

御心ざし 六君に
見給ふほど 中君を

おもがくしにや 此語は萬葉「むかへれば面がくしす

げに 中君の語

る物からになどもよめりこゝは宮のはしたなくおほ
す心をまきはすして此事をいひ出給ふをかくは書
きたり

このよは 「在はてぬ命まつ間の程ばかりうき事まげく
なげかすもがな此歌の末を打かへしてかく契給へど
まはしのほどにだにかはり給ふ様を見るに猶來ん世
の事はもし違はぬ事もあらんと今にもこりすしてた
のまれぬべく思ふとなり又古今に「こりすまに又も
あだなは立ちぬべし人にくからぬ世にしすまへばて
ふをとりかへて用ゐたり

涼しきほど 八月十七日なり

さまざませさする事も 祈なり

心づきなく 中君は

例ならねば 例に違ひて御こたへもせずは思ひ知たる

さまざまらんをうたておぼすなり

むかしも人にぬ 中君の御こたへなり山里に侘くし

て在しをいふ

かやうなる 病

いとよくこそ 中君のことやすらかに云ひなし給ふが

下に思ふよし有を宮のこゝろ得て戯にとりなし給ふ

なり

とくゆかしき はやくうつりやすき此宮の例の御心を

いへり 猶またとくゆかしき 六君なり

あが君や 物の切なる時人をあがむる語

をさなの御ものおもひや 世間の様を思ひ給はぬとな

すこしのよういは 使の人
まゝはのみや 落葉の宮

ことえりして 六君にまめ心のあらばいと用意して物

聞ゆともそのさまかくれあらじをとなり

身を心とも 六君の事は御母后のせちに仰有てやむこ

となき故ぞとなり

もし思ふやうなるよも 春宮にもなり

人にまさり 御息所にもとなり

ことに出べき

いのちのみ えぞきらぬ今心見よ命あらば我やわする

る人やとはぬと

すこしはわかる 中君の御方へは

みなみの 西對の

あまのかる 御使の祿によき衣裳をかづけたるをいふ

詞は後撰に大友黒主が幸崎の坂に出たるに物かづけ

たる時よめる歌「何せんへたのみるめを思ひけん

沖つ玉をかづく身にして

さなめりと 六君への御使ぞと

いそぎかき給つらん 宮の

さしぐみは さし當てはなり後撰などの歌にも有

かばかり 中君を
心ぐるしき 宮の

もどき有まじければ 世に
此御方 中君を

みづからの 中君の
ならはし給て 宮の

かゝるみちを 世にいふねたまなどの事を今ぞ思ひし
るとなり

あはせ 飯の外なるさまぐのをし物をいへり或説に

合子の意にて朝の飯を朝あはせといふといへるは後
の俗語なるべし

見ぐるし 是は見るめのくるしきをいふ

くれぬれば 六君へ渡給はんとてなり

物おもしき人の 中君をいふ

山のかげのみ 古今に「日ぐらしの鳴つるなべに日は

くれぬと思ふは山の陰にぞ有けるてふ詞をもて書く

故に宇治のことを山の陰と書たり

大かたに むかしの山里ならば日ぐらしの聲も大方の

秋の哀と聞ましをかく物思はしき時に聞て堪ぬよし

なり

あまもつりする 或説「戀をして音をのみなけば敷た

への枕の下にあまをつりするてふを引たれど何に出

たる歌にやゑらすこゝは泪の深きをたとへいふなり

我ながらにくき心を ねたみ心は

はじめより 宇治に通ひ初給ひしよりさまぐ思ひ多
きなり

このなやましき はらみ給へるをいふ

いのちみじかきぞうなれば 母君大君も命短かりし一

族となり

かやうならん 子うむにつけてなり

つみふかくも 或説懐妊ながらうせなば罪深かるべし

その日は 六君の三日なり

后のみや 明石

おとやは 夕霧

ひるまかんで給 けふ三日の御まうけの爲

中納言 薫

ひとつ御車にて 夕の

こよひのけしき 記者

いそがしくまうて給て 内より夕霧にいざなはれてい

そぎ六條院へ

人の御うへに見なしたる 六君を前に薫へとけしきは

み給へるを

よひすこし過るほど 或説に重明親王右大臣の智にな

り給ふ三日の夜のさま李部王記云天曆二夜更漸深向

右相府亭所住之東南對廂東頭西向設座以朱臺六基
及銀器辨一僊小臺一双以二樣器辨一僊菓等一安座一座右一
云々

あざれて あまえざれてなり

とみにもいで給はず 宮は六君の方におはして宴の席

へ出給はぬなり

北方 雲井廂

いで給へる 宮

あるじの頭中將 夕の男

わづらはしき 前に匂宮と薫と語り給ひし事なり

見しらぬやうにて 薫は

いで給て 薫

おほしある殿上人 よき人多く御ともせり

女のさうぞく 細長は貴き女のさるなれば四位には是

をそへたり

みへがさねの 中倍有なり

ものこしも皆けちめ 人の品に依て裳のこしの地も品

品あり

あやのほそなが 上のは織物にて是は綾なるべし織物

はいと貴きなり

召繼奏時云々親王家にも召繼有べしその中に此句
宮はことなればやがて后宮の召繼を用給ふ歟とね
りは帯刀舍人ともいふによるに帳内をいふか又是も
公の瀧口舍人の參りしにや

中納言 薫

かへりてうちなげきて 薫の御ともして

この殿の 夕霧

ちうもんのもとにて 三條の宮

夜のふけて 記者の語

かのもてかしづかけける人も 薫の御ともの人々

君はいりて 薫三條に歸て

はしたなげなるわざ哉 むこ入といへども是はいと近

き中なれば殊にはしたなげに有べきなり

めやすく 匂の

いひならぶなるこそ 匂に並べていふなり

心おこりせらる おこりは心おとりの誤歟

うちの御けしき 女二宮の事

故君に 宇治の大君

あせちのきみとて 細女三に侍ふ人

たいならず あせちは
うちわたし わが如きをばおしなべたる御心ざしの淺
きにて人めをはちつゝゆるしなくかくもてなし給ふ
物をなまじひに見なれ奉りてかひなき名をとらんが
をしきとなり

を思ふ道にまどひぬる哉
やはらかに 中君
物のたまふ 六君
かどくしげなり 一かど有てよきなり
このみそし うるはしきは常ある事とていたく今めき
て中々に事を殺ぎてし給へる事も有なり一説過しな
りスコの反ソなり
三條どのほらのおほい君を 雲井鷹の腹
二條院に 中君の方
え心やすくわたり給はず えこなたを夜がれしがたき
なり

せき川を 逢坂の關川なり
みなれ初けん 水と身をかねたり
いとほしければ 女の心の
ふかゝらす 元良のみこ「淺くこそ人は見るとも關川
のたゆる心はあらじとぞ思ふ
ふかしと 記者

この空見給へ 八月十六夜
えんなる云々 古歌など思ふよし有けん後に考べし
ことにをかしきことの 薫の語
宮の内方に 女三の宮は世をそむき給ひて花やかなる
事もあらぬを人々のあながちに參りつどふは此薫を
またはしう思ふ故ぞとなり

宮は 匂
女君の 六君
心もまどはし

「人のおやの心はやみにあらねども子
げに心あらん人は 今ぞ大君の心おきてをげにと思給
ふなり
山ぢわけ出けん 宇治
しのびて 宇治へ
むげにそむくさまには 匂を
にくげにもてなしなどは 宇治へ歸りても文などに
げならず匂へ通さんとの事なるべし
一日の御事は 八宮の三とせの御わざの事
傳へたりしに いひおこせしなり
御心のなごり 八宮へもとの御親しみの名残有てかく
御わざも薫の執なし給はずは父宮の御爲いとほしく
ともせんかたなからましをかくおろかならず物し給
ふがうれしきとなり
みづからもと聞え給へり 薫に立より給へとなり
みやの 匂をいふ
このみたち給へる程にて 色好の進みたつなり
おぼし 匂の中君へ
うけ給はりぬ いひ贈られし事をうけて略き書たるな
り前にも有し
ひしりたちたる様にて 八宮の御わざを薫の行ひ給ひ
しをのたまふ

ふなり
山ぢわけ出けん 宇治
しのびて 宇治へ
むげにそむくさまには 匂を
にくげにもてなしなどは 宇治へ歸りても文などに
げならず匂へ通さんとの事なるべし
一日の御事は 八宮の三とせの御わざの事
傳へたりしに いひおこせしなり
御心のなごり 八宮へもとの御親しみの名残有てかく
御わざも薫の執なし給はずは父宮の御爲いとほしく
ともせんかたなからましをかくおろかならず物し給
ふがうれしきとなり
みづからもと聞え給へり 薫に立より給へとなり
みやの 匂をいふ
このみたち給へる程にて 色好の進みたつなり
おぼし 匂の中君へ
うけ給はりぬ いひ贈られし事をうけて略き書たるな
り前にも有し
ひしりたちたる様にて 八宮の御わざを薫の行ひ給ひ
しをのたまふ

ことさらに 中君此御わざにことつけて宇治へおはさ
まくのたまへしを薫有まじき事と思へばこと更に忍
びて宇治へもおはしてことを行ひしとなり
なごりと 中君の文に御心のなごりとのおたまふはこと
も淺し我は専らにむかしの事をも今は御うへをも思
ふ物をとなり
あなかしこと いとあがめたる文に書く事にて前に玉
かづらの源への御こたへにも有しなり
人宏れす 薫のけさう心
丁子染 かはほりを丁子のけして染たるならんと或説
にいへりさて夏より秋までもてならし給へるなり
あやしかりしよの 宇治にて一夜薫の添ひぶせし事
人に似ずものゝたまふ 薫はまめにて匂のあだなるに
似ぬなり
さてあらましを 薫のめにて有まじをとおぼすらんと
記者のいふなり
いはすこし 中君
わざとめしと 薫のゝたまふ
宮わたらせ きのは

年頃の来るし とし比仕る功

へだてすこしうすらぎ ひさしの簾の内最屋の簾の外

なるを云

なほいとほづかしく 中君

一日うれしく 八宮の御わざの事を

むすぼゝれながら いはで心の中に

思しる うれしと

いとほく いと遠くなりいと奥もといふ説は誤れ

り今本どもかなの定めなければかゝるひが説も出く

るなり遠はとは奥はおくのかなにてまがひなきこと

なり

心もとなくて 薫心

げにと 中君

聞給ふ 薫

いひもうとめ 薫の下心あればなり

世やはうき 古今に「あまのかる藻にすむ虫のわれか

らと身をこそなげけ世をばうらみじ此心を得て世や

はうきと書つらん或説に引たる歌は出る所見えす恐

らくは例の事歟

それはしも 薫のこたへ

心かろくも いせ物語にいさゝかの事につけて家出せ

し女「出ていなば心かろしといひやせん世のうき事

を人はしらねば

さだにあるまじく しか宮へのはかりなくば

過にしかた 宇治にていたづらにそひふして宮にゆ

づりし事

物にもがなや 古今「とりかへす物にもがにや云々

いとうるさく 中君

さてもいつばかり 引とめんとのたばかりごとなり

しばしいりさして 中君

ついたちの 九月なり

よのゆるしなど 宮へ申乞を云

むかし思いでらるゝ 大君に似給へる故

袖をとらへつ 一本にとらへつと有これによるべし

さりや 然有よなりくらく成までおはするをうるさく

思ひ給ふをいふなり

もやの簾の

あらずや忍びては 宇治へ忍びておくりせよとの給ひ

しは我に御ゆるし有とうれしく覺ゆるはさる御心に

はあらずやわがひが聞にやよく承り我も聞えさせん

とてとなり時のいひ種にかく取なしの給ふなり

これはとがあるばかり 猶強ていふなり

すぎにし 大君

くやしきにも又げに げにと云たるは六帖「神山に身

をうの花の郭公くやしくとねをのみぞなく此歌をむかしおほゆる

思ひて書るなり或説に引たるは後の人の歌にてこゝ ことわりしらぬ 或云「身をすれば恨ぬ物をなぞもか

に用なし

ありがたかりし 實の事は

かひなき物から 實事も無き物からなり

なやましげに はらみ給へば

こしのしるし 御はらの帯の事なり下に見ゆ

おこがましの 薫のみづから思ふなり

心つかひて後 かく強ごといひたる後はいよ／＼うと

く成なん物ながら夫につきても忍びありかんとかた なき人の 大君の事を薫の思ふ

みに心づくしならんとなり 所せく思ひなられて 身のおき所なきなり

思にせかれず 我思ひかへす心にもせきとめられず

なり うちとけぬ 六君のかた

今の間も 後撰に「あはざりし時いかなりし物とてか

只今の間も見ねば戀しき かながちなりつる人の 是は薫

身にそひたる心地して 是は面かげよりも心にさ思は あはれを 薫のあはれなる心ばへと思來しも今はたそ

るゝを云

ことゝ 他事

いたづらに かひなくてかへる程をいふ

なみだを添

宇治の通ひを云

くことわりならぬつらさなるらんでふ歌を引たれと

出たる所あらねばおぼつかなしされど古歌によれ

る語とは見えたり

いにしへには 宇治にて添ふしせしよりはなり

又思ひます人なき 前々も出しことばなりされどこゝ

のことばの出たるは拾遺集に「思ひます人しなけれ

ばますかみうつれる顔とねをのみぞなく是か

所せく思ひなられて 身のおき所なきなり

うちとけぬ 六君のかた

ことよきわざにや 男はたれも言のみよきと今ぞ知た

るさまなり

あながちなりつる人の 是は薫

あはれを 薫のあはれなる心ばへと思來しも今はたそ

の人も有まじき心有と思ひ知にと云なるべし一本に
あはれをも有まじき事と有はていよ／＼ことわり明
らかならず

此御ゆくさきの 匂の事なり

いでや いでや心は大ぬさにしての意なるべし

むかしの人に 薫の大君にも強ごなどはせざりし事

を語られし成べし

ひさしく 宮の

かの人 薫

かうのかにいれ 薫衣を衣の内に入又たき物にたきし

めといふならん然らばにの字の下を匂とせん又考に
いれ衍字なるべしかの常のかうのかにたきしめたる
にもにすと有ける成べし

その道の 或は好色の道或は香の道といふ説々あり香

のことにくはしければとがめ出給へるかたによりぬ

べし又下にくまなき御心ならひに思ひしらるればと

有によらば好色のかたともすべし猶考べし

いかなりしことぞとけしき 是はけしきをうかふふな

いはんかたなく 女君

よまたいには 薫も

ひとへの御ぞなど ふれたるうへの衣はもとよりいと

下なる單までなり

心よりほかにぞ 思ひの外になり

のこり有てしも うたがふまでもなく薫のそひふした

るとのたまふなり

思ひ聞ゆるさまことなる こはさき／＼にも有て終に

春宮にもならば専の人とせんの意成べし去からずと

いふ説あれど猶右の心前々にも見えしなり

われこそさきに 中君の心を宮のたまふなり六帖に

「人よりは我こそ先にわすれなめつれなきをしも何

かたのまんでふ歌なり宮の六君へ通はし中君の我こ

そ先にわすれめとて薫に逢給ひしよとなり

程やはへぬる いくばくのよかれにもあらぬをとなり

又人に われならで又の人にあひならしたるといふな

りいせ物語に又人通ふといへり

あさましく をぞましと云に同じ

いかにほとと いかはさるあだし事の侍らんとなり

みなれぬる 見なれに身馴をかねかばかりはかくばか

りに香ばかりをそへたりさてかばかりの事によりて

必たいには過じとなり

わがいとくまなき 匂

いとすくよかに 薫の文の語

なほ／＼しき なみ／＼のといふが如し

あやし 匂の心

いつのほどに たゞきのふけふのみのとだえなるをい

かにつもる御おもひありてかく御文のしげきぞとな

り

さはいへど 今めかしき方にうつりはて給ふらんとは

いへど猶宮の中君をかく思ひ捨給はぬをかをるはね

たき物からうれしくもおもふなり

うれしくもあり 前にねたきと有しをかねて云ふ語な

り

人々 女房たち

なつかしきほど やう／＼なよ／＼か成はあたらしくこ

は／＼しきよりもなつかしきなり

母宮 女三

例のたゝん月 立來らん月は九月にて齋月なれば尼君

の方なれば法事といふか

いまはわざとも 尼宮なれば云

中たえてはなれんすらんとなげくなりともかくもこ
とわりがたき事をよくいひなしたる歌なり
かゝればぞかし かくさまの人なれば薫も心がけしぞ
かしとなり

こしらへ聞へ給 うらみをのたまひさしては且は中君

の心をとりなくさめ給ふなり

おほとのごもりおきて 匂宮

さばかり 六君の方にて

人々 女房たち

君は 中君

うす色 うす紫なり

なでしこ おもて紅梅うら青

なに事 六君をいふ

けおとりてもおほえず 氣劣らぬなり

心ざしの 匂の

はちなき 此方はしつらひさうぞくもことにもあらず

女もや、盛過かたなれど六君の方にくらべてもはち

なしとなり

まろにうつくしく 中君

はらからなどには 兄弟などならぬ人の近づかんには

みくしげ殿 衣など調する人のをる殿なり

忍びやか ひとそれとはいひやらで

たゞなるきぬあや たちぬはぬも染ぬも是にこもるべし

はこにて 別にはこに入たるなり

身づからの 中君をさす

御らんせさせぬと 中君へはかくといひて見せまゐらせぬと

わが御れう 薫

御心まらひ

はかまの具は 右のきぬあやどもの中にはかまの具は

けしきばみ 今ほ有まじき事とて

なきにいかにして交りたりけん裳の引腰の有をむす

ひこじろふべきにもあらねば かなたこなた引あふ事を

びてかの打きぬにそへたるなり歌の意語によしあれ

を轉してこゝはかれ是と文おこせ又かへしなどする

ばなり

をいふ

こしのひとつ 紐なり

いかゞとも 大輔の君の心もせで取行ふなり

むすびつる 中の君は既に其父宮も姉君も薫に心むけ

けちえんならぬぞ 掲焉の字音にてこゝははれがまし

て其後心ざしをも久しく見えつる物を過し夜につれ

うさらくしからぬを云

なくとけざりし下ひもをばたゞ筋に恨むるかはと

たれかは 中君へ

なり或説にかのはらみ給ひて腰の帯し給へる事も有

思しおきて 掟なり

ければその事にて匂との契りある中君なれば我にと

えんにそゝろさむく 宮の

けぬ下ひもゝうらみずといへるは筋違へりさる事を

此艶は次の花にあたりそゝろさむく

今いひやりて何にかはせんたゞみづからの恨をこそ

みて過すべき世とおぼすのみの宮なるに中君の御爲

いふべき度なれ

によりてはまめなる事をもとりあつかひ給ふなりさ

とりあへぬさまの おくり物のよろしく調せぬを云

れどそれはたまゞにてよろづにことたらはねばそ

御れうのは 中君の

しくてまからせらるゝにそをばわざと織せられしと

の御本姓の有がたきをば思はで御めのとなどは宮を

なり

そしり申となりこゝの注などさまゞいへどよくあ

なり

たれるはなし

御こうちぎおらせ わざと

なりあざやかならぬ 衣などのなえ過たるをいふ

あやのれう 是も織べきものに綾の料の糸など給はせ

なかくゝなる 宇治にては人めなければとてもかくて

ておらせ給ふなり

も有しを

かたはなるまで 餘り心高うて大方の女などには心よ

よにひいたる 六君の御方

せ給はぬを云

宮のうち 匂宮の内の人どもの六君のかたの目うつし

こみこの 八宮

にて

いとほしの人ならはしやとぞ いとほしのいとほしに

人げなき事と 中君の我

て物をつよくいふことばほしは愛たしとほむる語な

見ぐるしくくゞしかるべき 有がまゝよくそれ

り然ればこゝは宇治の八宮の人の心を實なる方に教

それにもどうせぬを云

へならばし給ひし事のめでたしと此薫の思ひやう有

こゝろしらひ 有意

につけて時にほむるをいふなり物の癒れなどするを

あなづるとは 中君を

ほしといふはかのめでたしと思ふ物の失るより轉せ

おぼえなく おもひよらぬを云

る語なるを異國には惜てふ字を別に書るにならひて

見とがむる人 いかなる事ぞもし下心有かなど

後世人はたゞ惜む事とのみ思へばこゝには惑へる説

いまぞ又 さきには有あへるものを侍ふ人々にうちう

の多きなり

ちにおくりそれが中にまじへて中君の御料をも參ら

うしろやすく 薫のみづから思ふ

せつれどなめげなれば猶それともいはで有しなり今

思にも去たがはず 我心の我思ふに去たがはぬなり

はたおもてに出て例あるにつけて御料の物をうるは

女君 中君

さまことなる 中君と薫ははらからにも夫婦にもあら
で頼みならへるをいふ

ぬにはあらねど 薫の心ざしを中君の思ひまら
みなあたらし 今参り又宮の御方さまの人をもいふべ
し

こひめぎみ 故おね君なり

この人も 薫は大君の御夫にてあるべければ中君に心
をかけんやはとなり

給はましや 給はんやと云をのべたる語なれば此しは
すみてよむなり

この事 薫の係想を云
をとこ君 薫

れいのまめやか 宮のおはさぬ時を伺ひ知たるなり
はしに 心ざしの間を云

いとなやましき 中君

いたし給へるをきくに 薫の
まらぬそうなど 加持する僧
くすしなど 醫師

つらにて 列

いと物しげなるを 薫のなめげなるあへしらひとおぼ
す様なり

ひとよも 前の夜をいふ
いと見ぐるしく 薫をいと外にするまむらすは
うちおろして 打垂て

女君 中君

まことに いつものことばならず
うたてけちえん 餘りにことにいちじるくへだてんは
中々人のいぶかしむべきとなり

むかしの入 大君

まづ思ひ出で 薫の
ゆゝしく 忌々しくなり

いとくるしけれ 中君の
のたまふを聞て 薫の

ゐなほり給ほども 人の來れば薫の座を正しくするな

中君の心いふ げにぞ下やすからぬ 薫のむねおさふるはわろしと云
は上は中君の爲の様にて下は人を近くおかしの心な
るを中君のまりてその上をおさふる語よりげにぞ下
の心のやすからぬとのたまへりそのことばは水鳥の

下やすからぬ思ひにはあたりの水もぬるむへらなり
てふ歌のことばをもてなり
いかなれば 薫ののたまふ
まばしこそ はらみたる人は

いとほづかしく 中君はらみ給へる事を薫のたまへば
むかしの入 大君

ながかるまじき 命
するわざとか かゝる病を

たれもちとせの 或説に「うくも世の思ふ心になは
ぬかたれもちとせの松ならなくに

此めしよせたる人の 右に出たる少將
えりとやむれ 撰とやめていはぬなり

かの御身ひとつには 中君をさす
げに有がたき御心ばへにも聞ひたり 少將は

思ひそめ 大君
いはけなかりし程 薫

なぐさめばかりに 大君を戀る心のなぐさめになり
さらに外さまには 大君のなき後は中君の外にはとな

心ひくかたの 大君の後に心のひかるゝは中君なるを
とのかたを 外

それはぬしのおはすればつよく思ひやまん物ながら
心のひかるゝまゝにえつよからで物申すぞといふな
るべし

あるまじき 強て係想などはせずとなり

たいかばかり かくばかりなり
よの人に似ぬ 薫のわが

うしろめたく 中君のこたへ
見しる事どもの 薫の實なる心ざしを

これよりなど 前に中君よりの文も有しを云
さやうなるをりも 中君よりわざと聞え給ひし事は覺
えずと薫ののたまふはかの宇治へ渡りなん送りを頼
給へりしをばかの少將の聞をはかりて寺作り給ふ
用有ときのみ仰られしとはいひなし給ふなりさてそ
の用有時めしつるをいとこと勝れたる事におぼして
是よりもおどろかすなど仰らるゝにやとなり

からうじて いとせめてたまゝなり
めしつかはせ 薫の我を

夫もげに 我をうとからず思せばと思ふにうれしうと
なり

かぎりだにある 或説に引「戀しさの限りだにある世
なりせばつらさを去ひてなげかざらまし
おとなしの里 或説に戀佐ぬねをだになかん聲立て、
いづこなるらんおとなしの里是は紀伊國に有といへ
今すこし 中君
どここは夫まではあらでおもふばかりねをだになき
あやしく うき舟の君の事なり
てあらんに音に聞えぬ里もやといふにとれるのみ也
いとうれしく 薫の
むかし覺ゆる人形 大君の形を作らんとなり此たぐひ
いとうるさく 中君
淡の李夫人などのこともあれどこはそれまで引は
此ちかき人の かの少將
過ぎたり
たづね出たりし 中君のかたへ
つくり系 色どり作る繪なり
うとくは 異腹ながら
おこなひ侍らん 下に山里の本尊にもといひたればこ
又うちつけに 故八宮のうとくしおき給ひしを吾には
かむつまじうすべうもあらずとなり
みたらし川 萩の人形を流す如くに終にはらひ捨られ
むかしの人 大君をいふなり
んが大君の爲いとほしとなり且みたらし川近き心ち
かたみなど 我を大君の形見と薫はおぼしのためへど
こかねもとむる系しも 黄金の賄せざりしかば昭君が
ふ人々もさいへり然るに此うき舟はよく似通ひたり
形を悪く書し如く大君をもわろく書なして薫の思ひ
捨給はんかと右と共に思ひ捨られんよしにていへり
そよ それよなり 薫詞
たぐみも 萩の人形よりいふ
いさや其 中君
いとさしまあるまじき 異腹なれば
ゆめがたり 薫
心おとりも 受領のむすめとなりて居をほち給ふなり
玉のありか 揚貴妃が魂のことをたとへて大君を慕ふ
を云
いとさまで 浮舟をば
いにしへの 故宮の
いととほき所に 常陸國をいふ
母なる人のいとうれはしき 浮舟の母は中君の御母方
のいとこなるが後にひたちの守が妻にて浮舟をぐし
て下りたりしなりされど浮舟をば守のあなづらはし
くせしを愁はしう思ひてなり
あながちにたづねよりしを 中君の方へ
ものしたりし 故に來りしとなり
ほのかなりしかばにや 近く去たしくは見ざりしとな
り
佛にならんは 上に山里のほぞんにと有し
さりげなくて 薫の中君の心を思ふなり
さすがに哀なり しかしながら浮舟の事も思はるゝな
り
あるまじきことくは 薫にたいめんして去たしく語る
事は

ものはかなき有様 故父宮のたまひし事を今中君の
語り給ふなり
さすらへ 流浪
おぼしたりし 故父宮の
たいひとり 大君はおはせずなりて中君のひとりとな
りて今ぞ故宮の仰を思ひしるとなり
あいなき事を みづからのほかくしからぬに此おと
し子をもそへて人さへ傳へば故宮の御面ぶせならん
となり
けしきをみるに 其氣色を薫の見るになり
宮の 八宮
しのぶ草 「むすびおくかたみの子だになかりせば何
に忍ぶの草をつまゝし
にたりとのたまふ 大君に
ゆかりに耳とまりて 兄弟を紫のゆかりの色といへる
事此文にかたぐゝあり
かばかりにても かくばかりにてはなり 去りがたし
と云か然らばにてはを句とす
さすがに 中君
そのわたりとは 住所を

けせうにはしたなき 顯證の音にてあらはになり
 見しり給へる 薫の常の心ざしを
 うちには 中君
 入給ぬれば ふと逃入しなり
 あさはかならん 思ひかへさで強ことせんなどは
 くるしくも たゞにて過んは
 けんじたる 薫は好色のかたに練磨の功なき人なれば
 にやなり
 人のため 中君をさす
 さばかりのきは 母のなほ人なれば
 人のほいにも その女が我ほいにかなふさまの人なら
 ぬ時はとなり
 いとかしこけれど 薫にかくて見え奉るは恐れあれど
 むかしよりもまして見ぐるしう老て侍れば几帳ごし
 に御たいめんするとなり
 いかにながめ給ふらん 尼君の事を薫ののたまふ
 おもひやるに 此尼の外には大君を同じ心に去たふ人
 なしとなり
 人のうへにて 匂宮の中君へとたえ有しを大君のなげ
 き給ひしは此ほどぞとなり
 あいなくものを 大君
 げにかの 今六君につけて中君の御思ひの事を聞にげ
 に大君のなげきおぼせし御心のいちじるきよとなり
 さまぐになん 事のかはり行をいふなるべし
 とある事も 薫
 なほるやう わろきがよきにもなほるなり
 おちきなく 中君を匂宮にあはせてと絶あるを大君の
 おぼしなげきてはて給へるは薫の媒せしあやまちと
 なり
 此頃の御有様は 匂の六君に仰給ふを云
 うしろめたけには 匂の中君をおろそかにはし給はず
 となり
 のぼりぬる煙のみにそ 六君を云
 れいのかの御忌日 大君身まかり給ひて此十一月三と
 せの忌なれば其まうけを今よりおきてらるゝなり或
 説に一周忌などいへど此下に此明る年正月の所に中
 宮へ匂の通ひ初給ひしを三年になりぬるよしあれば
 うたがひなし
 かひなき事の もとのまゝの殿を見るには悲の深きな
 り

いとやくなきを たが爲も益なきなり
 かの寺 あざりの
 その御心ざしも 故八宮
 人々 大君中君を云
 今は兵部卿宮の 匂宮をいふあざりに對て
 北の方 中君
 こゝながら 此地ながら
 けせう 顯證の字音にて寺は山などこもりかなる處ぞ
 よきかくあらば此處はわろしとなり或説に狭少とい
 ふは誤りなり
 猶ぞんでんをうしなひて 彼は思ふにこゝのまたぞん
 殿をなくしてそれを以て山邊に寺を作るかたぞかる
 べきとなり
 つくりかへんの 其後又こゝにはもとの如くなくてこ
 と様にも作らんとなり
 とざまかう様に あざり
 かばねをつゝみて 契沖云此因縁大日經疏一行に有る
 に似たりかの疏を見て木づく所を尋ぬべし
 たいくしき 退々
 いそぎつかうまつるべし あざりの我
 とかくのたまひさだめて 薫
 見さう 是は故宮の御庄の人なり次下にも出
 このたびばかり ぞん殿こぼつべければ
 おぼして 薫
 佛もみな 古宮の御持佛も皆はやく
 かへてつくるべきやうあり 尼に薫のたまふ
 御さう 宮の
 故權大納言 柏木
 こまやかに聞ゆ 辨が語なり
 めづらしう 女三のはらみ給ひし事
 思ひ聞えさせ給ふ 柏木の
 思ひ給へ出らるゝ 辨が
 みたてまつりて 薫を
 心うきいのち 忌々しき身をいふ
 宮よりも 中君の方よりなり
 ゆゝしき 忌々
 故ひめ君 大君を云
 こめかしく 大君は女子めかしくて物いひもこと少な
 なりし物ながらなり
 宮の御かたは 是も薫の中宮の事を思ふなり

はしたなくもてなし 少しすくよか成がたなりしとな

彼君の年は 浮舟の事

我には 薫は故宮大君よりして煮たしければうはべは

かなしきなどこそ 常陸が方に埋れますを

玄たしく見えてやみなんと中君のおぼすとなり

文にさへかきつけて 中將の君は辨がいとこめいなれ

心のうちに 薫の

ばわざと文に玄も書ておこせしなり

思ひくらべ給 大君と中君とを

くはしう 薫

ものゝついでに

かすまへ行はざりけれど

中君の語り給ひし浮舟の事を今辨に

故宮は此御女を

薫の語り出給ふ

母君は 中將の事

京に 辨がこたへ

大輔がもとより

事のすぢなゝり

浮舟の方に侍ふ女房

さもやあらん 宮の

かゝる儘 薫の

あいなくわづらはしく おとり腹なれば

身のほどには 辨は外に便りなき人にて

又とも御らんじいるゝ 中將の君を

とみにもえいで給はず 今の身におきてはなり

はしたなく 中將の君

さるべし

えざふらはすなりにけるが 宮の御方には

けしきある深山木 夕顔の卷にけしきある鳥の聲とい

みちのくのかみの 今の常陸守

ひしも常にいふおもしろきけしきにはあらで世にこ

きこしめしつけて 故宮の

とに物すごきさまなればこゝも所につけてけうとく

のたまはせ 故宮の

すごき梢をいふなり

なげき侍ける 中將君は

やどりたるつた やどり木は和名抄に本草を引て寄生

彼宮 匂

を書して夜止里木一云保夜と有ものをいふなりこの

つたといへり歌に即やどりきといひなして思ふ心を やどり木と

つたは木によりて生のほればことばにはやどりたる

そへたりもとよりつたを専らやどり木といふにはあ

あれはつる むかしの御かたははなくて今老尼のみ

らねどさもいひなすは歌なり

有所をむかしの御かたみとおぼすが悲しきとなり

ここに 或人は此物つたの類にて木蜻といふ物有とい

宮に 中君に薫のなり

へどおしはかりの説なり古今にくたに此もの語の夏

もみじ奉れ給へれば くだにをばふけるは文なり次に

の御方の庭にもさうびくだになどの夏の花といへり

つたとのみ有も同じ

其くだには木丹にてくちなしを云なり我説あり然は

をとこ宮の 匂宮

こゝはくだにのくをこに誤りしにや古へ衣をば家々

南の宮より 薫の三條の宮

にて染ればくちなしの子は用有て且をかききもの故

いと峰の朝ざり 古今「鴈の來る峰の朝霧はれすの

に今紅葉皆散たるに糶の少し残りたる又折から木

み思ひつきせぬ世中のうさ都にても有をいと山里

丹の子のみ山には色なればそへてとせられしをい

にてはとなり

ふにてかのひきとらせてふにつたとくだにをこめて

身づからなん 匂

書つらんとおぼゆ【豊後の嶋萬呂が云くだには是を

あざりに かく先いひて次に中君へことわりいふなり

だになるべし是とは萬の紅葉をさす此説しかるべく

御ゆるし 中君の知給ふ所なればなり

千蔭はおもへり】くだになとふと書たるやうにて

さるべき 中君より直に

詞のついき穩ならず○御考くだには辭にて是をたに

よくも 匂のゝまたふ

なり此御説つらゝかうが侍るにいとよくこゝに

少しはげに 宮のおはせしを少しは知てかくの如く事

かなひ侍りてこゝらの年月うたがひをはるけ侍りぬ

もなきならんと記者のいふなり

やがて千蔭が本に書入置侍りいとよるこぼしう

女君は 中君なり

なんみせ給へるも其まゝうつし置侍りつ

かくのたまふを 宮の

かへりごとかき給へ 宮の、給ふ

あまえて 中君

あやしければ 中々に事有がほにてあやしからんとな

り

やまざとの 文のこたへのことば

げにさやうにて 實にとなり

こと更にいはほの中 古今「いかならん岩ほの中にす

まばかば世のうき事の聞えござらんでふをとりてか

く世のうければ終に山里にのがれんと思へばさる時

又外の所もとめんよりはなれし所をうしなはであら

んと思ふなりその時の爲にもあしからぬやうにはか

らひ給は、堂となさんほもとよりおろかならぬ事と

なり宮の御心うつりのうさもかくうたがひ給ふがく

るしきをも此御かへしを宮も見たまひしれとの意に

てかくは書き給へるなり

かくにくきけしき 心にく、疑はしき事はなき親しみ

なりとは宮の見給へどもなり

御心ならひに あだなる御心にはなり

やすからぬ 宮の御心にねたましきなり

物よりことに 何物よりも

またほに出さしたるも 花のほは秋のなかばに皆出

る物なるに冬となりてほに出さしたると云はかの玄

の薄とて冬も葉のかれぬ有をこゝにはいふと見ゆさ

れど玄の薄の事はいと論あれば別記に悉るす

ほに出ぬ 中君と薫と相まねぐ心あれど忍びこと故に

むねくるしからんとなり

別記玄のすゝきは萬七に「妹がり」と我通ひ路の玄の

すすき我し通は、なびけ玄の原六帖に「なよ竹に枝

さしかはす玄のすゝきよませに見えん君はたのまじ

などあれば昔より玄の薄てふ名ありされど萬葉に皮

すゝきと書しを今本に玄のすゝきとよむは誤りなる

をその訓につけて證に引はいふにたらずさて今も玄

のすゝきと云て冬も葉の枯ぬ一つ有尤ほは出るなり

すべてほに出ぬは無ものなり然るを歌のつけには

布留のわさ田のほには出すはたすゝきはほにはいづな

ど様に萬によみたる類にて穂が出るもの故に下へほ

に出ぬなどいひ下したる歌多きをよく本を持してつ

つけがらを心得ぬ人玄のすゝきはほには出ぬものと

定むるは皆誤りなりさてこゝに玄のすゝきのほに出

ぬよしによみしは此比はやく誤りしを傳へて心もせ

て書し物なるべし

秋はつる 匂の我をあきて六君へうつり給ふ心も薄と

ともにほにあらはれて見ゆとこなたよりもうらみか

へすなり上にはほに出ぬといへるをこゝにはほのめ

く云々となつたたるも歌の常なり

わが身ひとつ 或説「大方の我身ひとつのうきからに

なべての世をもうらみつる哉

らうたく 匂の

人も 薫をさす

菊のまた 白ぎくの盛過て後に紅葉めきてうつろふ盛

を又めづる物なりさてこゝはそのまたよくもいろづ

きはてすといふなり或説には誤れり

わざとつくるひ ませなどよろしうするなり

いと見所ありて 是はよくいろづきたるなり

花の中に 朗詠に元横が作不^{アラム}是花中偏愛^{アラム}菊此花開後

更無花

なにがしのみこ 或人西宮左大臣は王孫なればみこと

も書りといへり 河海に西宮左大臣庭前靈物降居^ニ

樹上詠前遊小兒詠此詩教作者本意盡字兼請琵琶授

秘手曲小兒醒^{廉承武之親也授}天人びはを教へたる事は

ね覺の物語に有り廉承武が事なりとありね覺物語今

はなし 御ことさしおき給ふ こゝは琵琶なり該の類はすべて

ことゝいへり

口をしと 中君

心こそあさくもあらめ 末の世の人

つたへたらん事さへは 傳はむかしに同じかるべしと

なり

さらばひとり 宮

さうくしきに 淋々

さうの御こと 箒

人も物し給しかど

故八宮をいふ 此どは無をよしとす其時はかを濁るか

ばかりの事も 宮のゝたまふ

みるわたり 六君

その中納言 薫は中君の御心よせとおほす故にそのと

宮のゝたまへり

ゆるびたりければ 宮のびはは黄鐘なりしを此箒もと

より絃のゆるびてあればこはゆるびたりなどいはん

も心得がましき故に有るにまかせて盤渉に玄らべら

れたりと云なるべし

伊勢の海うたひ給 宮

わが御前をば 中君をいふ

御ありさまに 宮をいふ

としごろの御すまひ 宇治にての様

又かへりなまほしげに 宇治へ

三四日こもりおはして 中君の御方に宮の

彼殿に 六條院

おとゝ 夕霧

あなたに 寢殿へ宮の渡りて

この院を 二條院なり

ひきつれ 宮を

こちたきを見るに 中君の方の女ばう

くしいたかりける 頭痛と云なるべし或説に届いたき

といへるはいさゝかかなはず

御身づからも 中君

こもりゐなん 山里に

年もくれぬ 此巻にて二とせ暮ぬ

例ならぬさまに 去年の五月よりはらみ給へば今年二

月に御子うまれぬべし

いといたう 中君

后の宮 明石

三とせ 匂の宇治へ通ひ初給ひしより三とせなり

ひと所の 匂宮

女二の宮 此宮の御母の服をはりつれば薫にあはせ給

はんとて御装束の事あり

みかどの 今上

御うしろみなき 御母女御のおはせで

つくも所 作物所にて物の飾などする所也

すらうども 朝廷に事有る時は國守に用度を仰てせさ

せ給ふ此度はことに數多の國司に仰有となり

やがて其ほどに 御装束の時薫まゐり給へどなり

男がたも 薫

れいのこと 薫の心のくせ

此御事のみ 中君

なほしものどか これは春の縣召の時京官に申行ふ事

有るが猶其時に行はれぬを後又執筆の申行ふを直物

といふ此とき薫權大納言になりて右大將かけ給へる

なり

右のおほい殿左にて 紅梅右大臣左大將を辭て時の右

大將なる人左に轉り給ふ故に薫其右大將になられしこよひつかさの人に 初任の大將は右近衛の中將以下

所なりけり 闕所

よろこびに 薫慶賀

此みやにも 二條

いとくるしくし給へば 中君のなやみを云

こなたにおはします 匂宮

やがてまゐり給へり 宮のおはすゆゑに慶にまゐりし

なりひんなきかたにと なやむ人有は僧なども立

こみてみだりがはしき所へしも御入候やと匂のた

まふなり

あざやかなる 匂宮さうぞくあらためてあひ給ふ

おりてたうのはいし給 花鳥拜賀などに來る人には主

人南階に下て答拜揖讓の作法ある也薫新大納言拜賀

に二條院へ來り給ふ束帶なるべし然るに匂宮は直衣

下費てに答拜ありめづらしき事なるべしとあり今思

ふに昔の皇子は臣の大臣の上にて有り中にも此宮は

殘にもあればかくてこそおはさめ且光源氏の元服の

時だに大臣の上に座ると有は此作者の意なり夫をお

してこゝを見るべきなり

を請じて饗ありて祿を給ふ也その時かおもとの親王

などおはする事故に此宮をも請じ申給へり大將初任

の儀西宮抄に見ゆ

あるじの所にと 匂宮を垣下に請するなり是はかいも

とあるじと云て其あるじかたの又あるじの如きさま

なり故にあるじの所と云り

さうじ奉り 匂をなり

なやみ給ふ人 中君

たゆたひ給める ゆかしともおぼさぬさまなり

左のおほいどの、 夕霧

皇下 孫んがのみこ 親王

大饗に 任大臣の大饗にも劣らずなり

この宮 匂

まづ心なければ 中君の御なやみにて

めざましとのたまふ 中君をおぼす故に

おとるべくもあらぬ 中のきみは先帝の八宮の御女な

れば

たゞいまの 夕霧

よろこびにそへて 薫自の悦の上になり

おはしましたりし 匂宮の

たちながら 薫

かくこもり 宮の

宮の御わたくし事 匂宮

大將殿より 薫

とんじき 北島李部王記に天曆四年七月七日是夕藤女御

有産養事産婦御重十六合破子飯七荷屯食八具恭

手錢二萬贈物兒衣襪各五重納支佐木宮二合右白組養使大

藏丞藤原守忠

恭てのせに うぶやに錢をうつ事有その募もの、恭な

り

わうはん 梳飯

こもちのおまへの 九記に天曆四年閏五月五日昨日自

中宮給産餼息所前御重廿枚又曰皇子御衣十襲襪

五具云々

いつへがさね 五重

御むつきなどぞ 襦袢

宮の 匂宮

せんかうのをしき 淺香の折敷

たかつき 高坪

ふすく 花鳥粉熟は五穀を五色にかたどりて粉にして

併になしてゆでて甘葛をかけてこね合て細き竹の筒

をして其内にかくおし入て暫おきてつき出し其姿

双六の調度のごとくまなふなりうつば物語に内侍の

北のおとよりまらうどの御さかなおほみきまぬら

せ給ふそれに打つゝきてふすくまぬれり又或説に點

心なりといふ右の物語りにも酒さかなにつゝきてあ

ればさる事なり

宮のたいふをはじめて 中宮大夫

内にも 今上

おとなび 人のおやと成給ふをいふ

大い殿 夕霧

宮の 匂宮

御みづからも 中君の御心を記者のおしはかれり

大將殿 薫

おとないとて 中君又人のおやとなり給へばなり

宮 匂宮

大將殿 薫

その夜の事は 智取も一夜二夜はひそかにて三日の夜

にあらはしとてことにとりはやし祝ひごともあるは

大方の例なり夫が中にはは内内の事故に薫も忍びて

参り内にもおほしはからせ給ふたまふなるべし此

末にさへ忍びくゝに参り給ふとあり

いつくしう 嚴儀なり

あかず心ぐるしく 薫しも猶ことたらず外よりは心ぐ

るしきなり

御ゆるしは 薫に

たゞ今かくいそがせ 是は次下におりみさせ給ひて後

などこそ皇女はたうども給はせ給ふべき事とい 我はまして

ふを先いふなり公の婚の事は繼嗣令に凡王諸王娶親 ひろひたりしや 落葉宮

王娶五世王者應唯五世王不得娶親王是古 宮はげにと 落葉

へよりの法なれど此文に光源氏は一世の源氏といふ 大藏卿よりは 女二宮の御母方の御をぢ

中にも始めより大臣の上とし給ひて臣とはことに聞 かの御かた 女二の方

え薫はた二世ながら冷泉院の御養子とすれば又一世 けいしにおほせごと 其人々の家司の内より仰給ひて

に同じかたぐもつて王娶親王てふにもとづきて なり

きし方のためしなきまでにもてなさんと今上のを、 玄のびやかに さすがにはからせ給ふなり

しき御おぼし有る故に書きしにや來し方の例無とは かの御せん 薫の人々

右の令を取捨して用ゐしたためし今を始めのごとくな とねり 是は牛飼

ればなり或説に擧しは皆今上の皇女をゆるされたる わたくしごとの おほやけめかすたうどのむことり

にあらねば用なし の様に入立てねもごろにせさせ給ふなり

去のびくくに 薫

猶わすれがたき 大君又中君の事

ならばぬ 薫は皇子ならねば内住のさまなる事の心お

だしからず物うきをいふなるべし

まかでさせ奉らん 女二を薫の里亭へ

は、みやは 女三

おはしますとんでん 女三の

いとかたじけなからん 薫の恐がましとて

御ねんすだう 女三の

うつろひ 女二宮

いかゞとおぼしたり 女二の御爲をおぼつかなかくおぼ

すなり

心のやみは 子を思ふ心のまよひ

は、宮 女三

御つかひあり 内より

この御ことをなん 此女二の事

この宮の 女三

聞えおかせ 今上へ

かく世をそむき 入道し給へど

きこしめし 今上

いれ給 給の字異本に無きは少しことたらす

御よういふかゝりけり 女三の御事には今上の御心づ

かひ淺からぬなり

かくやむごとなき 今上と女三と御互になり

もてかしづき 薫は

宮の 中君の方

わが君のいか 海河九記に五十日或百日御餅事天曆四

年八月五日儲宮降誕之後當百日依世俗例一供御餅

云々

みいれつゝ 薫御心を用るなり

宮の 匂

こものひわりご 籠物檜破子

例の宮の 匂

心のなしにや 見る人の思ひなし

今はすこし 薫のさま

おもくしく 大將となりみかどの御むことさへいへ

ば

いまはざりとも 中君のおぼす

まぎれ給にたらん 女二を得て後

ありしながらの 薫は

あいだらなく 俗に心もせで人に頻に物をいひ付などこの頃おもだたしげなる 女二

するをあひたてなしといへる即是にてこゝは薫の今いつしかなどは 御子のあれんは

は前の心もまぎれつらんと思ふに猶頻にうれへのみ君の 薫をさす 薫のかたよれる心を記者の評してす

の給へばいふなり然らば此語は問へだてなくの意か べなき君が心なりと先づいひて次ぎくくに猶評する

又愛だつ事なきてふ意か今は假字のみだりになりた なり

ればうたがはし愛はあい間はあひだなり猶其意を考 めしく 女々しく心のかたよりたる人の上を聞つた

て定むべし へていひなすこそとなり

わすれがたう 中君の方

おはせましかばと 大君の方

うらやみなく 中君の六君につけて物思と大君の女二

によりてなげき給はん思ひも同じからんとなり にごそあらめ常さまの心おきてなどはよく有をみか

かのうちとけはて、 大君の薫に どの御らんじ得給ひて御むこともし給ひけめとなり

わりなき事 薫の係想 をさなきほどを かく生れ給へるばかりの御子を見せ

うらみらるゝ 匂に たまへるへだてなきを薫の思ひ知るなり

さらなる事なれば 匂宮と中君の間の御子なればうつ 心やすく 二宮につけて

くしさいはんも更なりとなり をりつれば 古今「折つれば袖こそにはへ梅花有とや

わがものにて 兒をいふ こゝに鶯のなく

よの思ひはなれがたく 世の中を思ひ離れがたきなり わづらはしがる 古今「梅花立よるばかり有しより人

いふがひなく 大君 のとがむる香にぞしみけるてふ意にてよその袖にも

よのつねの 世人の如く我にぐして後 うつるばかりの香なればあやなく人やとがめんとわ

ぶるなるべし

四月ついたちごろせつぶん 春と夏との節分より前に
なり

あすとの日 女二の宮の明日渡り

たまはん前つ日なり

うへわたらせ 今上

藤の花の宴 西宮抄に天曆三年四月十二日於飛香舎

有藤花宴以藤花宴以殿上御侍子立南廂有

種代南東二三間卷簾云々

あるじの宮 女二宮

左のおと 夕霧

あせちの大納言 或説に此末に昔すぐれ給へる御聲の

なごりなればといへるあせちもこゝにいふと同人と

見ゆれば紅梅大納言なるべしといへりされど今は右

大臣なるべければいかゝあらんもし前々も前官を書

きし事もあればその類にや

とう中納言 毘黒の御子だち二人なり共に女二の御母

の姪なり

みこたちは 誰にや

三の宮 或云匂宮なり

ひたちの宮 匂の御弟

南の庭 西宮抄内宴云南庭藤花下賜近臣

こうらうでんの 右同抄同年云廊東設樂所座或説云

藤壺にての宴なれば後涼殿はよしならうの東にと

有しを誤れるなるべしと今考るに右の西宮抄にも廊

東とあれば此説いよよし

かくそ 樂所

宮の 女二

入道のみや 女三宮

きんのふ 或説に薫のまゐらせ給ふを夕霧のおと

取つき給ふなり延喜帝勤子内親王に賜し箏の譜を九

條右丞相の方に傳へりたりしを丞相の息女中宮安子

と云よりつたへて村上帝へ奉りし事を花鳥などにも

いへり

おととり給ひて 夕霧なり

ゆめに傳へし

よこぶえの巻にありしかしは木のふえなり

めでさせ給ければ かねて今上の

三宮 匂

大將の 薫

けふぞ世になき音の 横笛の巻にみづからも更に是が

ねのかざりはえ吹とはさす思はん人にいかで傳へて

しがなど柏木の常のたまひし事ありさてこそこゝ

に薫の得てけふぞ世になきね云々とはかきたり或人

もかくいひつ

宮の御方より 女二

ふすく 上に注せり

ちんのをしき 沈香折敷西宮抄天曆三に沈香折敷四枚

紫檀臺以土器様銀器供御肴粉熟有赤添火爐銀鈍

子一是を以てこゝを見るべし或説に楊器てふ物有と

書きたれど古書に様器と有て楊器と書ける物なし右

の以土器様銀器云々と云をこゝにはたゞ白がねの

様器と書けるものなり

十二だんのたかつき 紫檀高坏

藤のむらごのうちしき 藤色にむらこく染たるな

りうちしきは高坏の下に敷なり

をりえだ 藤の枝

玄ろがねのやうき 銀の様器

兵衛のかみ 右に云しひげ黒の息

御盃を参り給に 御盃を献る人御鈍を取人共に時の一

二人の人のする例なり此時は略してかゝす

おととゑきりて 上首として夕霧に御盃を賜せしをい

つも頼りて我のみ賜るは使なければみこだちへと申

べけれど夫はいよゝ常あるべき事故にけふは大將

こそとて御盃をゆづるなり

大將に 薫

はかり申給へど 薫恐を申

御盃捧てをしとのたまへる うつば物語枕冊子などに

御物まいる時鳴高をしと云ていましむる事あり其も

上を恐れ敬て人をいましむるなれば天盃を捧ていふ

も同じ心に落べきにや猶或説など別に記す

別記花鳥ををしと云ふ事一向ゑらぬ事なり河海の説

は今案なり小右記に攝政六十賀也左大臣起座献御

盃右大臣取御鈍子主上給御盃於攝政此間被

仰御言或子歳攝政有答奏云々記攝政下庭中拜

か様の例はあれどをしといふは祝言につきての事に

てもや有つらん今思ふに祝言にあらじ只敬てをしと

聲を引いていふ事か今も神の御食など奉るにもさぐる

にもをの聲してをしと長く引いていふ事あり又或説に

うつば物語にをしと云は物などまゐらすに人のあ

し音の高きを恐れよと云心なり今薫天盃を給はり給ふ時なり高きをいましむる心歎又云枕草紙にひの御座の方におもるまゐる足音たかしけはひなどををしといふ聲きこゆ

たゞ人のうちとけさぶらひて 薫の忍びくに通ふをいふ えんやなにやと 此藤花の宴を云しそく 紙燭

さしかへし 天盃給ひては別に土器をめて御盃の酒をさしうつし入て其土器にて呑なり其土器をさしかへしとはいへり呑をはりて後傍の階を下り御前に向て舞踏して座にかへるいつもの事なり

ふんだいのもとに 右同じ天曆三藤花宴に云立文臺南庭召庭燎二献歌今は紙燭とあれば文臺は殿上に立られしなるべしさて文臺と云て歌には硯のふたみは折敷などを用ゐられし事も記録どもに見ゆれど右の天曆三年に庭上立文臺とあれば歌にも内宴などの時詩に用ゐるゝいとたけ高きを立らるゝなるべし

かぎりあれば 座は位によればなり 心ぐるしきまで 下に着給ふをいふなり

後世文臺とて有は連歌する者などや作りけん 記者の歌の様にいふは中々にいかゝあらん

我こそかゝるめを見んと思しが こゝは此二の宮の御うしろみの事申せしをいふなり御母をこひし時の事にはあらず

ふるめいたりけん 歌の心詞をいふ 記者の歌の様にいふは中々にいかゝあらん

昔心がけ聞え給へりけるを 父右大臣の家におはせし時

かみのまもも きりつぼの巻に是は二の町の心やすき成べしと書ける類にて第一とするものなどいはん意にぞ侍らん

人からは 薫の人からは宿世異なる人とも見ゆれどな

上らうとて とてもなり 大將の君の 薫

時のみかどの おりゐる末には例も有こと上にも出とのちかき程にて 古本にとのたればもとよりかく 訓しなるべし

御かざしを折りて 上の御かざしを薫の折て奉ること

有しなりけり是は藤の花なる事歌にて見ゆ

ひがおぼしにやとなり

すべらきの 上の御かざしの料なれば高き枝を折といひて下は女二の宮にぐする事也よりてうけばかりたりといへり

ことなるをかきふしもなく いかでこゝに限りて歌のよきわろきをいふにや意得がたしよしわろしともこゝにはんは中々興なし

よろづよを 河海に延喜の御歌かくてこそ見まくほしけれ萬代をかけて匂へる藤なみの花てふを引れたりげにも此御歌をうつしたるによれば今のほうへの大御歌といふ説さも有べし

あなたふと 催馬樂なり前に出むかすぐれ給へりし 是を思へばげに紅梅右大臣ならんと言ゆ かへらせ給ける みかど

かけてにははん 藤かづらによる語なりさて女二と薫のこゝをことぶき給へり

上より給はず みかどよりなり かくそ 樂所 宮の 女二宮

夕霧が 藤を紫の雲といへるは拾遺集に延喜御時藤壺の藤の花の宴に藤原國章「藤の花都のうち紫の雲

かとのみぞあやまたれぬる是を以てよめるにやさて大内をば紫微といひ且紫は慶雲なれば用ゐて其雲におとらぬ君がかざしの藤花なりといへり

その夜さりなん 明る日の夜なり さながら よべの御宴にまゐりし内の女房たちをそのまゝ御送りつかうまつらせ給ふなり

けしきか かなの略なり よのつねは 紅梅 色ともみえず 薫の女二にぐしたるをにくみたる下心なり

ひさしの御車 女二はひさし有る糸げ成るべし ひさしなき糸げ 猶御料の車なるべし びらうげのこがねづくりむつ 是より下は人給歎こがねの金物うちたるなり

かたへは 右の歌どものふしもなきは聞傳へたる人の女房三十人わらは 一本に女房三十人の字なし

又御むかへの 薫より
 ほんその人々 薫より御迎の人をいふ
 かくて 薫
 ほとけになりて云々 妙佛になりて三明六通を得て我
 身の前生も大君との宿縁をもあきらむべきとなり
 くちきのもとを 辨の尼の歌前にあり
 あらましき ありさまのあら／＼しきなり
 こしに物おへる やなぐひを負たるが都人よりは負様
 ひくゝもある歟且薫のめなれぬさまの調度どもなれ
 ばかく書けるにや
 かや／＼といふ 今の俗にかれこれ口々にいふをいへ
 り今も此かを濁りてもすみてもいへり然らばすみて
 よむ方此文にてまされり
 弊うちゆるみたるもの なまり弊なり
 ひたちのせんじ 常陸の前司
 姫君の その家々にてかゝるをも姫君といへる成べし
 おいや 今もうけかへす事をおいといふなり是ぞかの
 かたしろなりと薫のおもひ得たるなり
 人々をば 薫の御供の
 馬ども 浮舟の従者の馬はたご馬など成べし

ひきさけ 牽避
 此玄ん殿は 前のは堂として後作りたるはなり
 おろしこめたる中の すだれをかけねば玄とみをおろ
 しこめたるなり
 のぞき給 薫の
 御ぞのなれば あこめなどのあたらしくなるをぬきし
 成べし
 とみにもおりで 浮舟
 みなさ心得て 内の人々
 まらうどは 客人
 わかき人の 車のうちに
 すだれうちあぐめり 車の
 御せんのさま さきに見し東男のともものさまには似す
 といふべき人の上をいふにむかへてたはむれに御せ
 んとは書けるなり
 乳母歟
 あやしく 浮舟
 れいの御事 浮舟いつも物つゝましきをいふ
 さき／＼も 過し日やどりし時にかくおろしこめて有
 しまゝにてあればこゝに人は居給はずと云りていふ

つゝしげに 浮舟の
 みれば 薫の
 いとよく物思ひ出 大君に似たらんと思ふなりかほを
 見ねばかく書けり
 あふぎをつと 右につゝしげにと云にあたる
 車は高く 女車におりのるには打板といふ物を車の前
 後と椽とに打わたして夫をふみて物するを此車は打
 板なかりしにや
 この人々 二人の女は
 やゝみて久しく 漸久しく見て下りてといふをかく書
 ける成べし又事をすが／＼ともえなきぬをやゝむと
 もいふにや然らばやゝは漸にてみは辭にて有べし
 こきうちき 深紅の袿
 わかなへいの 或云薄青の少し過たるなり
 そひふしぬる 次にひれふしたりといふはひらに打ふ
 すなりこゝは先物によりそふが如くしてふすなり
 さもくるしげに 二人の女の中
 泉がは 今本木津川と云なり
 水をよくなかりしかばよかりしなり 此夏の初めに雪
 消の水まされる意か

あづまぢを 東路は山河よにおそろしき道なり
 しうは 主
 ひれふしたり 平らげに臥なりらけの反れなればひれ
 といふ
 かひなをさして よこに臥せば下のかひなのびて出
 るをいふべし
 ひたちどのなど 常陸守殿のむすめとなり
 やう／＼ 薫
 おい人まことに 上には先おとなびたる人と見えしま
 まに書きてこゝはよく老たるを見知たる様か
 さうぞくの 前に薫よりの心よせどもの事有
 ものけ給はるこれなど 是めせとてなり
 ほろ／＼といふも くふ物の鳴音なり
 しそぎ給へど 薫の退
 心あてなるも 心高くてなびやかなるなり
 おほろげならでは 俗によく／＼の事ならではといふ
 意なり前々にくはしくはいひつ或説其はあやまれり
 あまり人にもどかるゝ 人にたがひたるよし前々に見

この殿 薫へさきに浮舟の事を語りしなり

御心ち 薫の

御供の人々 薫の

心まらひ 記に有意の字をよめり

この君を 浮舟を薫の

物いひふれん けふぞ浮舟に薫の

日くらし給にや かの御打やすませ給ふと云を尼の聞

ておしはかるなり

れいのみぎうの 薫の御庄の預りより進るなり

こなたにも 尼の方にも

まらうどの 浮舟を云

はめつるさうぞく 尼のさうぞく形など

かはらかに 前々に出し語なり

きのふ 尼のいふ

此老人 浮舟の女房

此いづみ川の 波高くおそろしかりし事上にあり

むごに 或説無期にてかぎりもなくてふ意と云り

ためらひて すがくとなりかぬるなり

おこせば 浮舟を

あま君をはぢらひ 浮舟のさまなり

そばみたる かほを

これよりは 薫のかたより

かんざしの 髪つきなり

かれをも 大君

これをみるに うきふねなり

いらへ打する聲 浮舟いらふるなり

宮の御方 中君

聞ゆ おほゆと有べき所なり

これより口をしからんきはの 浮舟よりも品下りて

かよひ聞えたらん人を 大君に似通ふなり

まられ奉らざりけれど 故の八宮には

世中におはし 大宮は世にまだおはすと云ばかりに薫

の同じ如く思ふと云て浮舟の愁る心をもなぐさめん

といふなるべし次になぐさめ所ありといふは薫の自

らの心こゝは語の様うき舟の心をいふと見ゆ且神代

紀に天稚彦の身まかりし後そのうからめ子など味鉏

高ひこねの神を見て我あめわか彦は猶おはせりと云

て衣帯にとりかゝりてよろこびし事有るをもてこゝ

は書きつらんか

ほうらいまで 長恨歌のむね前に出たり

人のとがのつるかほりを 薫の例のかをり

君も 薫

さうじぐちに 障子

折しも 薫のゝたまふ

こそは 去年

かの母君 浮舟の母

いとかたはらいたく 大君によそへて見給はん事の

のどやかにも 女二八まわりそめ給ふ頃なり

又此月にもまうでて 初瀬へうき舟のまうで給てなり

たいすぎにし 故宮の御事をおぼし問なり

かくおはしますとも かの母君のそひ給はねば薫のこ

こにおはしますとも申出ざりしなり

み中びたる人ども 薫のゝたまふ

げすどもは 薫の下衆どもはえかくさでもらしつらん

かとなり

ひとり物し給らん 母のそはぬがよきとなり

かほとりの 故大君に似たる人にあふやと草木を分て

こゝまで来しといふなりさて實はかほも物いひも似

かよへるを右に見知ての上にてかくはよみ給へり

○かほ鳥は萬葉に多くよみて是はよぶこ鳥のこゑは

かほうくと聞ゆる故にかほ鳥ともいふなりさてこ

こには其詞につきて貌のことにかりてとりたるのみ

或説にうつくしき鳥なりといふはおしはかりにて且

本を定めて轉しも借りもせし事を思はぬ故にさる説

の出来るなり

いりてかたりきこえけり

辨尼うき舟君に語るなり

東屋

せんにはなり
おぼしはかりて 女二の方に専らはかりたるべき節と
なるべし

此卷の名は「さしとむるむくらやしげきあづまやの」かのおま君の 辨尼なり

あまり程ふる雨そゞぎ哉てふ薫の歌によれり扱あづまは、北方 浮舟の母なり
まやは和名抄に四阿唐令云宮殿皆四阿とてあづまや たび／＼ 尼よりは

とよめり然れば四方にやねある家の事なれば遍く端 まめやかに 薫の心を母のおしはかりてなり

有るよしの名か又後の人東やと書くは語によれる借 たゞさまでも煮り給ふらん事む かしゆかりと尋ね
字のみか又昔やまとべにては眞屋（兩づま）にてのみ有 知り給ふばかりとなり

りしを東の國にては四方つまに作られし爲にその名 をかしよう このをかしようにて哀にめでたくと思ふなり
となりしかの薫大將廿五のとしの八月より九月まで 人の御ほどの 薫の時めき給ふこと

のこ此卷にあり

つくば山 浮舟今は常陸の前司がむすめの様にてあれ

かすならましかばなど こなたの敷ならぬが口をしき
なり

ば「つくば山葉山茂山しげけれと思ひ入るにはさは 常陸の守は親王のかくること故に
らざりけりてふ歌にて昔けり 介ぞことをばとるをこの本にはすけを強てかみと書

わけみまほしき 繁き山なれば此語あり

けるなるべし

御心は 前の卷にいへり

母なくなりける 前妻の子

は山のしげりまで 此の山は葉山にて即歌にしげ山

このはらにも 浮舟の母

あながちに思ひいらんも 浮舟を強ひて入立ちてももの

姫君とつけて 是は末に少將の妻となる
すぎ／＼ 次々なり

こと人と思ひへだてたる 浮舟をば守の心に

ど家富みたるにひかれて女房の集來てつかふるな

常にいとつらき物に 母君は

り 富みたれば

もてなやまゝし同じごと ましのし清音ことこの濁る

さうぞくありさま かうしんをし 或説に庚申をしといへり茲からは夜も

べし

物にもまじらす 浮舟は

すがら物語ぶみの心を論じなどするを俗にさいふに

おとなびいふ おとづるゝなり

やあらん又勝劣などの事にて降進といふ事はあらず

おとなひさせたり むことりて子など有なり

や考べし

わが姫君を 守の私ものゝ様にかしづく故に我といふ

このけさうの君たち むすめを

なるべし下にも此女を守のあこといひしなり

らう／＼しく 是は次の語によるに浮舟の事なり

まもりて 大切にするなり

かまひし所など 先々

とくいかめしう 徳にて富めるを云

此は、君 浮舟の母

ながらひも 妻の方も徳ありて富めるをいふといへる

この君は 少將

だみたるやうにて 拾遺「あづまにてやしなはれたる

さはいへど 是は薫の尋ね合ひしてふ事をば聞けど實

人の子は否だみてこそ物はいひけれ

にはいかでと思ひていふなり

がうけのあたり 豪家にて時の大臣家などをいふ

この御方に 左近少將

いとまたくすぎまなき きすくにまたくてやはらびた

とりつぎて 文を

る魂のまじらぬなり

かへりごとなど 浮舟より

なほ／＼しきあたりともいはずいきほひにひかされてよ

心ひとつに 母

きわかう人どもつとひ 此守品は受領とていやしめ

かみこそおろかに 浮舟をば

我は命を 母は身にもかへんとなり
みつきなば 見著

八月ばかりと契りて 少將をむことりせんと
めをはつかに はづかはわづかといふに同じこの心

はその調度の所せきをいふといふ説あれどことばた
らはす聞ゆもし古歌などの語によりてまどうひ琴の

ことをいふにはあらぬか考べし
さしいづるばかりにて 此所を調度の所せき事として

はこゝにことばたらす
ないけうばう 河天曆御記に天徳三年十月九日召内

教坊妓女十人合奏系竹
こくのものなどをしへて 曲の物

しとをかき夕ぐれなどに引あはせて 樂の師と女と
合奏するなり

泪もつゝます 守
さすがに あらくしき人の

はゝぎみは 浮舟の
あこをば 守詞

ちぎりし程を 八月と契りしこと上に有
わが心ひとつに 母

人の心の玄りがたきを 少將の心
つたへそめける人の 媒人

おやなど物し給はぬ 浮舟は實の父のおはさぬを云
心ひとつ 母

打あはぬさま 雜事とちたらはぬ事あらんかとなり次
々にもあり

わかき人々 守のむすめどもなり
思ふ人ぐしたるは 父ぐして有をいふなり夫有をいふ

といへる説はわろしこゝには上の浮舟の父なしとい
ふに對へていへるなり

思ひゆづられて 其文に
この君の御ことを 浮舟

うしろめたく わが無からん後
物を思ひしりぬべき 少將は

萬のつゝましきを 御父もなく物もたらはぬをはづべ
きを末のうしろめたさにさる事もわすれて物するとなり

もしおもはずなる 守の子ならず物も打あはぬを思ひ
の外なりと少將のおぼしてはなり

まうでて 媒人

けしきあしくなりぬ 少將
人ぎゝも 守の實の子ならずはいかなるおとりものに

やと人もいひ又外のむこととのなからひもけおと
りなんとなり

いとほしく 媒人
女どもの 妹のかの西の御方に有につけて文のつてを

もせしとなり妹なる事下に見ゆ
中にかしづく 有るが中にもなり

かみのにこそはとこそ 守の娘になり
もたまへらん 持なり

のたまはせしかば 少將の
とり申しなり こゝは事執申しとのみ見ても聞ゆ

れど此次々に此語は御けしきとる事にいへり然れば
こゝは少將の御けしきをうけてせし事ぞといふなり

君いとあてやかならぬ様にて 此少將常はあてやかに
け高きふりし給ふをこゝにいたりていやしげなる心

有るをいはんとて先そのかたらふ時のけはひをいひ
おとしたるなるべし

かやうのあたりに 受領などの邊になり
人のをさく 世人なり

今様の事にては 今の世のならはしは受領の聲に成り
たるもいとめてあがめ且萬に事足りてうしろみする

にはさすがに世人のゆるさぬつみもかくして有る人
も有りとなり

同じこととうちゝには思ふとも 浮舟も守の子に同
じ如くに其家の内には思ふともなり

へつらひて 君達の受領にへつらふよと人のいはんと
なり

源少納言讃岐守 前の妻の智二人なり
うけられぬさまにて 眞な女の智ならねば守の心によ

くもうけらるまじきなり
まじらはんなん 相むこなどに

この人 媒人
ついそう 此媒人は人についそういひ又その時につけ

て事を變ずる奴ぞとなり
うたである人の心にて こゝは轉の字をうたゝとよむ

に同じくこと様にうつる意に用ゐたり次にいづるも
是に同じ

いとくちをしう 媒人の事ゆかぬを我もほいなく少將
の心もいとほしとなり

まことに守のむすめと 實心に守の女をと少將のおほ
 さば又一人侍りとなり
 まだわかうなどおはすとも かのひめ君といふ女の事
 なり
 なかにあたるをなん 今の腹に三人あるが其中女なり
 姫君とて と名づけてなり
 いざやはじめより 少將のいふ
 うたてあれ 別様に轉せるをいふ事上に同じ
 かのかみのぬしの 一本にかのぬしと書きたるは音
 便を直に書きしなりかみと書きてかんとよむぞよき
 老なあてにえんならん 品貴艶
 ことうちあはぬみやび 物たらはぬ也 よろづの事は
 たらはずまづしうしてみやぶりのみ好む人は末もさ
 のみはえあらで心ぎたなきことにもなりあふるゝあ
 りその時には人に人とおもはれぬさまなるも有る
 ぞとなり
 すこし人に 今の問
 何かはさもと 守のゆるさば我は何かはさしもいなま
 んとなり是は前の女をば心ゆかぬよしいひたればそ
 のさまには此度は何かはいはんとなり

此人は 媒人
 たゞいきに 媒人
 とり申べきことあり 御けしきとり申べきなり
 なまあらしくしき 本よりのぶこち人なり
 いはせられたば 人して
 かたらひがたげなる顔して 守のさるけしきなれば媒
 人も物いひにくげなる貌したるなり
 うちの御方に 北方をいふ
 せうそこ 少將より
 おほす程に 少將の
 申けるやう 少將へ
 かの殿の 守
 へつらひたらんやうならん 君達として受領にへつら
 ふ様に聞えんとなり
 たゞわたくしの 受領よりいとうやまひて
 手にさゝげたるごと 如なり
 さるふるまひ 舞ともなり給ふを云
 少將の君は 是は右のかしづきうしろみの事にかゝりて
 有る人もあれど少將はまかしながらさる事まで餘り
 に強ちにはのたまはねどもと媒のいひなすなり

やうに二 語を略けり
 をさくうけられ給はで 老うとに
 けをととりて 相むこより
 たへ給ふべき その事に堪なり
 もとの御心ざしのまゝに 少將は實に守の女を得ん本
 意なればその本意のまゝにとなり
 みけしき見て 守の殿云々
 仰られつれば 少將の
 同じ事に 實子と
 人なれど 浮舟を云
 わらはべあまた 守の子の多きなり
 はかしくしからぬ身に 守卑下していふ
 思ひたまへあつかふ その子どもを
 はゝなるものも 浮舟のはゝ
 これを 浮舟をば
 おもひわけたることも 守の
 ともかくもくちいれさせぬ 浮舟の事には守の口入さ
 せぬなり
 仰せらるゝ事 少將の君は
 めのわらは かのひめ君

のたまふ人々あれど 外にも
 うしろやすくも かの女を我命の中に
 右大將殿にも 此少將の父のよしなり 此守家の子に
 てとあるはその始は此大將の家の家縁にや
 わかくより 守
 きやうざくに 景遮にてほめたる語なり是は考課選叙
 などの令の語を常にもいへるものなり
 はるかなる 陸奥常陸などの任
 うひくしく 中絶えて後は今更物新しくなりたる也
 この人の 浮舟の母
 よろしげなめり 媒人心
 なにかとおほしはかるべき 即媒人のいふ
 かの御心ざし 少將
 ほとりばみ 片ほとりに入こもるをいふ俗語なり
 人がらは 少將を媒のほむる
 また此頃の御徳なきやう いまだ此程は若く官淺くて
 御徳なげなれどとなり是をうけて下にも守が此頃の
 御とく云々といへり
 おのづからやんごとなき もとよりやんごとなき生得
 をいふ

なほ人 直人

いさほひには たゞ人のいといさほひ有りといふよりは
は今も増りたりとなり
こたひのたうは 來年の藏人の頭には必成り給はんと
なり

此頃の御とく 上にまた此頃の云々といへるをうけて
守のいふ
おへずして たとひ御かしづきをなさんに命こらへず
してまかるとも寶物又領じ侍る所々皆參らせんと
なり

御くらぶからこで給

こでは言出を略きたる俗語か然

これは 此女をば

らばでを濁るべしさてこゝの事は皆媒のそらごとな

おぼしかへりみさせ

むすめが末々

り何處にも媒のそらごとはさるものに行りける戦國

大臣の位をもとめん

功によりては萬葉十六に「此比

策に周地賤き媒爲其兩擧也云々

朝臣の妻を 少將をさす

のわが戀力あるしあつめ功に申さば五位の冠又落く

ほ物語に中將のからうじて通ひ給ふを三公の功にも

はや 者よなり此者をわの如く唱ふるなり

などはいひたればむかし常にいひし事なるべけれど

寶を以て成べき官ならぬを田舎心にていへるさま
るべし

われしあれば 御かと

いとはひと有るべき

此むつびをせんは少將も我女も末

かうざくに 上にきやうさくと有とこゝのかうざくと

いかなる幸の出こんとての事ともえらすといとく

心にのりたるいひごととなり

同じ事と見ゆ然らば景の字有しをかなの誤りならん

こゝもきやうとなほすべし

いとうれしくなりて 媒

かう聞え給ふ 如是なり

いもうとにも 西の方につかふる

あなたにも 浮舟の方

ほかさまにも いひはげますなり

聞ゆれば 少將に

いとおほくよげにいひつゞくる

守の御爲に心おか

いとあさましく 守

申あかすとなり

日をだにとりかへて 浮舟の方にちぎりし

おほしはじめける 是は落着をまづいふなり

ひなびて 守が

大臣にならん 或は大臣にならん又職祿をとらんなど

二つかさねて云なり

そくらう 或説に贖勞の字をあてたり然らば功勞の爲

御方をも 浮舟

又じちをたづねえらん人も 實には八宮の御子なりと

にあがなふ意か罪を贖ことはあれど勞を贖てふこと

えらん人もかくて人によりて在るからはさ有るべき

おとりの人ならんなどおとしめんとなり

は聞かず今思ふに職祿をとらん云々といふをそくら

そゝめきありくに 北の方心そゝめければ守の在方へ行

う云々といふにや有識をいうそく縁をらうそらうと

たる成るべし且そゝめきは古へはすきといひつ古

云類皆此頃のとえなりとらん云も贖勞にては聞

こなたにも 浮舟の方にも

えす

北のかたには 少將

いさやとおぼしたゆたひたるを その理いさなりわき

かみとよりいきて 北方の居たる前へ

なにか 媒のいふ

いひつゞけて かの媒のいひし事をなり

かこの御けさう人を 前にひたちが實のむすめを得ん

かの姫君 同じはらなれば

を本意とするよし多くいひたるを即吾子のけさう人

といひなせり此下には又何か人の異さまに思ひかま

たいなかのこのかみ 浮舟は三人が中にてのあね

へられける人をしもと思へども同じひたちがいひた

いかならん 媒のことよきを

ればこゝに右のごとくいふは俄にはら立てかくいへ

る成るべし

思へども 少將は

おほけなく心を 北の方の身に負氣なき事にて却てを

つらしと 北方に

またくかしこき君にて 風流にも理りにもよらず只利

徳の方に余くさかしきといふ成るべし

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

源氏物語新釋 東屋

源氏物語新釋 東屋

五千五百七十九

さなしとなり
 めでたからん御子の 一本に御子のとありこゝになき ことなほに 浮舟のかた
 はわろし守も故宮の御むすめてふ事は知ぬべき事な おとり給はじとは 下に是も御さいはひにて違ふ事と
 れば御子の云ふかまた去らねどわざと人なぶりにい も去らずとめのがいふ同じ心に北方も思ひなぐさ
 へるにも有べし むなるべし

ようせさせ 或説に要の字とすさも有べし用の字あて めのとふたり 北の方と
 たるはわろしさて餘りにめでたきに過て人のもとめ 同じごと 守の子も浮舟も同じ如く己は思ひあつかふ
 がたからんとはほめておとすなり とも實には浮舟の智とあらん人の爲には命も惜から
 いやしくことやうならん 賤と卑下する様にてあぐる ず思ふを少將は此君を親なしと聞てとなり

なり
 いやしくも 是は荷具にてかりにも意なり
 かしこくおもひくはだて 北の方
 もはらほいなしとて 専ら少將は浮舟を本意ならずと まだおさなく かの中のむすめ
 て さしこえて 浮舟をこえて

ほかさまへ思ひなり給へぬるなれば 上に媒のはげま なるべしや べき物かはてふ意なり
 せたる語をうけて云なり
 おなじくはと 外へうつさんよりは かく心うき少將を中娘の
 御心をゆるし 少將の御心のまゝに吾子をあはせんと あひくにてあるうき世の人だちなれば今さらにも
 申せしとなり かくにも口入せじとなり
 あふなく 或説奥無にて淺々しき心と云へり

去たてられたるかたを 浮舟のかたなり

御さいはひにて 浮舟の末に

たがふことゝも 今少將の事など違

かく心くちをしく 少將は

あたら御さまをも 浮舟の

みしらざらまし あはせぬるともえみしらざらまし

左のおはいどの 夕霧

あせちの大納言 紅梅なり

式部卿の宮など 薫の御をちかけろふの巻にてうせ合

へり 此かたへ薫を髻にせまくせしなり

いとねもごろ 女三

かの母みや 中宮

宮のうへの 我を

人かすにも 守をいふ

このいといふがひなく 心をいふ

心にあはぬ事をば いさかひていひはらしたりとなり

かなしくてぞ 浮舟を

ことなほに 浮舟の方

あらせ給へや 中むすめの方に

やがて 即なり

とばりなど 几帳など

とばかり 暫なり

ことなほに 浮舟のかた

おとり給はじとは 下に是も御さいはひにて違ふ事と

も去らずとめのがいふ同じ心に北方も思ひなぐさ

むなるべし

めのとふたり 北の方と

同じごと 守の子も浮舟も同じ如く己は思ひあつかふ

とも實には浮舟の智とあらん人の爲には命も惜から

ず思ふを少將は此君を親なしと聞てとなり

この君の 浮舟

親なしと 浮舟をば

聞あなづりて 少將の

まだおさなく かの中のむすめ

さしこえて 浮舟をこえて

なるべしや べき物かはてふ意なり

かく心うき少將を中娘の

髻にては

あひくにてあるうき世の人だちなれば今さらにも

かくにも口入せじとなり

去たてられたるかたを 浮舟のかたなり

ことにはかに 事俄

とりわたし 浮舟の方髻取の設に帳などのしつらひよ

ろしう出来て有を事俄なる事なればかたへはこび

取てあらたむまじとてことなほへ吾子をわたして髻と

りせんとなり

めやすきさまに 北方の心やりて

さばらかに 今さつはりやりといふに同じく聞ゆ

かぎりしたる所を しつらひしたるなり

御かしらに 守の

二階 雑要抄を考るに二階厨子とは戸あるをい

つしにかい 二階 二階とは柵のみあるをいへりさて玄々あしの

二階厨子は 雙おくたの二階と机足の二階厨子は

各一つおく且或は母屋或は廂などおく所も例ある事

なるを此ひたちはみだりに多く加へ置たるなりけり

玄くはへて 加なり

御かたは 浮舟

人の御心は 母君をいふ 守詞

たゞ同じ子なれば 中女も此同腹なり

こうちきのほど 髪の末小袿のたけにひとしきなり

すそいと 髪の

何か人の 北方の浮舟にと思ひし少將をしもなぞや吾

ひとがらの 少將の

あたらしく よ所人にせんがをしきなり

とられなんもくちをしく 他に

此ほどのいかめしく 本此とくのほどのと有はいひ

過たりなくとも上に少將此頃の徳なき事をいひたり

さる比故にいかめしくかしづかるゝを悦ぶ意は玄る

きなり然れば此程は此比といひしに同じ

よろづのつみ 世人のいはん事又北方の思はん事など

の取捨前にあり

その夜もかへす 浮舟に契りし夜

きそめぬ 終に來初めしをいふ

宮のきたのかた 中君

そのごとく侍らで 何ぞ事もなきにはなり

かしこまりて 恐

取かへさせんと 浮舟を

身ひとつのかげに 母のかげに隠しかねたるなり

まちなんと 中君を

うちなきつゝ 文のことばになげきくたるなり

あはれと見給ひ 中君

あふれんも 崇神紀に溢をはふると訓たればあふれも

あとはと韻かよへりいまおちぶるといふも是なり古

今集にははふらさしとよめるも同じ事なるをこゝろ

えぬ説どもあり

なまきの 故宮

たいふがもとにも 是は中君の女房の中に心あり事を

もとる人なるべし

いひやりたれば 浮舟の母より

さるやうこそ 大輔中君へ申

よのつねの事なり 世にあるならひなり

あまりいと 故宮の

むづかしげなめれど さばらかにあらぬ所と云なり

いひつかはしつ 大輔ことゝりて返りごとせしなり

いとうれしと 浮舟のかた人

御かたも 浮舟

あづまぎぬ 東にておる繩ツルなりうつば物語にふときあ

しきぬといへり

なげいでつ 下人どもへ

少將

御でゐさぶらひと 出居は客人を請せる所にて今田舎

にておもやよりさし出でよろしう作れるを出るとい

ふさむらひは夫に仕ふるもの侍ふ所

をのこゝなどのおほかるに所もなし 守が男子も多く

て所々に住なり

まらうと 少將

ほとりばみたらんに 上にも出て片ほとりの心なり或

説に智のほとりといふは誤りなり

すませ奉らん 浮舟を

思ふなりけり 中君へなげきいひやりし故をこゝにて

とく

此御方 浮舟によきゆかりの無故にかくあなづると思

ふ故に強て中君へ申せしとなり

あながちに 強なり

めのと 浮舟の

にしのひさしの 二條院の

とし頃かくはるかなりつれど 浮舟又母君にも

まゐる時は その母君又浮舟に中君のはぢすあひ給ふ

なり

はぢ給はず 中君

けはひ けしきなり

うらやましう 浮舟もわがうみまゐらせすばかくても

あらん物とうらやむも子を思ふ常なれば哀なりと書

けり

我も故北方には 中君の御母は浮舟の御母のをばなり

つかうまつると 八宮に

強てむつびきこゆる 強すとも聞べき筋ぞと思ふ故に

なり

こゝには 二條院には御物忌なりと守の方へいひやり

つればかしこより人も通はぬなり又一本にかしこに

は云々と有は守の方へはさいひたればなりいづれに

ても聞ゆ

このみありさまをみる 二條院の

宮わたり給ふ 匂宮

ゆかしくて 北方の

櫻をりたる けしきなり

わがまゝこの ひたちの前妻の子

御あたりにも 匂宮の

こよなき人の 宮を云 よろしき人々にも恐れられ給

なり

ひて御けはひこよなき宮なるをいかなる高き人ぞとて中君はこゝにならびおはすることよと見おどろきたるなり

御けはひを けしきなるを云

あはれこはなに人ぞ 是よりは中君の事をいふ

思ふときは 上に北方のめのとに語りしことあり

たなはたばかりにても いとたま／＼なりともと云也

わか君 宮は

うつくしみ 愛なり

なやまして 宮

御だい 御食机

わがむすめも 浮舟

いきはひをたのみて 守がみづから頼もしむを云

我子ながら 北方のはら

けはひこよなきを 浮舟とは

今より後も 前に守をもさるべきものと思ひしをこゝ

によき人すらかしこまりつかふるを見て思ひ又中の

むすめを后にもとおもへる様なれど浮舟には似るべ

くもあらぬけはひなどよろづにたかきとなほ／＼し

きと思ひしよりもことなる物なればおそしとも今

より後だに心は高う用ゆべかりけりなど浮舟のかたにて夜もすがらかたりて過しことの違へるを思ひなぐさむなるべし

きさいの宮 宮御母

うるはしう 宮

こなたより 中君の御方より

きよげだちてなでうことなき人の 常陸が舞の少將也

いさゝか清げなれど猶何といふばかりなき大方の人

と云なり伊勢物語なるも同じ或説にかはれりと云は

誤なり

なほしきて太刀はきたる 花鳥に北山抄に云外衛佐等

任_レ意不_レ帶_レ劍至_二干近衛次將_一帶_レ劍殿上無_レ妨仍宿

侍之時副_二猶宿物_一上自餘不能_二持上_一

おまへにて 匂の

かれぞこのひたちのかみの 細中君の方の女房たち此

少將を見ていふなり

御かたにと 浮舟

いさこの御あたりの 中君の

かみの君の ひだちの

きと聞らんともしらで 北の方の

いとしく 匂宮を見奉りて思ひやりおとしつる少將

を今見ていよ／＼となり

わが君 二つに成り給ふなり

うち見給て 宮の

御心ち 后宮の

女君 中君

出きて 北方

故うへの 中君の御母

おさなきほどにて 中君の

いにしへたのみ聞えける 御父母

みたてまつりゑらす 御母をば

あるを さてもあらるゝを

猶此御事は 大君

大將どのは 北の方詞

おはしまさましかば 大君の

せかれしも 大君北方にてまさは女二の宮にせきへだ

てられはえたまはじとなり

いざや 中君我も六君にへだてらるれば大君も同じ様

のものにて云々と先大方の心をいひて次に又語り給

ふ事あり

なか／＼に 北の方となりて

見はてぬにつけ 奥見はてねばゆかしきならひにこそ

とも思へど大將殿はたたさもあらずやおほすよし

をかたり給ふなり

心うつくしう かのうらさき事はいひ給はねばかく書

ける成べし

かの 北方詞

數ならぬ人を 浮舟

一もとゆゑ 古今「紫の一本ゆゑにむさしの、草はみ

ながら哀とぞ思ふてふ歌もて大君の御ゆかりとおほ

す故にこそとなり

此きみを 浮舟を

人も聞けり 前に女房のかたりし事

見すぐし 浮舟を

うちすて 北方身まかりなん後はなり

げにこゝろぐるしき 中君詞

かやうになりぬる人の 時うしなへる人の世のくせぞ

となり

さりとも 然ありとても堪て捨られぬ事なればなり

むげに其方に 細中君は宇治に堪こもるべき様に故宮

のたまひ掟てつる身だにかく成りぬとなり
心より外に かくてなり
まいてあるまじき さる御おきてもなければ
やつい給はんも 尼の身とせんもなり
ねびにたるさま 北方
ひたち殿とは ひなびて見ゆると云成るべし
八宮
おぼしはなちたりしに 浮舟を
かう聞え 中君の今
いにしへのうさも かの故宮の捨給ふうさなり
うさしまの 「まほがまの前にうきたる浮島の浮て思
ひの有る世なりけりてふ歌もて陸奥の任の時の事を
いひ次のつくば山を以てはひたちにも有しをいふか又
常陸にまだのうさしまてふ所有りといふ説ありさら
ば一所にて足べきを二所を出せしを思ふに上にいふ
如くならんと覺ゆ
我身ひとつのみ 或説古今に「世中は昔しよりやは
うかりけん我身一つのためになれるかてふを引きた
りされどつくば山にいひつゞけたるは猶萬葉などの
歌によれるか考ふべし

よからぬ ひたちが方には娘どもなどの求むらんな
り
身をやつすは 受領の妻となりしを云
身にも思ひしらるゝ 我ながらなり
此君は 浮舟をばわが如く口をしき様にはなさじと思
へば今より中君にまかせおきて吾はひたぶるにかけ
はなれんとなり
かこち 中君へかけ付るなり
みぐるしからでも 上に見ぐるしき様にて世にあふれ
んもまらすがほにて聞んこそ心ぐるしかるべけれと
のたまひしに同じくで實に見ぐるしからでもあれか
しとおぼすと云なり
かたちも 浮舟
こめいたる 女子めきたるなり
かどならず 一かど無にもあらずとなり
ちかくさぶらふ 浮舟につかふる女房にもなり
むかしの人の 大君
かの人かたもとめ給人に 薫に
大將殿 薫
まらうどの 浮舟

聞えさだめかね 勝おとり云さだめかぬるとなり
いとなさけなげに 大君ぶりなるをいふ
見にくゝこそ 御夫なればかくまではのたまふならん
かたちよきは人は 形よきとならぶ時は大方の人はい
とおしけたれてわろく見ゆる常の事なり
人々わらひて 御夫をおとしての給ふ故にわらふなり
おまへには 匂宮をいふ
けち奉らん 滅
またれたる 薫なり
さまをみれば 北方の
おかしげに 實なる方の人なればなり
ひたいがみ 見る女も形つくろはるゝなり
きはもなき 限りも際もなきなり
宮たちの 匂の御はらからの宮たちなり
けたいして 懈怠
御あやまちに 或説宮のおそく參り給ふは中君のとや
め給ふ故成べしそは御あやまちなりしと戯にとりな
し給へりと云へり
げにおろかならず 中君
とばかりいらへ こと少なにまめなるかたの御答なり

宮は 記者のことば
世の中のものうく 女二の様薫の御心にそまぬことゝ
みゆ
さしも 中君の心
心にはなれ 大君の事を
人の御けしき 薫の有様
みもてゆく 年へてさまゝ事につけて
おもほしたる 中君の
うらみ聞え給ふ 薫の中君を
いとわりなく 中君の心也 やうゝに薫の深き心を
しるに又恨まるゝ筋はせんかたなきまゝに打歎きて
なり
かゝる御心を 戀せじとみたらし川にせしみそぎの心
なり
かの人かた 浮舟の事なり且板の人形につけて書たり
ゆかしくなりにたれど 宇治にて見し後
いでや其本尊 前に山里のほぞんにもといひし事あり
ねがひみて給べくば 我本願は中君に有るを其本尊に
よりて我願の満て中君の御心もとけばこそたふとか
らめ君のつらきに時々思ひやまんには山里の本尊す

悉ても心すむことはあらじといふなるべし此心下の
こと葉どもに見ゆ

うたての 中君詞 別様なるなり

おかしう聞ゆ 北方の聞なり

いでさらば 薫の詞

つたへはてさせ給へかし 浮舟の母君へ

此御のがれこと葉 中君の逃れんとて浮舟の事をのた

まふを薫の意得給ひたればかく云なり中君の今浮舟

にゆづるは大君の中君へゆづりたるが如しさて終に

大君はうせ給ひしを思ひ出ればいまくしとの給ひ

ても又むかしを思ひ出るになみだぐむなり

見し人の 稜には人形にわがつみとがをなでうつすそ

の形をなでものといへりその如く大君の戀しさをう

き舟にうつさんとなり

まぎらはし給 なみだぐむを云

みそぎ川 そのなで物は川にも出てながすなればそ

の如く浮舟を捨んの御心と見ゆればたのみがたしと

なり

ひくてあまた 古今に「大ぬさの引手あまたに成ぬれ

ば思へどそこそたのまざりけりてふを以て引手多き

君なれば女の爲めいとほしとなり

ついによるせば 右の返し大ぬさと名にこそ立れ流て

も終によるせば有てふ物を此意にてその心よるせ

は中君なる事いはんも更なり

うれたきやうなる水の泡 或説はかなき世にかくの如

き事を申て戀路にまどはさるゝとなりといへど上下

へかけ合ぬ誤なり猶歌などの意か考ふべし

かきながさるゝ 入中君のか様にして我を捨給ふよと

なり

いかでなぐさむべき 大かたの形代にては心なぐさま

じとなり

うるさければ 中君

かりそめ 北方など

さらばそのまらうどに 薫詞

ねがひ 形代をとなり

打つけに としへたる願ひなるをけふにはかにてかの

方人の淺々しうおもはざらん様にいひまらせ給ひて

母のいなみてわれに面なきめ見せ給はずはとなり

いとうひくしく 薫はかゝるけ想事になれぬよしな

り

めのとの 前にめのとの不意にいひしをなりゆくりな

くと有るべきを此文にはかくのみ有るはいかにぞや

あるまじき 前に此こと出たり

天の川を 上にたなばたばかりにてもと云しに同じ

經などをよみて 法華經に云若有人聞是藥王菩薩

本品能隨喜讚善者是人現世口中常出青蓮華香

身毛孔中常出牛頭栴檀之香

まづかのとの、 此薫の近く觸れ給ふ香によりて

すゝろに 北の方

きみは 中君なり

忍びて 薫のひそかに浮舟の事を

ほのめかし 北方に

おもひそめつること 薫は

ものし給ふめるを思へば 此下に異本げにたゞ今の有

さまなどを思ふはといふ語わづらはしきのとつゞき

て有るは是は傍注なり女二のおはすを云

そむきても 上に尼にもせんなど北方のいひしなり

北方 づらきめ見せず これらはひたちか方のづらきをいふ

鳥のね聞えざらん 古今「飛鳥の聲も聞えぬ奥山とよ

めり

人の御ありさま 薫をいふ

しもづかへ 下仕

數ならぬ身に 女二のおはすにつけて數ならぬ身のい

とゞくるしかるべき事を作りなさんかとなり捨遣に

草合しける所に「種なくてなき物くさは生にけりま

までふ事はあらじとぞ思ふ此歌にて書けるか或説に

引たる歌は物に見えず例の事なるべし

まかせて 種まかすと云はたゞまく事なり

御心になん 中君にまかせ侍ることなり

いとわづらはしく 中君

きし方の心深きに 薫の前に

車などゐてきて ひたちが方より

いとほらだたしげに 智取のをりしも北方の捨てゝあ

れば

かたじけなく 北方のいふ

まばしかくさせ給て 浮舟

岩ほのなかに 古今に「いかならんいはほの中にすま

ばかは云々

この御かた 浮舟

ならはぬ心ちに 母にはなれて居る事は

あたりに 中君のあたり
 あかうなりぬるに 夜明
 玄のびたるさまにて 或説匂宮の御参りには毛車なる
 べきを忍びたると有るは綱代か女車八葉などかとい
 へり車のみならず御前などもひそかなるべし。
 さしあひて 北方の車
 なぞの車ぞ 宮
 ひたち殿の 北方のものいふなり 殿といはんはあ
 さやかによき人こそと笑ふなり
 御せんとも 宮の
 こよなの身のほどや 事の外のいやしきとなり
 たゞこの御方の事を 浮舟を思ふには母もよろしう成
 りたきなり
 正身 浮舟
 さうじみ 浮舟
 ことさらめきて 或説に人見まらぬ爲めにことなる供
 人をぐする意なり此説者田舎人なるをいふといへり
 きにくく 中君
 たいふなどか 大輔前々も出
 ともだちにて かの北方を大輔がもとの友だちぞとい
 ひなし給ふ

ゆゑくしげ かのひたち殿とこたへしを宮のうけて
 のたまふを中君は殿といひけるをまらねば宮のわざ
 とゆゑくしうのたまひなすとおぼせり
 常にとりない給ふこそ 前の薫の事など宮へこゝにて
 ことわりまらせ給ふなり
 たてゝと 立てなり或説はわろし
 あくるもまらず 中君をうつくしむ意にて書る成べし
 人々あまた 大殿の君達など
 恭うち 二條院にて
 うちぬふたぎ 前に出
 こなたに 中君のかた
 御ゆるすのほど 髪を洗ふをいへりさてさのみ洗はね
 ど櫛けづりに用るをも汗垢とかきてゆするつきとい
 へりから國にてはおもてあらふを濡といひ汗もその
 類なれどこの國にてはいさゝかたがひたり
 ちいさき 宮より
 げに 大輔が申
 おはしまさぬ 宮の
 れいはすませ 今も御ぐしすませ給ふといへり
 日頃も 髪あらひ給ふをうくおぼして

けふ迄は 八月
 九十月 此月は髪あらはぬ事にむかしはいみけん
 たいすみありき さびしくおぼせば
 いまゝわり 新参
 すにそへて 簾
 かたびらひとへを 几帳の帷の一重なり
 心にもあらで見ゆるなんめり かくれ給へと思ふより
 外にみゆるを云
 口をしからぬなんめり あしからぬを云
 いとをかしければはしちかく 浮舟
 あきたるさうじを 匂宮
 宮とは思ひもがけす 浮舟は
 れいの御心は このみ給ふ御心には
 すぐし給はで たゞに過しがたきなり
 こなたのさうじ 入り給へる方の
 むくつけくなりぬ 浮舟の心
 さる物のつらに 屏風かかへなどの方へ宮の御かほを
 むけてもて隠し給ふなり
 おほとなぶらは 燈臺ならで燈籠に火をあかしたるな
 りさてをぐらさやうなるべし

わたらせ給ひなん 中君ゆるすはてゝ例の所へかへり
 給はんとなり
 御前ならぬ方の 御前の格子はおきて外のおろすな
 り
 こなたは 浮舟のかた
 たかきたなづし 二階か中取の類なるべし戸ある厨子
 なり
 ひとよろひ 一雙なり
 屏風のふくろ 今は物につゝみて宮に入るを昔はたゞ
 袋にのみ入れたる成べし
 かく人の 常は屏風厨子など様の具をおくを浮舟のお
 はしてよりそこを常とすればさうじもあけたるなり
 たいふがむすめ 前の大輔が女なり
 おぞき人 をしき心有をいへり此下にめのとこそお
 すましかりけれつとそひめて守り奉り引もかなぐり
 奉りつべくと有又かまの相を書してなども有にてし
 らる或説に恐ろしき事といへどおそろしとは意こと
 なり
 物きこえ侍らん 右近にいふ
 御さまと 宮をいふ

女の 浮舟
 げにいと見ぐるしき めのとが語をうけて右近がいふ
 御まへにこそ 中君の
 あさましきまで 浮舟の様
 心つきなげに 浮舟
 れいの心うき 中君詞
 おそくも渡り給へば 上達部など参りて御遊有るには
 中君の御方へ宮のおそくわたり給ふこともあればけ
 ふもさあらんと思ひて皆やすみぬしほどぞとなり
 おすましかりけれ 雄々しき心をいふ事上に同じめの
 とをおぞきといへるも音かよいて同じ語なり且此ま
 しはおすしといふにまをそへたるにて辭なりしを濁
 るは誤也【春海云おすましは遅ましにて上のおぞ
 も同じ意かおぞのたはれをのおそなるべくおぼゆ】
 少將とふたりして 右近と
 大宮 后宮
 心なきをりの これはよきをりの御なやみなりとはお
 もへど御なやみの事故にさはいはで打かへしていふ
 なり常にもかく様にいふ事侍り
 きこえさせんとて 宮へ

いなまだ 一本にまだしかるべしと玄のびてさゝめき
 云々
 さりげもなかりつとて 實事有りげもなきなり
 うへ 中君
 きゝにくき人の 匂宮をいふ
 我あたりをさへ 我うちを治めかぬるといはんとの意
 か
 宮の 中宮
 右近たち出て 匂のおはす所より
 此御使を西おもてに 匂宮のおびやかすとおぼせばた
 だに御耳に聞えん爲とて此浮舟の住給ふ西表近く御
 使をよびて又とひごとするなり
 申つぎつる人 はじめ中次し人も同じく来ていふ
 中務のみや 匂の御はらから
 大夫は 中宮
 みちに御車 二條院へ参る道にてなり
 車ひき出る 宮大夫の車
 げにはかに 匂宮
 人のおぼすらんことも 中君にいさゝかはち給ふなり
 おそろしき夢の 浮舟

かくおはしましめて 宮の
 かぎりなき人と 匂宮を申
 やすからぬ 次によそにさしはなれぬことをいふ即こ
 こにこもれり
 よそのさしはなれたらん人に 中君とはなれぬ申なる
 をいふ
 かまのさうをいだし 河蓮花同し 或説降魔の相にてめのとが忿怒
 のかたちをなして宮をつとにらまへたるなり
 みたてまつり 宮を
 手をいたく めのとが手を宮の
 かの殿 ひたち
 たゞ一所 浮舟
 まらうどの むこの少將を云
 御たびる 北方の浮舟に添て外に有しをひたちが腹立
 ていふなり
 この御こと侍らざらまし 細此少將につけて夫婦のい
 さかひも出来しこなり
 君は 浮舟
 いまはともかくも さし當りて北方の事をば
 いみじく 匂宮のとらへ給ひしを

いかにおぼすらん 中君の
 さがなきまゝはゝに 父の有ても
 おぼしくつせそ 屈
 まで給ふ事は まうでなり
 あが君 浮舟をいふ
 世をやすげに なぐさめ云なり
 宮はいそぎ 参り給ふとて
 うち近き いそぎ給ふ故に少し大内の方近き門より出
 給ふならんとなり
 こなたの 浮舟の居給ふかた
 御聲も聞ゆ 浮舟の方へ
 すゝろに 下に宮もあひてもあはぬやうなる心ばへに
 こそうそぶきくちずさみ給ひしかといふはこゝの事
 なり然ればさる心の詩か歌か侍るべし下に或説の歌
 あれど夫はおぼつかなし
 わづらはしく 宮のうそぶき給ふを女君は事有がほに
 わづらはしくおぼゆるなり
 うつし馬 うつしの鞍おきたるなり
 うへいとほしく 中君の御心いとほしと宮のおぼして
 なり中君より浮舟への給ふなりうへといふはその御

使する女房のいへる語なり

まらすがほにて かの浮舟の事をば

まわり給ひぬれば 内へ

出給はじ 内より

ゆするの名残にや 前に有

わたり給へ 浮舟にこなたへ

みだり心ちの 浮舟の返事なり

かたはらいたくぞ 實事も有しかと中君のおぼすにや

となり

口をしく 中君のおぼすなり

いかに 薫の聞給は

みだりがはしく 宮をいふ

すこし思はずならんことをも 有まじき事をも

くねりいひ 女郎花の一時をくねる云々くねるは狂ひ

なり

べうこそおはすめれ 宮の御心の少しうきたるをいふ

この君 薫

人のうへなめり 浮舟

あかぬ事 心にみたぬ事を云

物はかなきめも 宇治にうしろむ人なくて残りつれば

さはふれず さのみは落あふれざりしなり前にあふ

れと有も同じく紀に盜の字を訓しいづこにても同じ

此説を放埒又は流離など書くといへるは皆おしつけ

の説なり紀に流離はさすらふとはよみたり

このにくき心 薫のけさう

いとおほかる御ぐし 中君の

おぼすらんを 中君の

聞えさせ給へとてなん 云々とてすゝめて參らせ奉る

になんと云なり

いかでかはと 浮舟はまた世をえり給はねば實なけれ

ど男の立より給へるばかりをもおもひやるかたなく

はぢ給ふをいとほしとなり

我にもあらず 浮舟

うへをたくひなく 中君を

これにおぼしつきなば 句の

御心をと 宮の

ふたりばかり 右近と少將

えはぢあへ給はねば 右近少將などにも浮舟は常には

ぢ給へばよくも見ぬを今ぞ中君のおまへにては見奉

るなり

見むたりける 浮舟を

物語いとなつかしく 中君

姫君の 大君

身もうらめしく 中君たゞひとりとなりて

思ひよそへられ 大君のかたち

あはれになん 句

むかしの御心ざし 大君の我をおぼせし様になり

いと物つゝましくて 浮舟は

とし頃 浮舟の詞なり

はるかにのみ 東に在しことはもとよりにて御あねは

いもうとゝいふべくもなく過しをかねたる語なる

べし

物はちもえしあへ給はず 繪などをこのみ給へばなり

こゝと見ゆる所なく こゝはあかぬといふ所なきなり

あてさは あてやかさなり

たいそれとのみ 大君

系はことに 繪には殊にめもとゞまらずなり

いかでかうしも いかにしてかくのみよき形なるにや

かれはかぎりなく 大君を云

これはまた 浮舟は似たるといふ中のけぢめをいへり

このかみ心に 中君は姉ごころになり

いとゆかしうて 浮舟は

いみじくおぼすとも 浮舟を哀におぼすとも宮のかく

て後はせんすべあらじとなり

ひきすゑて 右近を

もてはなれてぞいひし 實事あるべうもなき筋にいひ

しとなり

あひてもあはぬ 前に宮の出給ふ時にうそぶき給ひし

事あり或説に「臥程もなく明ぬる夏の夜はあひて

もあはぬ心ちこそすれてふ歌を引きたれど何に出た

りやまらずいか様にも此歌は心得がたし外に引くべ

き歌考ふべし

ことさらにもやあらん 事もなかりしをわざと有がほ

にの給ひしにやとなり

ことありがほには 事もありなばいとほ給ふべきな

り

見え給はざりしをなど かのとなへ給ふは事有がほな

るはいかにとなり

さうじみも 中君を云

あて人もなきものなり ねたみには貴人もなしなほ人

に同じと北方のねたみ深き心においていふなり

ゆふつかた参りぬ 北方二條院へ

宮おはしまさねば まだまかで給はぬなり

心おさなげなる人を 浮舟を云

いたちの侍らんやうなる 次によからぬ物どもに云々

といふを思ふにいたちはこゝかしこに子をほこび置

て尻もすゑす心さわがしくありし物なるにたとへて

浮舟を思ひ又ひたちが方の子の爲めにも恨みられな

どしてまづ心なくなたこなたにおもひありくをい

ふなり或説どもはあたらす

よからぬ物ども 前にもひたちが子の事をかくいへり

さいふばかりの 母の心をさなげなる人を参らせてと

云をうけて中君のたまふ

御まかげこそ 北方の目ざしを云

心のおに、 北方も有し事を聞しかばなり

いかに思すらん 中君の心には

えもうち出聞えず 箋句の近づき給ふ事は

かくてさぶらひ給ふは 浮舟のこゝに

さすがに 玄かしながら

つゝまじきことに かの句の御心を云

深き山のほいは 前に深き山に尼としてすませんなど

母君のいひしことなりそれは難なくて過すべきもの

てふをみさをとはいへり

いといとほしく 中君の

けしからず 宮の

みな人みしりためれ 右近少將など例の御心を知りて

さきにもいひしなり

心づかひして 人々も

びんなう 浮舟の爲に

いかにおしはかり給ふにかと 中君のねたみ又はおろ

そかもやおぼすらんとなり

さらに 北方

ゆるしなき 故宮の御子とし給はぬ筋は今ばかり中

し侍らず中君の御弟の筋ならでも御母君は北方の御

をばなればさるゆかりもあればおぼしはなつまじき

物となり

つなもはべるをなん 總にて筋といはんがごとし

あすあさて 浮舟は

又もまゐらせ こゝへ

いとほしく 中君は

あさましう 北方かの宮の近付給ふを

をさく物も聞えていでぬ 少しもはやくいざなはん

とて専ら物もいはでなり

かやうのかたゝがへ所 前より設置しなり

品々しからず 生れし氏よりはおとりて

心うしと 故宮のうとく定め給へる中君の方をいふ

君は打なきて 浮舟

おやはた 浮舟のさまを母の見てなり

みなさんと 見成なり

心もなく 母君を云

かのいへにも 常陸が家なり

すゑたりぬべけれど すゑてありぬべけれど也 てあ

の反たなればかくいふ

玄かゝくろへたらんを その如くかけの人と有らんが

なり

かたはらさらず 母子

かたみに 今はなれて在らんは互に云々

ざうしゝに されど曹司々々に人のあればつかへ給

へといふなり

いと心うく 此少將によりて浮舟のうきこと有となり

又なく思ふかたの 浮舟なり

をさく見れぬ 舞の方の事は

かの宮の 二條院にて此少將の様を北方の見おとした

ればなり

わたくしものに 前に

やみにたり 今は

こゝにてはいかゞ 常陸の家にては少將のさま

のどかにゐ給へる 少將の

こなたに むすめの方

いまやういろの 或説うす紅梅のこきなり

いづくかはおとる こゝにて見れば

まへなるこたち 少將

いとみしやう 前に宮にて

ことだにをしきと 古今「うつろはん事だにをしき秋

はぎにをれるばかりも置ける露哉

いできえば 宮の御前へ出消したるなり

何事いひわたるぞと かの出消を思へば歌もよからじ

とあざけらるれどなり

いと心ちなげなるさまは されど猶いさゝかは心有る

にやとなり